

KalpātāとAvadānamālāの研究(11) : TJAM 第16章～第19章

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/4795781>

出版情報 : SOUTH ASIAN CLASSICAL STUDIES. 17, pp.1-123, 2022-07-30. Department of Indology, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (11) — TJAM 第16章～第19章 —

九州大学 岡野 潔

ネパールの仏伝アヴァダーナマーラー 梵文 Tathāgatajanmāvadānamālā の研究

南アジアでの二千年に及ぶ「発達仏伝」の形成と伝承の一終着点となる、梵語で書かれた巨大な釈尊の伝記たる『如来出生アヴァダーナマーラー』 Tathāgatajanmāvadānamālā (略号 TJAM) の第16章～第19章の梵文テキストの校訂・翻訳を本稿は行う。

この作品はネパール仏教のシャーキャたちによって、17世紀の Jayamuni が率いる Mahābuddha 寺の活動に促されて初めて作られたと私は推測しているが⁽¹⁾、この釈尊伝の作品制作にあたっては、釈尊 (Mahābuddha) への信仰を高めるため、インド仏教の全盛時代に作られてネパールに伝わった複数のサンスクリット仏伝の伝承をうまく一つに統合して、プラーナ文献の如くにシュローカを基調とする形式で新たな仏伝を作ろうという壮大な意図があったと考えられる。

昨年の『南アジア古典学』に TJAM 第15章の校訂・和訳・内容研究を発表したので、今回はそれに続いて、第16章以後の四つの章の校訂と和訳を行う。

TJAM 第16章～第19章の梵文テキストと異読の情報は、楊曉華 (2015) の九州大学に提出された博士論文の中で初めて発表された⁽²⁾。私もその校訂の手伝いをしたが、しかしその校訂は留学の予定期間を縮めてひどく帰国を急がざるをえなかった事情のせいか、誤りをあまりに多く残したものであった。帰国後、揚さんの関心は別の仏伝の研

1. この推測については岡野潔 (2021)：「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (10) — Jayamuni の仕事と TJAM 第15章 —」、『南アジア古典学』16号、55-56頁を参照のこと。

2. 楊曉華 (2015)：「仏伝 Tathāgatajanmāvadānamālā の校定研究 (第16章—第19章)」博士論文、九州大学。(九州大学附属図書館のサイト、「九大コレクション」>「学位論文」に PDF がある。) このほか楊曉華には TJAM (通称 Padya-Lalitavistara) の研究として以下の3論文がある：「Padya-Lalitavistara の第16章『夢品』の研究」、『印度学仏教学研究』129号 (2013)、176-179(L); 「Padya-Lalitavistara 第17章の研究」、同上 135号 (2015)、189-195(L); 「Tathāgatajanmāvadānamālā 第18章の研究」、同上 138号 (2016)、209-212(L)。

究に移ってゆき、TJAM の校訂の続行には意欲を失ってしまったようなので、帰国から 7 年経った今、私はかつて揚さんと一緒に読んだ TJAM の写本を読み直してそれらの章の校訂の作業をとにかく完結させることにした。揚さんの先の仕事を踏まえつつ、それに数百箇所修正を施すことにより、第16章～第19章の校訂梵文と異読情報を書き改めた。そして新たに校訂されたその梵文に基づいて、四つの章の和訳を作成した。

四つの章のうち、特に第17章～第19章での再校訂の仕事は、「A 写本の筆写人 X (= Jayamuni) が記した読みを最大限尊重する」という、私が以前から用いてきた TJAM 校訂の原則に基づいた。それらの章の異読情報を記述するにあたっては、校訂の土台となる A 写本の読みが、その写本からの遠い派生本にすぎない B と D 写本のあまりに多すぎる無価値な異読の報告の中に埋もれて隠れてしまわないように、B と D の異読の報告を簡略化した。A から作られた杜撰な一伝本からの二つの派生本と思われる B と D の無価値な異読を Apparatus criticus にすべて機械的に報告することは、梵文の校訂のためには実際上ほとんど役に立たない作業であり、むしろ必要と思われる箇所だけを参照したほうがよい。そのため私は A 写本の読みさえ確かであるなら、それらの異読の記述を簡略化しても差し支えないと判断した。第17章～第19章の Apparatus criticus では A の読みを確認するためだけに一応 B 写本の読みを示したが、D 写本の読みについては B 写本よりも更に無価値であることが多いので記述を省いた。

TJAM 第16章については、第17章～第19章とは異なって、肝心の A 写本の筆写人 X が書いた古い葉が部分的にしか (104 と 108 葉しか) 存在しないので³⁾、その章だけは異読情報の記述にあたって方針を大きく変えざるを得ない。筆写人 X の記した古い葉が欠損している第16章第9偈 pāda b から第121偈 pāda a までの箇所は、新しい諸写本の異読 (B と D 写本、ならびに A 写本中の筆写人 Y が書いた新しい *104, 105～107の葉) のみに頼らざるを得ない故に、私もそれらの全部の異読を報告することにした。

四つの章に関して内容の点から注目すべきは、TJAM 第17章において馬鳴の Buddhacarita の第3章と第4章からのテキストの逐字的借用 (すなわち諸詩節のほぼ丸ごとのコピー) が大規模にあることである⁴⁾。その Buddhacarita の借用を見ると、TJAM の作者は Buddhacarita の作品を利用するにあたって、馬鳴のカーヴィヤの内容をよく理解する

3. 岡野 (2021) 前掲論文、86頁。

4. このような大規模な Buddhacarita からの詩節丸ごとの借用は TJAM 第24章でも確認されている。TJAM 第24章第77～第106詩節は、Buddhacarita 第9章第52～第82詩節の借用である。参照：松本昌巳「Padya-Lalitavistara 24章の研究」、修士論文、九州大学。

ネワールの学僧によって注意深く筆写された誤りが少ない極めて勝れた伝承本を借用のソースとして使っていたらしいことがわかる⁽⁵⁾。ただしすべての借用詩節で原文に完全に忠実に *Buddhacarita* のテキストをコピーしなければならないという意識は TJAM の作者に無いらしく、あちらこちらの詩節で故意に *Buddhacarita* のテキストの字句を書き改めている箇所が見うけられる。例えば第17章で *Buddhacarita* からの借文の際に、その原文に *kumāra* という語があった場合、TJAM の作者はわざと別の単語に書き改めていることが多い⁽⁶⁾。なぜ原文のとおり *kumāra* 「(上流階級の) 若者・青年」(出家前の若き釈尊を指す) の語を記すことが避けられたのか、その理由はよくわからない。

このような細部の表現の変更はあるが、第17章の中で大規模に行われているのを見ることができ、詩節テキストをほぼ丸ごと借用するといった形での *Buddhacarita* の利用は、次の第18章ではずっと少なくなり、第18章第140～第148詩節の箇所において *Buddhacarita* 第5章第30～第38詩節の借用が見られるだけである。TJAM 第18章の第6～第26詩節や第122～第131詩節では *Buddhacarita* の利用はなされているものの、そこでの利用の仕方はテキストの「借用」ではなく、かなり自由な「翻案」といってよい。すなわちソースから大筋の意味内容とキーワードだけを受け取って、文全体を別の韻律の形式 (*anuṣṭubh*) を変えて書き直すという創作的行為である。

このように「借用」と「翻案」とは創作の観点から区別されなければならないが、詩節丸ごとの「借用」が多い第17章でも、*Buddhacarita* を利用したすべての詩節が「借用」ばかりなのではなく、あちこちには利用詩節の「翻案」と見なしうるものも存在する。例えば第17章の第75、第111～第113、第115、第117、第137、第223詩節がそうである。また第136と第240詩節は *Buddhacarita* に相当する詩節を見出せない内容なので、それは翻案というより、純粋な創作といえる。

TJAM 第16章と第19章では、*Buddhacarita* を直接的に利用して作ったと思われるような、字句が一致する詩節は皆無である。第16章は明らかに *Lalitavistara* と *Mahāvastu* の「夢」の記述をうまく一つに統合しようとする目的をもって、「翻案」して作られている。TJAM という作品は多くの章では一般的に、*Lalitavistara* と *Mahāvastu* の二つの仏教梵語で書かれた仏伝を利用する場合は、「借用」ではなく「翻案」のやり方を取

5. Johnston 本(1935)の *Buddhacarita* は、ネパールの古い貝葉写本に基づきながら、更にチベット訳も参照して、古い読みを推測して校訂しているため、ネパール内部の *Buddhacarita* の最良の写本伝承を利用したにとどまる TJAM の作者が依用した *Buddhacarita* よりも、学問的に勝れた立場にある。しかし17世紀の TJAM の作者が利用した *Buddhacarita* の伝承は Cowell 本(1893)が用いたネパール写本の伝承よりも勝れている点が多くある。

6. 第17章では 74b、81a、90a、93a、95a、106c、123d、124d、162b、163b、189c、219d、236a の箇所で、*Buddhacarita* の *kumāra* の語がわざわざ別の表現に変えられている。

る⁷⁾。第16章と同様、第19章においてもそれら二つのインドの仏伝を用いつつ翻案がなされているが、第19章では Mahāvastu を明らかに利用した箇所は第4と第5詩節にあるにすぎず、第19章の多くの詩節は Lalitavistara を依用している。また TJAM 第19章には第18章と同じ程度に、Lalitavistara や Mahāvastu 等に内容的な対応関係が見出せない独創性を発揮した箇所（それを「オリジナル箇所」と呼びたい）があちこちにある。

TJAM の四つの章のソースに関して一つ興味深い点を指摘すると、TJAM 第16章116偈と第19章54～55偈において、Mahajjātakamālā 第32章第19～22偈の記述もしくは Karuṇāpuṇḍarīkasūtra にある同内容の記述に基づいた、菩薩の妻の妊娠の記述がある。そこでは Cāritracaraṇasudarśa(na)yūthika という名のシャクラ（インドラ神）がやがて釈尊の息子であるラーフラとして生まれるために、釈尊の妻ヤショーダラーの胎に入ることが語られる。TJAM の作者が Mahajjātakamālā という浩瀚な作品——その作品の最大のソースは Michael Hahn が明らかにしたように Karuṇāpuṇḍarīkasūtra である——の内容をよく知っている人物であったらしいことは、昨年私が発表した TJAM 第15章の研究の中で判明したことであるが、今回の第16と第19章の研究でも菩薩の妻の妊娠についてのその特異な記述の出所を探すうちに、やはり Mahajjātakamālā と Karuṇāpuṇḍarīkasūtra にその出典を見出せることがわかったのは嬉しいことである⁸⁾。

第19章ではそのヤショーダラーの妊娠の記述の後、第75～第82詩節において、出家を意欲する菩薩は妻にプラティサラーの偉大な明呪 pratisarāmahāvidyā を与え、その明呪の威力を述べて、それが妻と子を護ることを教える。仏伝の記述の中に不自然なほど強引に入れてくるこのような大随求陀羅尼の威力へのこだわりは、TJAM の作者（制作者集団）が有した僧としての社会的位置を推測する一つの手がかりとなるであろう。

7. 私がこれまで校訂してきた諸章から判断する限り、TJAM はネパールに伝わっていた Mahāsaṃvartanīkathā や Buddhacarita などの種々のソースを利用しているが、全体的には仏伝 Lalitavistara への依存度が一番高く、それに次ぐ第二位の資料として Mahāvastu が用いられている。TJAM に Śrīlālitavistara や Padyalalitavistara という別の呼び名が後の時代になって付けられる理由は、その作品が Lalitavistara への依存度が高いからであろう。

8. ラーフラの入胎の出来事については Michael Hahn (1985): *Der grosse Legendenkranz (Mahajjātakamālā)*, Wiesbaden, pp. 46, 284 と Isshi Yamada (1968): *Karuṇāpuṇḍarīkasūtra*, London, Vol. I, p. 103; Vol. II, p. 315 にある記述を見よ。また TJAM の作者が Mahajjātakamālā あるいは Karuṇāpuṇḍarīkasūtra をよく知っていることについては岡野 (2021) 前掲論文、75-82頁を参照のこと。TJAM の作者がこの入胎の出来事を知っているのは恐らく、TJAM に先行して作られたその Mahajjātakamālā の制作を通してであったろう。

Tathāgatajanmāvadānamālā 第16章～第19章 梵文校訂・翻訳

略号 A = a ms. of TJAM, NGMPP A 123/5. (104, 108～148 are written by the scribe X)

A2 = *104, 105～107 (i.e., additional new folios written by the scribe Y) in A

B = a ms. of TJAM, NGMPP B100/2

Bc = JOHNSTON's Buddhacarita edition, 1936

D = a ms. of TJAM, NGMPP D43/4-44/1 (rephoto = E1321/2)

H = Hokazono's Lalitavistara edition, i (1994), ii (2019), iii (2019)

L = LEFMANN's Lalitavistara edition, 1902

M = MARCINIAK's Mahāvastu edition, ii (2020), iii (2019)

S = SENART's Mahāvastu edition, i (1882), ii (1890), iii (1897)

TJAM = Tathāgatajanmāvadānamālā (= Padya-Lalitavistara)

以下の TJAM テキスト中の [] の数字は A 写本の葉を示し、例えば [104a5] は A の第104葉の表面5行目であることを示す。しかし [*104a] とアスタリスクが付けられている数字は、A 写本中の本来の筆写人 X (= Jayamuni) が記した葉ではなく別の筆写人 Y によって書かれた新しい葉 (略号 A2) の104であることを示す。その新しい葉は古い葉である104とは別に存在するため、*104と表記する。(岡野(2021) 前掲論文、86頁を参照せよ。)

また TJAM テキスト中で仏伝 Lalitavistara と内容が密接に関係する箇所では、その詩節の右側に ≈ という「類似」を意味する記号を使って、Lefmann (略号 L) と外蘭幸一 (略号 H) の両方の Lalitavistara 出版本⁹⁾の参照すべき文の類似箇所を示した。例えば H i,686(vs.)22 とあるのは外蘭(1994-2019)校訂本上巻 686頁の第22詩節をさす。i は上巻を、ii は中巻を意味し、(vs.) は詩節を意味する。(vs.) と記さずに単に H ii,40.3-4 とある場合は、散文の箇所であり、外蘭本の中巻40頁3-4行の散文を意味する。

また TJAM が仏伝 Mahāvastu と密接に関係する箇所では、同様に ≈ の記号を用いて、Mahāvastu 出版本¹⁰⁾の Senart 本 (略号 S) と Marciniak 本 (略号 M) の両方の、参照すべき文の類似箇所を

9. Lalitavistara の二つの校訂本： S. LEFMANN (1902): *Lalita Vistara. Leben und Lehre des Śākya-buddha, erster Teil: Text*, 1902, Halle； 外蘭幸一 (1994-2019)：『ラリタヴィスタラの研究』上巻 (1994)、中巻 (2019)、下巻 (2019)、大東出版社。

10. Mahāvastu の二つの校訂本： É. SENART (1882-1897): *Le Mahāvastu-Avadāna*, 3 vols, Paris； K. MARCINIAK (2019-2020)： *The Mahāvastu. A New Edition*, Vol. II (2020), Vol. III (2019), Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XIV, Tokyo.

示した。例えば S ii,133.15-18 とあるのは Senart 本の第2巻133頁の15-18行目をさす。M ii,171.6-9 ならば、Marciniak 本の第2巻の171頁6-9行目をさす。

TJAM が Buddhacarita を用いた箇所では、≈ の記号と = の記号を使い分けている。前者が内容的な近似を意味するのに対し、後者は「一致」すなわち詩節のほぼそのままの借用を意味する。

1. Tathāgatajanmāvadānamālā 第16章の校訂研究

第16章の内容を7分割して、おおまかに各部所のソースを示せば、次の通り：

- (1) 第2～第21詩節（父王の夢）の記述は Mahāvastu を利用。
- (2) 第22～第35詩節（菩薩の妻の夢 1）の記述は Mahāvastu を利用。
- (3) 第36～第76詩節（菩薩の妻の夢 2）の記述は Lalitavistara 第14章を利用。
- (4) 第77～第87詩節（菩薩の夢 1）は Lalitavistara 第14章と Mahāvastu の両方を利用。
- (5) 第88～第93詩節（菩薩の夢 2）は Lalitavistara 第14章を利用。
- (6) 第94～第113詩節（菩薩の夢の説明）は Mahāvastu を利用。
- (7) 第114～第119詩節（懐妊）は Mahajātakamālā または Karuṇāpuṇḍarīka を利用。

1.1 TJAM 第16章『夢 [という] 品』の梵文テキスト

以下、TJAM 第16章の校定テキストを挙げる。

16 Svapnaparivarta

[104a5] [*104a3]

atha so 'rhan mahābhijña upagupto {or: mahābhijño mahābuddho}⁽¹¹⁾ yatiḥ sudhīḥ /

11. ここで A 写本では mahābhijña mahābuddho と記された後、それらの字の上にある行間において mahābhijña upagupto と読みを修正している。では A 写本では mahābhijña mahābuddho という読みのほうが古いのかというと、それも断言できない。なぜなら、°jño mahābuddho の字の箇所はどれも写本 A の本来の筆写人 X (= Jayamuni) が書いた字らしくなく、むしろその X が書いた古い字を塗りつぶす形で、その古い字の上に別の字 °jño mahābuddho を上書きすることによって書かれている印象を受けるからである。つまり最古の写本 A の本来の筆写人 X は元々 mahābhijña upagupto と書いた可能性があり、その後別の (?) がその字の上にわざと上書きして °jño mahābuddho と修正したが、しかしその後、その °jño mahābuddho の字に対してまた別の人が再び °jña upagupto に戻す修正を加えたという解釈が可能である。このように、写本 A が筆写された時

aśokaṃ taṃ paṭiṃ {or: ānandaṃ taṃ yaṭiṃ} paśyan samāmantryaivam ādiśat // 1	
atha śuddhodano rājā suptaḥ śayyāśrito niśi /	
hrīdevasyānubhāvena svapna evam apaśyata // 2	
ratnābhimaṇḍitaṃ putraṃ gajarājaṃ mahattaraṃ /	
mañijālasamācchannam āruhya nirgataṃ purāt // 3	≈ S ii,133.15-18; M ii,171.6-9
tad dr̥ṣṭvā vipulaṃ hāsyam ruditaṃ ca samutthitaṃ /	
svātmānaṃ kampitaṃ dehaṃ saṃtāpapaṇḍitaṃ // 4	≈ S ii,133.19-21; M ii,171.10-13
etat svapne samālokya pratibuddhaḥ sa bhūpatiḥ /	
kiṃ bhaven ma iti dhyātvā tasthau cintāviśāturaḥ // 5	≈ S ii,134.1; M ii,171.13
evaṃ cintāsamākṛāntamānasaṃ taṃ narādhipaṃ /	
dr̥ṣṭvā lokādhipāḥ sarve samāgatyaivam abruvan // 6	≈ S ii,134.2; M ii,171.14
mā bhīr atra mahīpāla prasīda harṣito bhava /	
yat te svapnaphalaṃ siddhaṃ tat pravakṣyāmahe śṛṇu // 7	≈ S ii,134.3-5; M ii,171.15-17
eṣa tavātmajo vijñō bodhisattvo jagaddhite /	
rājyaṃ tyaktvābhiniṣkramya pravrajito yatir bhavet // 8	≈ S ii,134.6-9; M ii,171.18-21
yan nu tvam hasitaḥ [104b] svapne tat te jāyeta duḥkhatā /	
yac cāsi ruditaḥ svapne tenātisukhatā bhavet // 9	≈ S ii,134.10-12; M ii,172.1-2
nūnam eṣa mahāsattvo bodhisattvas tavātmajaḥ /	
jitvā māraṅgaṇān arhan bodhiṃ prāpya jino bhavet // 10	≈ S ii,134.13; M ii,172.3-4
iti satyaṃ parijñāya mā viśīda mahīpate /	
etad bhadranimittaṃ hi daivāt saṃdr̥ṣyate tvayā // 11	
iti lokādhipaiḥ sarvaiḥ samādiṣṭaṃ niśama saḥ /	
śuddhodano viṣaṇṇātmā tasthau dhyātvābhībodhitaḥ // 12	
tathā mātuḥ svasā [*104b] cāpi gautamī śayanāśritā /	
rātrau nidrāgatā suptā prādrākṣīt svapnam īdr̥ṣaṃ // 13	≈ S ii,134.14; M ii,172.5
tadyathāsau mahāsattvo bodhisattvo nṛpātmajaḥ /	
sujāto vṛṣabhībhūtaḥ sarvātiriktaśṛṅgabhr̥t // 14	≈ S ii,134.15-16; M ii,172.6-7
sukakudvān mahatkāyaḥ śubhravarṇo manoharaḥ /	

次に、TJAM の説主をマハーブツダ mahābuddha (釈尊) にしてその対告者をアーナンダにするべきか、それとも釈尊より百年後に出た聖者ウパグプタを説主にしてその対告者をアショーカ王にするべきか、作品の枠組の設定をめぐる意見が揺れていた時期があったことが、この写本 A の上の修正の痕跡からうかがい知ることが出来る。制作当時はこの作品をマハーブツダが説いたものにしたという願望がパタンの Mahābaudha 寺の関係者の間にあったのであろう。しかし新しい時代に筆写された TJAM の写本を見ても、結局はこの「揺れ」は多数の avadānamālā 文献が有する「ウパグプタがアショーカ王に説法する」という物語の枠に落ち着いたことがわかる。

pragarjan madhuraṃ rāvaṃ nidhāvitaḥ purād drutam // 15	≈ S ii,134.17-20; M ii,172.8-13
īdṛk svapnaṃ samālokya gautamī pratibodhitā / tatphalaṃ śrotum icchantī tasthau tadgatamānasā // 16	
tām evaṃ saṃsthitāṃ dṛṣtvā devarājaḥ samāgataḥ / prabodhayitum ālokya samāmantraivam abravīt // 17	≈ S ii,135.1; M ii,172.14
gautami mā viṣīdātu yat svapne dṛśyate tvayā / tat phalaṃ samupākhyāmi saṃśṛṇuṣva samāhitā // 18	≈ S ii,135.2-4; M ii,172.15-17
tadyathāyaṃ mahābhijño bodhisattvo jagaddhite / rājyaṃ tyakto 'bhinikramya pravrajya saṃvaram caran // 19	≈ S ii,135.5-8; M ii,172.18-173.3
jītvā sa tīrthikān mārān dhyātvā saṃbodhim āpsyati / tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayet // 20	≈ S ii,135.9-12; M ii,173.4-7
tataḥ so 'rhañ jagacchāstā kṛtvā dharmamayaṃ jagat / samāpya saugataṃ kāryaṃ samāpnuyāj jinālayam // 21	
tato yaśodharā cāpi niśi śayyāsamāśritā / nidrābhivaśagā suptā prādrākṣīt svapna īdṛśaṃ // 22	≈ S ii,135.13; M ii,173.8
tadyathā sa mahābhijñāḥ śuddhodananṛpātmajaḥ / rājakulāt samudgamyā sahasāmbara āśritaḥ // 23	
meghībhūtvā samācchādya sarvatrāpi niranteram / dhīragambhīranirgoṣaṃ garjan sarvaṃ manoharan // 24	≈ S ii,135.18-20; M ii,173.13-15
vidyutkāntiprabhādīpair hatvā dhvāntaṃ samantataḥ / suśīlāmbudhārābhiḥ prahlāditaṃ jagad vyadhāt // 25	≈ S ii,135.21-136.4; M ii,173.16-174.3
īdṛk svapnaṃ samālokya pratibuddhā yaśodharā / vismitotthāya niḥśvasya tasthau yaddhyānaniṣṭhitā // 26	
tāṃ taccintāviṣīdantīm dṛṣtvā brahmā samāgataḥ / gagaṇe samupāśritya samāmantryaivam ādiśat // 27	≈ S ii,136.5-6; M ii,174.4-5
bhadrike mā viṣīdātra yat te svapnaphalaṃ śubham / saṃsidhyeta mahārtho hi tat prasīdānumoditā // 28	≈ S ii,136.6-8; M ii,174.5-7
ayam nṛpātmajo nūnaṃ bodhisattvo jagaddhite / rājyaṃ tyaktvābhiniṣkramya pravrajyāsaṃvaram caran //29	
tapasā tīrthikāñ jītvā mā[105a]rasaṃghān vinirjayan / arhan saṃbodhim āsādyā dharmarājo jino bhavet // 30	
tadā sarvatra lokeṣu dharmāmṛtaṃ pravaṛṣayan /	≈ S ii,136.9-12; M ii,174.8-11
jagat kleśāgnisaṃtaptaṃ *prahlādayet pramodayan {or: prabodhayan} // 31	
iti satyaṃ pariñāya saṃpraśīda viṣīda mā / tvam apy evaṃ bhaven nūnaṃ sambuddhadharmacāriṇī // 32	

ity ādiśyaiva sa brahmā tato gatvā surālayam /	
sarvān devān samāmantrya kathitvaitad abodhayat // 33	
etad brahmasamādiṣṭaṃ śrutvā devāḥ prabodhitāḥ /	
acirāt prabhaved buddha ity uktvā saṃprasedire // 34	
yaśodharāpi tac chrutvā brahmādiṣṭaṃ prabodhitā /	
nūnaṃ bhartā bhaved buddha iti dhyātvābhyananadata // 35	
tato bhūyo niśīthe sā gopā śayyāsanāśritā /	
nidrābhivaśagā suptā dadarśa svapna īdṛśān // 36	≈ L 194.7-8; H i,686(vs.)22ab
tadyatheyaṃ mahī sarvā kampitā sābdhiparvatā /	
ativegānilaiḥ śṛṅgā dhvaṃsitāḥ patitā bhuvi // 37	≈ L 194.9; H i,686(vs.)22cd
vṛkṣās conmūlitās chinnā mahāvātaiḥ nipātītāḥ /	
satārakau ravīndū ca *nabhaḥsthau patitau bhuvi // 38	≈ L 194.10-11; H i,688(vss.)22d,23a
ātmanāś chinnitāḥ keśās chinnau pādau tathā bhujau /	
nagnībhūtaṃ svadehaṃ ca makuṭaṃ ca nipātitaṃ // 39	≈ L 194.12-13; H i,688(vs.)23bc
muktāhāraṃ ca vicchinnaṃ vikīṛṇitaṃ mahītale /	
mañcapādās ca vicchinnāḥ śayyāsanā mahītale // 40	≈ L 194.14-15; H i,688(vs.)23d,24a
bhartuḥ śrīmac chattraṇḍaṃ khaṇḍitaṃ patitaṃ bhuvi /	
ābharaṇāni kīṛṇāni * prahītāni {or: *proḍhitāni} jalair api // 41	≈ L 194.16-17; H i,688(vs.)24bc
cūḍālaṃkāravastrāṇi kṣiptāni śayanāsane /	
purād ulkā viniṣkrāntā puraṃ ca tamasāvṛtam // 42	≈ L 194.18-19; H i,688(vss.)24d,25a
vicchinnaṃ kiṃkinījālaṃ muktāhāraṃ nipātitaṃ /	
kṣubhitāḥ sāgarā merur nagarājo 'pi kampitaḥ // 43	≈ L 194.20-22; H i,688(vs.)25bcd
svapna etāni dṛṣṭvā sā pratibuddhā yaśodharā /	
sahasotthāya tatraiva śayyāyāṃ samupāśritā // 44	≈ L 195.1-2; H i,688(vs.)26ab
*vismitya bhinnitasvāntī tasthau taddhyānamānasā /	
evam tām āsthitāṃ dṛṣṭvā bharto 'pi samupasthitaḥ /	
yaśodharāṃ vibhinnāsyāṃ sampaśyann evam abravīt // 45	
priye kiṃ jāyate [105b] duḥkhaṃ yad vibhinnāṃ mukhaṃ tava /	
tat satyaṃ me vadasvātra yadi māṃ *manyase prabhum // 46	
iti bhartrā samādiṣṭaṃ niśamya sā yaśodharā /	
svāminaṃ taṃ samālokya vibhinnāsyaiḥ abravīt // 47	≈ L 195.2; H i,688(vs.)26b
īdṛśāni mayā svapne dṛṣṭāni hi nṛpādhipa /	
tatphalaṃ kiṃ bhaven nūnaṃ yan manas trasitaṃ mama // 48	≈ L 195.3-4; H i,688(vs.)26cd
iti gopāsamākhyātaṃ svapnavṛttaṃ niśamya saḥ /	
bhartā nimittam ālokya bhāryāṃ evam abodhayat // 49	≈ L 195.5-6; H i,690(vs.)27ab

ayī gope prasīdātu pāpaṃ te vidyate na hi /	
paśyeyur īdṛśān svapne dharmiṣṭhā eva nāpare // 50	≈ L 195.6-8; H i,690(vs.)27bcd
yad dṛśyante tvayā svapne sarvā bhūmī prakampitā /	
mahāvātāhatāḥ śailaśṛṅgāś ca patitā bhuvī // 51	≈ L 195.9; H i,690(vs.)28ab
sarve surādayo lokāḥ kariṣyanti tavārhaṇām /	
etat satyaṃ parijñāya mā viṣīda prasīda tat // 52	≈ L 195.10; H i,690(vs.)28cd
dṛśyante ca hatā vātair unmūlā patitā drumāḥ /	
maḥkaṭaṃ patitaṃ keśā lūnā chinnau karāv ubhau // 53	≈ L 195.11; H i,690(vs.)29ab
ubhau ca caraṇau chinnau *karau ca nagnitātmanaḥ /	
chetsyate kleśajālaṃ te dṛṣṭijālaṃ ca saṃskṛtau // 54	≈ L 195.12; H i,690(vs.)29cd
yac ca satārakau dṛṣṭau ravīndū patitau bhuvī /	
tena kleśarīpūñ jītvā pūjyārhanṭī bhaviśyasi // 55	≈ L 195.13-14; H i,690(vs.)30
muktāhāraṃ viśīrṇaṃ ca chinnā ca maṇimekhalā /	
tena strīkāyam utsṛjya pauraṣaṃ kāyam āpsyasi // 56	≈ L 195.15-16; H i,690(vs.)31
chattradaṇḍaṃ ca me bhagnaṃ mañcapādās ca bhagnitāḥ /	
dṛṣṭā gope tvayā svapne tatphalam aham aśnuyām // 57	≈ L 195.17; H i,690(vs.)32ab
tadyathāhaṃ samuttīrya *caturoghān bhavadadheḥ /	
sarvadharmādhipaḥ śāstā bhaveyaṃ trijagatpatiḥ // 58	≈ L 195.18; H i,690(vs.)32cd
cūḍābhūṣaṇavastrāṇī *śayyāyāṃ vyākulāny api /	
uditāni jalaughaiś ca dṛṣṭāni yat *priye tvayā // 59	≈ L 195.19; H i,692(vs.)33ab
tenāham pariśuddhātmā bhadrakṣaṇamaṇḍitaḥ /	
stūyamāno jagallokaīḥ pracareyaṃ samantataḥ // 60	≈ L 195.20; H i,692(vs.)33cd
maholkā dṛśyate yac ca niṣkrāmantī purād vahiḥ /	
dṛ[106a]ṣṭaṃ ca nagaraṃ sarvam andhakārasamāvṛtam // 61	≈ L 195.21; H i,692(vs.)34ab
avidyātamasā vyāpte prajñādīpaṃ mahatprabham /	
samujjvālya jagallokaṃ darśayeyaṃ jinālayam // 62	≈ L 195.22; H i,692(vs.)34cd
yad vāpi dṛśyate gope muktāhāraṃ vikīrṇitam /	
svaṇasūtraṃ ca vicchinnaṃ tatphalaṃ bhojyate mayā // 63	≈ L 196.1; H i,692(vs.)35ab
kleśajālaṃ *abhicchittvā dharmasūtraṃ prakāśayan /	
jagat sarvaṃ samuddhṛtya cārayeyaṃ sadā śubhe // 64	≈ L 196.2; H i,692(vs.)35cd
yat kṣubdhā sāgarā dṛṣṭā tvayā meruś ca kampitaḥ /	
tenārhanṭī mahatpūjāṃ lapsyase tvaṃ samantataḥ // 65	≈ L 196.3; H i,692(vs.)36ab
nāsti te *durgater bhītir mā kṛthā śokam ātmani /	
prītiprāmodyasatsaukhyāṃ dhṛtvā cara viṣīda mā // 66	≈ L 196.4; H i,692(vs.)36cd
yan mayā prakṛtaṃ dānaṃ suśīlacīrṇitaṃ vratam /	

*kṣāntiḥ *prabhāvitā nityaṃ saddharmasādhitaṃ sadā // 67	≈ L 196.5; H i,692(vs.)37ab
tasmāt sarve 'pi lokā me *prasīdante *sumaitritāḥ /	
prītiprāmodyasatkāraṃ kṛtvā bhavanti nanditāḥ // 68	≈ L 196.6; H i,692(vs.)37cd
kalpaśatasahasrāṇi bodhicaryāvratam caran /	
sarvasattvahiṃ kṛtvā prācarāmi sadā śubhe // 69	≈ L 196.7; H i,692(vs.)38ab
tasmāt sarve prasādam me kurvanti saṃpramoditāḥ /	
sarve pāpās ca vicchinnā bodhimārgo 'bhisodhitāḥ // 70	≈ L 196.8; H i,692(vs.)38cd
tenātra mā viśīda tvaṃ bhavānandapramoditā /	
bhadraśrīsadguṇādhārā bhadrīkāpi bhaviṣyasi // 71	≈ L 196.9; H i,694(vs.)39ab
ḍṛśyante ye tvayā svapne sarve bhadranimittitāḥ /	
tad āvayor bhaven nūnaṃ bhadraṃ saṃbodhisādhanam // 72	≈ L 196.10; H i,694(vs.)39cd
ye sattvā nirmalātmānaḥ pariśuddhendriyāśrayāḥ /	
īḍṛkṣvapnāni bhadraṇi paśyeyuḥ sugatātmajāḥ // 73	
iti satyaṃ parijñāya sarvabhadrārthasādhanam /	
sambodhiprañidhiṃ dhṛtvā smṛtvā ratnatrayaṃ cara // 74	
etatpuṇyānubhāvena pariśuddhatrimaṇḍalā /	
sambodhijñānam āsādyā saugataṃ padam āpnuyāḥ // 75	
iti bhartrā samādiṣṭaṃ yaśodharā niśamya sā /	
tathety abhyanumoditvā prābhya[106b]nandat prabodhitā // 76	
atha so 'pi mahāsattvo bodhisattvas tathā niśi /	≈ L 196.11-12; H i,694(vs.)40ab;
śayyāsamāśritaḥ suptaḥ pañca svapnāny apaśyata // 77	S ii,136.13-15; M ii,174.12-14
kṛtvā sarvāṃ mahīm śayyāṃ sumerum upadhānakaṃ /	≈ L 196.15-18; H i,694(vs.)41;
vāmadakṣakarau *sthitau pūrvāparasamudrayoḥ // 78	S ii,136.16-18; M ii,174.15-17
dakṣiṇābdhāv ubhau pādaḥ prasārya supitaḥ svayaṃ/	
ity evaṃ prathamam svapnam prādrākṣīt sa mahāmatih // 79	≈ S ii,136.19; M ii,174.18
bhūyo 'pi sa tathā suptaḥ svapna evaṃ apaśyata /	
yat tṛṇam sthīrikam nāma *prodbhūya nābhimaṇḍalāt // 80	≈ S ii,137.1-3; M ii,175.1-2
ācchādyā gagaṇam yāvat sthitaṃ chattram ivātmanaḥ /	
svapnam evaṃ dviṭīyam sa bodhisattvo 'bhyapaśyata // 81	≈ L 196.21-22; H i,694(vs.)42cd
tathā bhūyaḥ prasupto 'sau prādrākṣīt svapnam ātmanaḥ {or: īḍṛśaḥ} /	≈ L 197.1; H i,694(vs.)43a;
catvāro lohitātmānaḥ prāṇikā nīlamastakāḥ // 82	S ii,137.4-6; M ii,175.4-6
pādatalāt samudbhūya yāvat svanābhimaṇḍalam /	
ācchādyā saṃsthitā ḍṛṣṭās tena svapne tṛṭīyake // 83	
bhūyo 'pi sa tathā suptaḥ svapnam evaṃ apaśyata /	≈ L 197.2; H i,694(vs.)43b;
catvāraḥ pakṣiṇo nānāvārṇāḥ khāt samudāgatāḥ // 84	S ii,137.7-10; M ii,175.7-10

svapādāv upajighrantaḥ sarvaśvetāparādhyakāḥ /
 saṃdr̥ṣṭā ātmanas tena svapnam evaṃ caturthakam // 85
 tathā bhūyo 'pi supto 'sau svapnam evaṃ samīkṣata / ≈ L 197.3-4; H i,694(vs.)43cd;
 mahato mīḍha*śailāgre 'nupalipto 'bhicaṃkraman // 86 S ii,137.11-13; M ii,175.11-13
 svātmā saṃbhrāmyamāno 'pi sarvadikṣu prabhāsayan
 ity evaṃ pañcamaṃ svapnam prādr̥kṣīt sa mahāmatih // 87
 bhūyo 'pi sa tathā suptaḥ svapnam evam apaśyata /
 uhyamānā asaṃkhyeyāḥ sattvā mahānadījalaiḥ // 88 ≈ L 197.5-8; H i,696(vs.)44
 dr̥ṣṭvā naukā svayaṃ bhūtvā prottārya sthāpitāḥ sthale /
 ity evaṃ sa mahāsattvaḥ ṣaṣṭhaṃ svapnam apaśyata // 89
 bhūyo 'pi sa tathā suptaḥ svapnam evaṃ samaikṣata /
 rogiṇo bahavaḥ sattvā dr̥ṣṭvātmanā mahauśadhaiḥ /
 vaidyabhūtena te sarve svasthīkṛtā nirāturāḥ // 90 ≈ L 197.9-12; H i,696(vs.)45
 saṃgrāme jayakīrtiś ca dr̥ṣṭvā prasāritātmanah /
 ānandaśabdān ākāśe tridaśaiḥ saṃpra[107a]cāritam // 91 ≈ L 197.15-16; H i,696(vs.)46cd
 merau siṃhāsanaśīnam ātmānam amarādibhiḥ /
 kṛtāñjalipuṭaiḥ śiṣyair vandyamānaṃ sa praikṣata // 92 ≈ L 197.13-14; H i,696(vs.)46ab
 ity evaṃ sa mahāsattvaḥ svapnam dr̥ṣṭvābhībodhitah /
 tat sarvam anusaṃsmṛtvā tasthau dhyānasamāhitah // 93 ≈ L 197.17-18; H i,696(vs.)47ab
 evaṃ dhyātvā samāsīnaṃ bhartāraṃ taṃ samīkṣya sā /
 yaśodharā priyā bhāryā sampaśyanty evam abravīt // 94
 deva dhyātvā samāsīnaḥ kim evam avatiṣṭhate /
 yadi mayy asti te snehas tat samādeṣṭum arhati // 95
 iti gopā samākhyātaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /
 gopāṃ tām supriyāṃ bhāryāṃ *sampaśyann evam abravīt // 96
 yad ahaṃ supriye gope svapne paśyāmi sāmpratam /
 tadanusmṛtim ādhāya tiṣṭhāmy evaṃ vicintayan // 97
 iti bhartrā samākhyātaṃ niśamya sā yaśodharā /
 bhartāraṃ taṃ mahāsattvaṃ sampaśyanty evam abravīt // 98
 kiṃ svapne paśyase deva tadvipākam ca kiṃ bhavet /
 satyam etat samādiśya mām bodhayitum arhasi // 99
 iti bhāryoditaṃ śrutvā bodhisattvo vihasya saḥ /
 tām gopāṃ supriyāṃ kāntāṃ sampaśyann evam **ādiśat** {or: abravīt} // 100
 śṛṇu devi yathā *dr̥ṣṭam tathā sarvaṃ nigadyate /
 iti svapnapravṛttāntam vistareṇa samādiśat // 101

tadvipākam ca vakṣyāmi śṛṇu devī samāhitā /
 tan nīśamyānumodantī prasīdasva viśīda mā // 102
 prathamavapnavipāko me praṇidhānam prapūrayet /
 yad ahaṃ bodhim āsādyabhaveyaṃ bhagavāñ jinah // 103 ≈ S ii,137.14-18; M ii,175.14-18
 dvitīyasya vipākena vārāṇasyāṃ jināśrame /
 cārayeyaṃ jagad bhadradharmacakraṃ pravartayan // 104 ≈ S ii,137.18-138.18; M ii,175.18-176.20
 tṛtīyasya vipākena sarve sattvāḥ pramoditāḥ /
 kṛtvā me bhajānaṃ bhaktyā saṃprayāyuh surālayam // 105 ≈ S ii,138.18-139.2; M ii,176.21-177.2
 caturthasya vipākena caturvarṇā narā api /
 śaraṇe me samāgatya bhaveyur brahmacāriṇaḥ // 106 ≈ S ii,139.3-7; M ii,177.3-7
 pañcamasya vipākena sarvatra bhuvaneṣv api /
 satkṛtaḥ pūjitaḥ sarve (!) bhaveyaṃ mānito guruḥ // 107 ≈ S ii,139.7-20; M ii,177.8-20
 tato 'nyeṣāṃ vipākaiś ca sarvān [107b] sattvān bhavadadheḥ /
 samuddhṛtya bhavesthāpya cārayeyaṃ susaṃvaram // 108
 kleśajvarāgnisaṃtaptān sarvān sattvān viśodhayan /
 saddharmāmṛta*bhaiṣajye svasthīkuryāṃ samantataḥ // 109
 arhan māragaṇāñ jivā traidhātubhuvanesv api /
 arhacchiṣyagaṇaiḥ sārddham caran sattvān prabodhayan /
 triyāneṣu pratiṣṭhāpya preṣayeyaṃ jinālayam // 110
 etat svapnaphalaṃ bhadranimittaṃ bodhisādhanam /
 etat svapnavipākena tavāpi maṅgalaṃ khalu /
 *yat tvam mārāśrayaṃ hitvā saddharmāśrayam *āpnuyāḥ // 111
 iti satyaṃ pariñāya saddharmaguṇalālasā /
 triratnasmarāṇaṃ dhṛtvā saṃramasva sadā śubhe // 112
 iti bhartṛa samādiṣṭaṃ nīśamya sā yaśodharā /
 tathety abhyanumoditvā prābhyanandat prabodhitā // 113
 atha sarvārthasiddho 'sau bodhisattvaḥ samāhitaḥ /
 pūrveṣāṃ bodhisattvānāṃ saṃvṛttim anvacintayat // 114
 dhyātvā saṃbodhisattvānāṃ saṃvṛttidharmatāṃ smaran /
 vaṃśārthaṃ ratisaṃrakto gopayā saha prāramat // 115
 tadā cāritracaraṇasudarśayūthikābhidhaḥ / ≈ Mahajjātakamālā 32.19;
 śakraḥ surālayāc cyutvā gopāgarbhe samāviśat // 116 Karuṇāpuṇḍarīka,ii,p.315
 iti nimittam ājñāya bodhisattvaḥ sa sarvavit /
 pratisarāmahāmantraṃ gopāmūrdhni nyadhāpayat // 117
 tataḥ sarvārthasiddho 'sau niṣkramaṇasamutsukaḥ /

vilokya samayaṃ dhyātvā tasthau sambodhimānasah // 118
 ity evaṃ taṃ mahāsattvaṃ niṣkramaṇasamutsukam /
 dṛṣṭvā brahmādayo devāḥ sarve 'bhavan pramoditāḥ // 119
 iti me guruṇādiṣṭam iha mayā tathocyate /
 tvam apīdaṃ mahāsattva śrutvaitad anumodatu // 120
 anumoda[108a]nti ye śrutvā svapnavṛttikathām imām /
 te 'pi sarve mahāsattvā bhaveyur bodhisādhinaḥ // 121
 iti śāstrā samādiṣṭaṃ śrutv***āsoko** ***mahīpatiḥ** {or: śrutvānando mahāmatih} /
 tathā hīti pratijñāya prābhyanandat sapārśadaḥ // 122

// iti svapnaparivarto nāma ṣoḍaśo 'dhyāyaḥ samāptaḥ //

Apparatus criticus of the chapter 16⁽¹²⁾

- 1a mahābhijña] corr.: mahābhijño A A2 B D.
 1b upagupto A(post corr. marg.) A2 B D: mahābuddho A(ante corr.).
 1c aśokaṃ] A(post corr. marg.) B D: aśokan A2: ānandaṃ A(ante corr.) || taṃ patiṃ paśyan]
 A(post corr.): taṃ yatiṃ paśyan A(ante corr.): yati paśyan B: yadi paśyan D: taṃ mahārājan A2.
 1d samāman°] A A2 B: sasamāman° D.
 2b suptaḥ] A A2 B: supta D || śayyāśrito ni°] A(post corr. marg.): śayyāśri ni° A(ante corr.):
 śayyāśriyo ni°B: śaryyāśrito ni° A2 D.
 2c hrīdevasyā°] A: hrīdevāyā° A2 B D.
 3a °maṇḍitaṃ] A B: °maṇḍitaḥ A2: °maṇḍita D || putraṃ] A: putra A2 B D.
 3b gajarājaṃ] A2 B D: gajamrājaṃ A.
 5a svapne] A: svapna A2 B D.
 5c ma iti] A B: me iti A2 D.
 5d °āturaḥ] A A2 B: °āturaṃ D.

12. 以下の Apparatus criticus で用いる記号の説明として、A(ante corr.)は「A写本において写経生が書き直す前に書いた読み」、A(post corr.)は「A写本において写経生が書き直した後の読み」、A(post corr. marg.)は「A写本の余白に修正として記された読み」を、A(post corr. int. lin.)は「A写本の行間に修正として記された読み」を意味する。— またA写本には104葉が新旧二枚あるので、その場合はAは旧葉、A2は新葉を意味する略号となる。続く105葉から107葉までの3葉は旧葉のAが失われており、誤りの多いA2の新葉だけが存在する。その後の、第16章121aのnti yeの箇所から始まる108葉から148葉までは旧葉が存在する。

- 6a °mānasam] A A2: °mārasam B: °mārasa D.
- 6b narādhipam] A A2: narādhipaḥ B D.
- 6c lokādhipaḥ] A A2: lokādhipā B D.
- 7b harṣito] A: harṣitā A2 B D || bhava] A A2: bhavaḥ B D.
- 7c yat te] A D: yat ta B: yad yat A2.
- 7d pravakṣyāmahe] A: pravakṣyāmi te A2: pravajyāmaha B: pravakṣyāmaṃha D.
- 8b bodhisattvo] A A2 B: bodhisattva D.
- 9a yan nu tvaṃ] A: yan nur tvaṃ B: yan nu tva D: yan nūnaṃ A2.
- 9ab hasitaḥ svapne tat te jāyeta] A B: hasitaḥ svapnaṃ tat te jāyeta D: hita svapnaṃ te saṃprajāy-
ata A2.
- 9c yac cāsi] A B D: yady āsi A2.
- 9d tenātisukhatā] A: tonātisukhato B: tenātisukhato A2 D.
- 10ab mahāsattvo bodhisattvas] A A2 B: mahāsatvās D.
- 10b tavātmajaḥ] A B D: tamātmajaḥ A2.
- 10c arhan] A A2: arha B D.
- 10d bodhiṃ] A A2 D: bodhi B || prāpya] A A2 B: pāpya D || jino] A A2 D: jinā B.
- 11d daivāt] A B D: devāt A2: .
- 12a lokādhipaiḥ sarvaiḥ] A A2 D: lokādhipe savai B.
- 12c śuddhodano] A A2 D: śuddhodanā B.
- 13c rātrau nidrā°] A(post corr. marg.) B D: nidrā A(ante corr.): rātrau tīdrā° A2.
- 14b bodhisattvo] ≙ bodhisatvo A A2: bodhisatva B: bodhisatvā D.
- 14c sujāto] A B D: sujātā A2 || vṛṣabhībhūtaḥ] A: vṛṣabhībhūta A2: vṛmebhībhūtaṃ B:
vṛṣabhībhūtaṃ D.
- 15a mahatkāyaḥ] A A2: mahatkāya B: mahatkāyaṃ D.
- 15c madhuraṃ] A(post corr.): madhuro A(ante corr.) A2: madhurā B D || rāvaṃ] A A2 D:
nāvaṃ B.
- 16a svapnaṃ] A D: svapna A2: taṃpraṃ B.
- 16c icchantī] A: icchantika B: icchanti D: icchantā A2.
- 18a gautami] A: gautamī A2 B D || mā viṣīdātu] A A2: mānīṣīdātu B D. (viṣīdātu is m.c. for
viṣīdatu)
- 18d saṃśṛṇuṣva] A A2 D: saṃśṛṇuṣa B.
- 19a mahābhijñō] A A2: mahābhijñā B D.
- 19b bodhisattvo] ≙ bodhisatvo A A2 D: bodhisatvā B.
- 19c tyakto] A: tyaktvā A2 D: tyaktā B.
- 20a tīrthikān] A A2 B: tīrthikān D.

- 21a so 'rhañ] ≡ sorhañ A A2: sorhaṃ D: sārhañ B || jagacchā°] A A2 B: cagacchā° D.
- 22a cāpi] A A2 D: vāpi B.
- 22b śayyā°] A B: śaryyā° A2 D || °āsritā] A(post corr. marg.) A2 D: °āsri A(ante corr.): °āsītā B.
- 24a meghībhūtvā] A B: mayībhūtvā A2: mṛghībhūtvā D.
- 24c °nirghoṣaṃ] A A2 B °cirghoṣaṃ D
- 24d sarvaṃ mano°] A: sarvamaṇo° A2 B D.
- 25a °dīpair] A A2 B: °dīpnai D.
- 25d dhvāntaṃ samantataḥ] corr.: dhvānta samantataḥ A2: dhvānta samantataṃ D: dhvāntataḥ B.
- 25 note] 104b of A ends in the verse 25, pāda b hatvā. After this end of 104b, 3 folios (= original 105, 106, 107) are lost in A. As replacement for the lost 3 folios, the new 4 folios (*104, 105, 106, 107) were written as A2.
- 26a svapnaṃ] A2 D: svapna B.
- 26b pratibuddhā] A2 B: pratiyuddhā D.
- 26c niḥśvasya] D: niḥsvasya A2 B.
- 26d yaddhyāna°] A2: taddhyāna° B D.
- 27a °viṣīdantīm] corr.: °viṣādantīm A2 B D.
- 28b svapnaphalaṃ] A2 D: svapnaphale B.
- 28c saṃsidhyeta] corr.: saṃsiddhyeta A2 B: saṃsiddhota D.
- 28d °moditā] B: °moditāṃ A2: °moditān D.
- 29a nṛpātmajo] corr.: nṛpātmajā A2 B D.
- 29b bodhisattvo] ≡ bodhisatvo A2 D: bodhisatvā B.
- 29c tyaktvābhiniṣkramya] A2: tyaktvāvinīṣkramya B D.
- 30a tīrthikāñ] A B: tīrthikāṃ D.
- 30c saṃbodhim] A2 D: sebodhim B.
- 30d bhavet] A2: bhavat B D.
- 31d *prahlādayet] ex con: prahlādayan A2: prahlādayat D: prahlādaman B || pramodayan] B D: prabodhayan A2.
- 32a satyaṃ] B D: tatyam A2.
- 33b tato] A2 D: tatvo B || surālayam] A2 D: sutālayam B.
- 33d abodhayat] A2 B: abodhayet D.
- 34c prabhaved] A2: prabhave B D.
- 34d saṃprasedire] A2 B: saṃpraśedire D.
- 36a niśīthe] B D: niśīthe A2.
- 36b gopā] D: rāmā A2: gāmā B || śayyāsanāśritā] B: śaryyāsanāśritā A2 D.
- 36c °vaśagā] A2 D: °vasagā B.

- 36d īdṛśān] A2 D: īdṛśāna B.
- 37b kampitā] A2 D: kanpitā B || sābdhparvatā] A2: sāddhiparvatāḥ B: sādhvīparvatā D.
- 37c śṛṅgā] A2 D: śṛṅgo B.
- 37d dhvaṃsitāḥ] corr.: dhvansitāḥ A2 B D.
- 38a conmūlitās] D: conmūlitā A2: cānmūlitā B.
- 38c ravīndū] A2 D: ravīndu B.
- 38d *nabhaḥsthau] ex conī: nabhasthaḥ A2: nabhasthaḥ B: nabhastha D || patitau] A2 B: patito D.
- 39a chinnitāḥ] D: cinnitāḥ A2 B || keśās] corr.: keśā A2 B D.
- 39d makuṭam] B: makutaṃ D: makūṭam A2.
- 41a chattradaṇḍam] metre!
- 41c ābharaṇāni] A2 B: āvaraṇāni D.
- 41d *prahitāni jalair] ex conī: prohibitāni jaler B D: projvaleni jaler A2. Or read *proḍhitāni jalair? (*proḍhita < proḍha?)
- 42a °kāravastrāṇi] ≙ °kāravastrāni D: °kāravastrāṇi A2: °kāravastāṇi B.
- 44d śayyāyām] A2 B: śaryyāyām D || samupāśritā] D: samupāśritāḥ A2 B.
- 45a *vismitya] ex conī (or *vismita-): vismiya A2 B D || bhinnitasvānti] B: bhinnitasvāntas A2: nititasvānto D.
- 45b taddhyāna°] A2: taṃ dhyāna° B: ta dhyāya D.
- 45c evaṃ] B D: evan A2.
- 45d bharto 'pi] B D: bharttāpi A2.
- 45e yaśodharām] B: yaśodharā A2 D.
- 46d *manyase] ex conī: manyasu A2 B D.
- 47a bhartrā] A2: bharttā B: bhartā D.
- 48a svapne] A2 D: svame B.
- 48c bhaven nūnaṃ] B: bhavan nūnaṃ D: bhaved bharttā A2.
- 48d trasitaṃ] A2: trāsitaṃ B D.
- 49c nimittam] A2 B: nimitam D || ālokya] A2: āloka B D.
- 50a prasīdātu] A2 B: prasīdātra D. (prasīdātu is m.c. for prasīdatu. Cf. 18a viṣīdātu)
- 50c paśyeyur] corr.: paśyeyun D: paśyapur B: paśyetaṃ A2.
- 51c °śṛṅgās] A2: °śṛṅgās: °śṛgās B.
- 52a sarve] A2 B: sace D.
- 53a dṛśyante] B D: dṛśyate A2 || vātair] A2 D: vāter B.
- 53b unmūlāḥ] B D: unmūlā A2.
- 53c patitaṃ] B D: patitā A2
- 53d ubhau] A2 B: ubho D.

- 54b *karau] ex conī: tanau B D: pādaū A2.
- 54c chetsyate] B D: chetsyante A2.
- 55b ravīndū] A2 D: ravīndu B || patitau] A2 D: patito B.
- 55d pūjyārhanṭī] A2 D: puḡyārhanṭī B || bhaviśyasi] B D: bhaviśyati A2.
- 56b viśīrṇaṃ ca] D: viśīrṇā ca A2: viśīrṇa ca B.
- 56c strīkāyam A2 B: trikāyam D.
- 57a °daṇḍaṃ ca] A2 D: °daṇḍa ra B.
- 57b mañcapādāś] A2: pañcapādāś B D || bhagnitāḥ] corr.: bhagnitāḥ A2 B: bhagninaḥ D.
- 57c dṛṣṭā] A2 B: dṛṣṭvā D
- 57d °phalam aham] corr.: °phalaṃmaham D: °phale maham A2 B.
- 58b *caturoghān] ex conī: caturogho A2 B D || bhavadadheḥ] A2 D: havodadheḥ B.
- 59b *śayyāyāṃ] ex conī: śayyāya B: śaryyāyā A2 D.
- 59c uditāni] A2: uhitāni B D.
- 59c jalaughaiś] corr.: jarloghaiś B: jaloghaiś A2 D.
- 59d yat *priye] ex conī: yat priyā A2: yet priyā B D.
- 61a maholkā dṛśyate] corr.: mahotkā dṛśyase A2 B D.
- 61b vahiḥ] A2 B: vahi D.
- 61d samāvṛtam] B D: samovṛtam A2.
- 62a avidyātamāsā] A2: avidyāhatamasā B: avidyāhaṃ tamasā D
- 63a yad vāpi] A2 B: yad vopi D.
- 63d bhojyate] A2 B: labhyate D.
- 64a *abhicchittvā] ex conī: abhicchinnā A2: abhicchiktvā B: abhicchiktā D.
- 65c tenārhanṭī] A2 D: tenārhanṭi B.
- 65d lapsyase] A2: lapsyasa B D.
- 66a *durgater bhītir] ex conī: durgate bhītir A2 B: durgati bhīti D.
- 67b *cīrṇitaṃ: ex conī (cf. Lalitavistara): vīrṇitaṃ B D: kīrṇitaṃ A2.
- 67c *kṣāntiḥ *prabhāvitā] ex conī (cf. LV): kṣānti prabhāvitāṃ B: jānti prabhāvitāṃ A2 D.
- 68b *prasīdante] ex conī: prasīdantaḥ A2 B: prasīdanta D || *sumaitritāḥ] ex conī: sumaitritā B D: samaitritā A2.
- 69d prācarāmi] A2 B: prācarāsi D.
- 70a sarve] B: sarva A2: sarvaṃ D
- 70c pāpāś] A2: māyāś B D.
- 71b pramoditā] B D: prabodhitā A2.
- 71d bhaviśyasi] A2 D: viśyasi B.
- 72a ye] A2 B: yat D.

- 72b bhadranimittitāḥ] B D: bhadranimittitā A2.
- 72c tad *āvayor] ex conī: tadāvayo A2 B D.
- 73b °śrayāḥ] B D: °śriyāḥ A2.
- 74a satyaṃ] A2 D: satvā B.
- 74b sarvabhadrā°] A2: sarvaṃ bhadrā° B D.
- 74d cara] A2 B: caraḥ D.
- 75b trimaṇḍalā] B D: trimaṇḍalāḥ A2.
- 75d āpnuyāḥ] A2 D: āpnuyā B.
- 76a iti bhartrā] A2: iti bharttā D: iti rttā B.
- 76d prabodhitā] B D: prabodhitāḥ A2.
- 77a mahāsattvo] = mahāsatvo A2: mahāsatvā B D.
- 77c śayyāsamāśritaḥ] corr.: śaryyāsamāśritaḥ A2: śaryyāsanāśritaḥ B D || suptaḥ] A2 B: supta D.
- 77d *pañca°] ex conī: mañca A2: maśca B: sañca D || apaśyata] corr.: apaśiyata B: apaśiyate D: apaśyate A2.
- 78a sarvāṃ mahīm] corr.: sarvā mahī A2 B D || śayyāṃ] A2 B: śaryyāṃ D.
- 78c °dakṣakarau] corr.: °dakṣikarau A2: °dakṣakaro B D || *sthithau] ex conī: ..hau A2: gāhau B D
- 80c sthiraṃ] A2 B: sthirakaṃ D.
- 80d *prodbhūya] ex conī: prāk bhūya A2: prādbhūya B D.
- 82a prasupto 'sau] corr.: prasuptāsau A2 B D.
- 82b prādrākṣīt] A2 D: prādrākṣī B || ātmanaḥ] B D: īdrśaḥ A2.
- 82c catvāro] B D: catvāraḥ A2 || lohītātmānaḥ] A2 B: lohītātmāno D.
- 83c dṛṣṭās] A2 B: dṛṣṭvā D.
- 84c catvāraḥ] A2 B: catvāra D || pakṣiṇo] D: pakṣiṇāṃ A2: pakṣiṇā B.
- 84d °varṇāḥ khāt] corr.: °varṇā khāt D: °varṇā vān A2: °varṇā vāt B || samudāgatāḥ] corr.: samudāgatā A2 B D.
- 85a svapādāv] D: svapādām A2: svapādān B.
- 85c samdṛṣṭā] A2 D: samdṛṣṭo B || ātmanas] A2 B: cātmanas D.
- 86b evaṃ] B D: eva A2 || samīkṣata] A2 B: samīkṣataḥ D.
- 86c °*śailāgre] ex conī: °śasyāgre A2: °gasyāgreḥ B: °gasyāgre D.
- 86d 'nupalipto 'bhi°] corr.: 'nupaliptābhi° A2 D: āliptābhi° B.
- 87c pañcamaṃ svapnaṃ] corr.: pañcame svapnaṃ A2: paṃcame svapnaṃ B D.
- 88b apaśyata] B: apaśyatā A2: apaśyataḥ D.
- 88c *uhyamānā] ex conī (cf. Lal, uhyamānā): draṣyamānā A2: ukṣyamānā B D || asaṃkhyeyāḥ] A2: asaṃkhyeyā B D.
- 88d sattvā] = satvā A2 D: om. sattvā B.

- 89b prottārya] B D: prāttārya A2.
- 90c rogiṇo] A2 D: nogino B.
- 90d dṛṣṭvātmanā] A2: dṛṣṭvātmano B D.
- 90d mahauśadhaiḥ] D: mahośadhaiḥ A2 B.
- 90e °bhūtena te] A2 D: °bhūtema ta B.
- 90f nirāturāḥ] A2 B: jināturāḥ D.
- 91a jayakīrtiś] D: jayakīrttiś A2: jayakīrtti B.
- 92a siṃhāsanāsīnam] A2: siṃhāsanāsītam B: siṃhāsanāsīnām D.
- 92b amarādibhiḥ] A2: amarodibhiḥ B: amagedibhiḥ D.
- 92c kṛtāñjalipuṭaiḥ] A2: dhṛtāñjalipuṭai B: dhṛtvāmjalipuṭaiḥ D || śiṣyair] A2 D: śiṣyer B.
- 92d vandyamānaṃ] A2 D: vanpamānaṃ B || praiḥṣata] corr.: prekṣata A2: vaiḥṣyata B: maikṣata D.
- 93b svapnaṃ] A2: svapna B D || °bodhitāḥ] corr.: °bodhitāḥ A2 B D.
- 94c yaśodharā] A2 D: vaśodharā B.
- 94d sampaśyanty] A2 B: sampaśyan D || evaṃ] A2 D: avam B.
- 95d samādeṣṭum] A2 D: samādeṣṭam B.
- 96a samākhyātaṃ] A2 B: samsamākhyātaṃ D.
- 96d *sampaśyann evaṃ] ex con: sampaśyanty evam A2 B: sampaśyantyaivam D.
- 97a yad ahaṃ] A2 D: yad ehaṃ B.
- 97a supriye] A2 B: supriya D.
- 97b svapne] A2 B: śvapne D.
- 97d tiṣṭhāmy evaṃ] A2 D: tiṣṭhānyeva B.
- 98a bhartrā] corr.: bharttā A2 B D.
- 98d sampaśyann evaṃ] B: sampaśyan evaṃ D: sampaśyanty evaṃ A2.
- 99d bodhayitum] A2 B: bodhayatum D.
- 100b bodhisattvo] ≅ bodhisatvo A2 D: bodhisatvā B.
- 100d ādiśat] B D: abravīt A2.
- 101a yathā *dṛṣṭam] ex con: yathā diṣṭam A2 B D.
- 101c svapna°] A2: svapne° B D.
- 102c °modantī] A2 B: °modanti D.
- 103a prathama°] B: prathamam A2 D.
- 103b prapūrayet] corr.: prapūrayat A2 B D.
- 104c jagadbhadra°] A2 D: jagabhadra° B.
- 104d °dharmacakraṃ] A2 D: °dharmaṃ cakram B.
- 105b sattvāḥ] ≅ satvāḥ A2: satvā B D.

- 106a caturthasya] A2 D: caturthaṃ sva B.
- 106b caturvarṇā] A2: catuvarṇā B D.
- 106d bhaveyur] D: bhaveyu A2 B.
- 107c sarve] A2 D (= sarveṣu, m.c.): sarva B.
- 108a 'nyeṣām] ≙ nyeṣām A2 D: nyaṣām B.
- 108b sattvān] A2: sattvā B D || bhavadadheḥ] A2: bhavadadhe B D.
- 109c °*bhaiṣajye] ex conī: °bhaiṣajyaṃ A2 B D.
- 109d °kuryām] D: °kuryā A2 B.
- 110f preṣayeyaṃ] A2 D: prasayeyaṃ B.
- 111e *yat tvaṃ] D: ya tvaṃ A2 B.
- 111f *āpnuyāḥ] ex conī: āpnuyāt A2 B D.
- 112b °lālasā] B: °lālasāḥ A2 D.
- 112c dhṛtvā] A2 B: kṛtvā D.
- 112d saṃramasva] A2: saṃnamasva B: saṃcarasva D.
- 113a bhartrā] corr.: bharttā A2 B D.
- 113c tathety] B D: tathāty A2.
- 113d prabodhitā] corr.: prabodhitāḥ A2 B D.
- 114b bodhisattvaḥ] ≙ bodhisatvaḥ A2 B: bodhisatva D.
- 115d prāramat] A2 B: prārabhat D.
- 116a cāritracaraṇa° A2: cāritravarāṇa° B: cāritravarāṇaṃ D.
- 116c surālayāc] A2 D: surālayā B.
- 116d samāviśat] B D: samāviśet A2
- 117a nimittam ājñāya] D: nimittam ārajñāya B: nimitta vijñāya A2.
- 117b sa] A2 B: saḥ D.
- 119d 'bhavan] ≙ bhavan B D: bhavat A2.
- 120a ādiṣṭam] ≙ ādiṣṭaṃ D: ādiṣṭaṃm A2 B.
- 120d śrutvaitad] corr.: śrutvetad A2 B D.
- 121 note] the text of A2 ends in the verse 121, pāda a, anumoda- (i.e. the end of 107b). The text of A starts after that, -nti in the beginning of 108a.
- 122a śāstrā] A2 B: śāstā D.
- 122b śrutv*āsoko *mahīpatiḥ] ex conī: śrutvānando mahāmatīḥ A2 B D.
- (Colophon) iti svapna°] A(ante corr.): iti śrīlālitavistare svapna° A(post corr. marg.) B D || samāptaḥ] A B: om. samāptaḥ D.

1.2 TJAM 第16章の和訳 (全訳)

夢 [という] 品、第16章

かの阿羅漢たる賢き出家修行者、大通慧者ウパグプタは (mahābhijña upagupto) {or: 大通慧者マハーブツダは (°jño mahābuddho)}、かの王アショーカを (aśokaṃ taṃ paṭiṃ) {or: かの出家修行者アーナンダを (ānandaṃ taṃ yatīṃ)} 見つめながら呼びかけて、次のように語りました。 — [1]

[父王の夢]

時にシュッドーダナ王は夜中に寝台にいて眠っていましたが、フリーデーヴァ [という兜率天の天子] の威神力によって、夢の中で次の様な [光景を] 見ました — [2] 宝珠の網に覆われた、宝石で飾られた大きな象に乗って、都城から出て行く息子 [の姿] を。 [3] それを見ながら、沸き起こった大きな笑い声と泣き声を、そして自身が震えているのを、 [自身の] 体が熱苦に激しく焼かれているのを [夢で見ました]。 [4]

そのことを夢に見て、王は目覚め、「私に何が起こるのだろうか」と、憂慮という毒に悩み苦しみながら、ずっと物思いに耽っていました。 [5]

このように不安に心が襲われているかの王を見て、世界の守護神たちが集まってきて、次のように言いました。 [6]

「大王よ、恐れないで下さい。清澄な心をいだき、歡喜してください。あなたの夢において成就する果 (予知夢の実際の意味)、それを私は語りましょう。お聞き下さい。 [7]

菩薩であるあなたの賢き息子は生類の益のため、王権を捨て、 [家を] 出離して、出家した者・修行者となるでしょう。 [8]

あなたが夢で笑ったのは、 [果として] あなたに苦が生じるからです。あなたが夢の中で泣いたのは、彼によって甚だしい安樂が生じるからです。 [9]

必ずあなたの息子であるかの菩薩・大士はマーラの群に打ち勝って、阿羅漢として悟りを達成し、仏 (勝者) となるでしょう。 [10]

このように正しく認識して、大王よ、落胆しないでください。運命の力によりあなたはこの瑞夢を見たのです。」 [11]

このように世界の守護神たちの皆が教示するのを聞いて、よく理解させられた王は、深思しながら、気落ちしたままでいました。 [12]

[義母ガウタミーの夢]

さて [菩薩の] 母の妹たるガウタミーも寝台にいて、夜中に睡眠に入り、眠っていると、このような夢をみました。 [13]

それはかくの如くです。菩薩・大士たるかの王子が一匹の牡牛たる姿となり、生まれのよい、すべて〔の牛〕を凌駕した〔大きな〕角を生やした〔牛〕として、[14] 立派なこぶと大きな体をもつ、白色の美しい、心を魅する〔姿〕で、甘美な声で啼きながら、都城から急いで走り出てゆきました。[15]

そのような夢を見て、ガウタミーは目覚めました。その〔夢の〕果を知りたいと願いながら、その事に心が占められたままです。[16]

そんな状態でいる彼女を見て、神々の王（インドラ）はやって来て、よく理解させるため、みつめながら呼びかけ、次のように語りました。[17]

「ガウタミー、気落ちしないで下さい。あなたが夢に見たことの、その果を語りましょう。心を定めて、お聞きなさい。[18]

それはかくの如くです。大通慧者であるかの菩薩は生類の益のため、王権を捨てて、〔家から〕出離して、出家し、禁戒を行じながら、[19] 異教徒たちとマーラの群に勝利し、禅定をなして悟りを得るでしょう。その後あらゆる場所で生類に正法を教示することでしょう。[20]

その後、彼は阿羅漢・生類の師として、生類を法から成る者に変え、如来のなすべき仕事を達成して、〔涅槃して〕仏の住まいに至ることでしょう。」[21]

〔菩薩の妻の夢（1）〕

次に、夜中に寝台にいたヤショードラーも、睡眠の力の中に陥って、眠ると夢の中で次のような〔ヴィジョン〕を見ました。[22]

それはかくの如くです。かの大通慧者、シュッドーダナ王の息子（菩薩）は王宮から上昇し、たちまち空の中にいました。[23]

彼は雲になって、あらゆる場所を途切れなく覆いながら、低い深い音を轟かせて、すべての者の心をうっとり惹きつけながら、[24] 稲妻の美の光輝という〔沢山の〕ランプをもって、いたるところで黒闇をうちやぶり、とても冷涼な雨滴をもって生類を喜ばせました。[25]

このような夢をみて、ヤショードラーは目が覚め、驚愕して起きて、ため息をつきながらその事について深思に耽っていました。[26]

その事の懸念のゆえに気落ちしている彼女を見て、ブラフマー神（梵天）がやって来て、虚空に居て、語りかけて次のように教示しました。[27]

「よきご婦人よ、気落ちしないで下さい。あなたの夢の果は善く、大利が達成されるでしょう。それ故〔むしろ〕歓ぶ者として、晴朗な気持ちになられて下さい。[28]

この王子は実に菩薩であり、生類の益のため、王位を捨てて、〔家から〕出離し、出家の禁戒を行じながら、[29] 苦行によって外道師たちに勝ち、マーラ（魔）の大群に打ち勝ち、阿羅漢として、悟りに到達し、法王・仏（勝者）となるでしょう。[30]

その時至る所で人々の上に教えの甘露を雨降しながら、煩惱の火に焼かれている生類を飲ばせ (pramodayan) {or: 生類によく理解させ (prabodhayan)}、清涼たらしめるでしょう。
[31]

このように正しく認識して、心の明澄を得なさい、落胆してはなりません。あなたも同じようになられて、諸仏の教えを行う者となりなさい。」 [32]

このようにかのブラフマー神は [彼女に] 教示すると、その後神々の世界に行って、すべての神々を呼び寄せて、話してよく理解させました。 [33]

神々はそのブラフマー神による教示を聞いて、よく理解を得、まもなくブツダが現れる、と言いながら、心の明澄 (浄信) を得ました。 [34]

ヤショーダラーもそのブラフマー神による教示を聞いて、よく理解を得、夫はきつと仏陀になるだろう、と思念しつつ、喜びました。 [35]

[菩薩の妻の夢 (2)] ⁽¹³⁾

その後更に、ベッドで休んでいるゴーパーが、夜中に睡眠の力にとらわれ、眠っていると、夢のなかで次のような [ヴィジョン] を見ました。 [36]

それはこの様なものです。海と山を伴う大地すべてが揺れました。甚だ激しい風によって山頂は崩れ、地に落ちました。 [37]

大風によって樹は根こぎにされ、折れて倒れました。虚空にある太陽と月は星々を伴って地上に落下しました。 [38]

自分の髪毛が切られ、また両手と両足が切れました。自分の体が裸にされ、王冠が落ちました。 [39]

真珠のネックレスも切れて、地面に散乱しました。ベッドの [四] 脚も折れ、 [その] ベッドは地面に [倒れました]。 [40]

[彼女の] 夫の輝かしい傘の柄は砕けて、地面に落ちました。装身具は散乱し、水によって運ばれ流されてゆきました。 [41]

頭冠や装飾品や衣類がベッドの上に散乱していました。都城から松明が出て行き、都城が闇によって覆われました。 [42]

鈴が付いたネットが裂けました。真珠のネックレスは落とされました。海は震えました。山の王メールも震えました。 [43]

これらのことを夢の中で見て、かのヤショーダラーは目覚めて、すぐ立ち上がり、 [夫のいる] その寝台に赴きました。 [44]

13. TJAM においては菩薩の妻ゴーパーとヤショーダラーは同一人物であり、そのために菩薩の同一の妻が二回、別様に夢を見たことになっている。ここの TJAM 第16章の記述のソースである Mahāvastu のヤショーダラーの夢と Lalitavistara のゴーパーの夢とは伝承が異なっているが、TJAM はそれら両仏伝の異なる伝承を菩薩の同じ妻が見た夢として、うまく両立させた。

驚き、乱れた感情をもつ彼女は、その事について心で思い耽っていました。そのような状態である彼女を見て、夫もそばに寄り、苦悩した顔のかのヤショーダラを見つめながら、次のように語りました。[45]

「愛するひとよ、あなたは苦悩した顔をしています、いかなる苦しみが生じたのですか。もし私を夫と思うなら、ここで私に正しく話してください。」[46]

このように夫が教導するのを聞いて、苦悩した顔のかのヤショーダラーはその夫を見つめて、次のように語りました。[47]

「王中の王よ、私は眠りの中でこのようないくつかの〔夢〕を見ました。一体、いかなるその〔夢の〕果があるのかと思ひ、それ故に私の心は怯えているのです。」[48]

こうしてゴーパーの語った夢の出来事を聞いて、かの夫は〔いかなる〕前兆かを考察して、妻に次のようによく理解させました。[49]

「ゴーパーよ、喜びなさい。あなたに何も悪い事はありません。正法をなす者たちだけが夢でこのような〔ヴィジョン〕を見るのであり、他の人々は〔見ません〕。[50]

あなたが夢で見た、すべての大地が震動したこと、また、大風に打たれて岩山の頂きが地面に落ちたことは、[51] 〔その夢の果として〕神々などすべての生き物たちがあなたに敬意を示すことでしょう。このことを正しく認識して、落胆せずに、それを喜びなさい。[52]

また〔あなたによって〕見られた、樹々が風に打たれて、根こぎにされて倒れたこと、王冠が落ち、髪の毛と両手が切られたこと、[53] 裸の自分の両足と両手が切られたこと、〔その夢の果として〕あなたの煩悩の網は断たれるでしょう。また有為〔法〕についての見解の網が〔断たれるでしょう〕。[54]

また星と共に、太陽と月が地に落下したので、それ故に〔あなたは〕煩悩という敵に打ち勝って、供養されるべき女尊者となるでしょう。[55]

また真珠のネックレスが散乱し、宝石の帯が切れたので、それ故に〔あなたは〕女の体を捨てて、男性の体を得るでしょう。[56]

また碎けた私の傘の柄が、そして碎けたベッドの〔四〕脚が、ゴーパーよ、あなたによって夢で見られましたが、その果を私は得るでしょう。[57] すなわち、私は生存の海の四暴流を越え、一切法の王、師、三界の主となるでしょう。[58]

またベッドの上で頭冠や装飾品や衣類が散乱し、水の暴流によって浮かぶのをあなたが見ましたが、[59] 〔その夢の果として〕私は心浄らかな者となり、めでたい相好に飾られ、世界の人々に讃えられながら、あらゆる場所を遊行するでしょう。[60]

また大きな松明が都城の外に出て行くのが見られ、また都城の全体が闇に覆われたのが見られたことは、[61] 〔その夢の果として〕無明の闇に満ちた〔世界〕に、大きな輝きをもつ智慧の灯明を私は燃え輝かせて、世間の人々に仏の住まい（仏国土）を示すでしょう。[62]

ゴーパーよ、真珠のネックレスが散乱し、また黄金の鎖が切れたこと、その〔夢の〕果を私は〔次のように〕享受します。[63] 煩惱の網を破り、〔正〕法の經典を教示することで、私はすべての有情を救済し、常に浄行を行わせるでしょう。[64]

またあなたは諸海が動揺し、メール山が震動したことを見たので、それ故、あなたは女の尊者として、大きな供養を至る処で受けることでしょう。[65]

あなたに悪趣の怖れはありません。自分について憂い悲しまないで下さい。歡喜・喜悅と真の安樂を保持して行動し、落ち込まないで下さい。[66]

私によって布施がなされたこと、また誓行が善戒に基づき行ぜられたこと、また忍辱が絶えず行修され、正法が常に達成されたことは、[67] その果として、あらゆる人々が私に親切であり、とても友好的で、〔彼らは〕好意と喜悅をもって供養をなしながら、歡びを得ているのです。[68]

私は百千劫の間、菩薩行の誓戒を行じながら、あらゆる有情に利益をなして、絶えず浄行をなしてきました。[69] その果として、すべての者たちは喜悅して、私に対して明浄の心（信心）を起こします。そして〔彼らの〕あらゆる罪惡は断滅し、菩提道が清められます。[70]

それ故、あなたは憂悩しないで下さい。歡喜によって心を喜ばせて下さい。幸と美とよき徳質の保持者として、幸せに恵まれた女にもあなたはなることでしょう。[71]

あなたに夢で見られた〔ヴィジョン〕はすべて瑞相です。それ故、私たち二人はきつとめでたい悟りの達成をもつことでしょう。[72]

無垢の心をもち、浄らかな感官・身体をもつ有情たち、善逝の子たちは、吉祥なるこのような夢を見るものです。[73]

以上を正しく知って、あらゆる勝れた目的を成就させる、悟りへの誓願を堅持しながら、三宝を憶念して、行じなさい。[74]

その福德の享受によって、三輪清浄なる女として、悟りの知に達して、あなたは仏の境地を得ることでしょう。」[75]

このように夫が教えたことをかのヤショーダラーは聞いて、よく理解して、「そういたします」と信受して歡び、歡喜しました。[76]

〔菩薩の夢（1）〕

さて夜中にかの菩薩・大士も同様にベッドに身を横たえ、眠りましたが、五つの夢を見ました。[77]

（**第一の夢**：）全大地を寝台とし、スメール山を枕とし、左右の両手を〔それぞれ〕東と西の海に置き、[78] 南の海に両足を自ら伸ばして眠っていました。このような第一の夢をかの大慧者は見ました。[79]

(第二の夢：) 更にまた、彼が同様に眠った時、夢の中で次のように見ました。スティリカという名の草が臍の円輪から生じ、[80] 天空までを[すべて]覆って、自分にとっての傘蓋のように立ちました。第二の夢をこのようにかの菩薩は見ました。[81]

(第三の夢：) 更にまた同様に彼が眠った時、次のような自身の夢を見ました。赤い体をもち、青黒い頭をもつ四匹の生き物が、[82] 足の裏から出現し、[菩薩]自身の臍の輪まで覆いながら立ったのを、彼は第三の夢において見ました。[83]

(第四の夢：) 更にまた同様に、彼が眠った時、次の様な夢を見ました。四羽の異なる色をもつ鳥が空から飛んでやって来て、[84] [菩薩]自らの両足に接吻をしながら、[全身]真っ白になり、消えました。彼は自らの第四の夢をこのように見ました。[85]

(第五の夢：) 更にまた同様に、眠った彼は次の様な夢を見ました。大きな糞の山の上でそぞろ歩きしながら、汚されることなく、[86] 彷徨い歩きつつも、あらゆる方角を照らしている自分自身が[いる]、そのような第五の夢をかの大慧者は見ました。[87]

[菩薩の夢 (2)]

また更に同様に、彼は眠って次の様に夢を見ました。無数の生き物たちが大河の水によって押し流されており、[88] [それを]見て、自らが一艘の小舟になり、引き上げて救い、陸の上に彼らを立たせました。このような第六の夢をかの大士は見ました。[89]

また更に同様に、眠った彼は次の様な夢を見ました。医者になった[彼は]自ら沢山の病気の生き物たちを診て、偉大な薬草をもって彼らすべてを無病で健康にしました。[90]

また[彼は]合戦における自分の勝利の名声が拡がるのを見、虚空から神々によって歓びの声が[自分に]伝えられるのを[見ました]。[91]

またメール山上で獅子座に座っている自分に対して、神々などや合掌をしている弟子たちが拜んでいるのを彼を見ました。[92]

かの大士はこの様な夢を見て、目覚めました。そのすべてを想起しながら、瞑想に集中した状態でいました。[93]

[菩薩の夢の説明]

このように瞑想しながら坐っているその夫を見て、最愛の妻であるかのヤショウダーラは見つめながら次のように言いました。[94]

「王子、あなたは瞑想しながら坐っておられますが、一体どうしてそのようにして過ごしていらっしゃるのですか。もし私に愛情があるなら、そのことをお示してください。」[95]

このようにゴーパーが語ったのをかの菩薩は聞き、最も愛しい妻であるかのゴーパーを見つめながら、次の様に答えました。[96]

「愛しいゴーパーよ、今私が夢の中で見たそのことについて憶念を保ちながら、このように沈思して過ごしていたのです。」[97]

そのように夫が語ったのを聞いて、かのヤショードラーは夫であるかの大士を見つめて、こう尋ねました。[98]

「王子よ、何を夢にご覧になったのですか。その果はいかなるものですか。そのことを正しくお示し下さり、私によく理解させて下さい。」[99]

このように妻が尋ねたのを聞いて、かの菩薩は笑いながら、いとしい愛する女であるかのゴーパーを見つめ、このように教えました。[100]

「わが妃よ、お聞きなさい。見たことをその通りにすべてお話します。」そう言って、夢の出来事を詳しく教示しました。[101]

「それらの果報を話しましょう。妃よ、集中してお聞きなさい。それを聞いて、歓びつつ心の清澄を得なさい。気落ちしないでください。[102]

第一の夢の果報は、私は悟りに達して世尊・ジナ（仏）になろうという、私の誓願を満たすものです。[103]

第二の夢の果報によって、ヴァーラーナシーにおける仏のアーシュラマ（出家者の住み処）において、善き法輪を転じながら、生類に〔善戒を〕行じさせるでしょう。[104]

第三の夢の果報によって、あらゆる有情が歓喜して、誠信（バクティ）をもって私を信奉し、神々の住まいに赴くことでしょう。[105]

第四の夢の果報によって、四つの種姓の人々も〔皆〕私に帰依をなして、梵行者となることでしょう。[106]

第五の夢の果報によって、あらゆる世界においても私は敬われ、供養され、導師として尊崇されるでしょう。[107]

それによって、また他の果報によって、あらゆる有情を生存の海から救済し、幸せな状態に置いて、善戒を私に行わせることでしょう。[108]

煩惱という苦熱の火によって焼かれているあらゆる有情に至る処で浄化しながら、正法という不死の甘露の薬効で〔彼らを〕私は健康にするでしょう。[109]

阿羅漢としてマーラの群に勝利し、三界の世界において、阿羅漢である弟子たちの群と共に行動して、有情たちに気づきを与えつつ、三乗に安立せしめ、仏の住まいに私は送ることでしょう。[110]

この夢の果は悟りの達成を示すものであり、善い前兆です。夢の異熟によってこれはあなたにとっても実にめでたいものです。それ故に、あなたはマーラ（魔）という依処を捨てて、正法という依処を得ることでしょう。[111]

以上のことを正しく認識して、正法の徳性を強く求める女として、三宝への憶念を保ちながら、常に浄行を愉しみなさい。」[112]

このように夫が教示したことを聞いて、かのヤショーダラーは「そういたします」と信受して喜び、歡喜しました。[113]

[菩薩の妻の懷妊]

その時かの菩薩サルヴァールタシッディ（一切義成就）は、心を集中し、往古の菩薩たちの[行った]世俗法について考えました。[114]

瞑想して、菩薩たちの世俗法の法性（常法）を思い出し、家系（後継ぎ）のために彼は性愛の行為を欲し、ゴーパーと共に楽しみました。[115]

その時チャーリトラ・チャラナ・スダルシャ・ユーティカ（行為の動作が美しいジャスマン[の如き者]）という名のシャクラ（インドラ神）が天界の住まいから下生して、ゴーパーの子宮に入りました。[116]⁽¹⁴⁾

そのことの徴候を一切智であるかの菩薩は認識して、ゴーパーの頭の上に護符紐・大真言をかけました。[117]

その後かのサルヴァールタシッディは出離することを願いながら、時を観察し、悟りへの心を抱いて彼は瞑想しつつ住しました。[118]

そのようにかの大士が出離することを願っているのを見て、梵天をはじめとする神々すべては歡喜しました。— [119]

以上、私の師が教示されたことをそのまま私は今お話しました。大士よ、あなたもこれをお聞きになり、隨喜（信受して歡ぶこと）されますように。[120]

この『夢の出来事の教話』を聞いて隨喜する者たちは皆、大士となって悟りを達成しますように。[121]

— 以上のように聖者が説いたのを聞いて、大地の守護者であるアショーカは (aśoko mahīpatiḥ) {or: 偉大な智者アーナンダは (ānando mahāmatīḥ)}, 「そのようにいたします」と約言し、衆会の人々と共に、喜んで信受しました。[122]

『夢』 [という] 品、第16章終わる。

14. Cāritracaraṇasudarśayūthika という名のシャクラが菩薩の妻に入胎して釈尊の息子 Rāhula として誕生した出来事は Mahajñatakamālā 第32章第19～22偈ならびに Karuṇāpūṇḍarikasūtra (ed. Isshi Yamada (1968) 校訂テキスト p. 315) に記されている。

2. Tathāgatajanmāvadānamālā 第17章の校訂研究

第17章を内容的に4区分して、各部所のソースとオリジナル箇所をおおまかに示せば、次の通り：

- (1) 第2～第13詩節（父王の菩薩への説得1）の記述は Lalitavistara 第14章を利用。
- (2) 第14～第58詩節（父王の菩薩への説得2）の記述は TJAM オリジナル。
ただし途中、第28詩節の記述は Lalitavistara 第14章を利用。
- (3) 第60～68詩節（父王が園林と道の清掃を命じる）の記述は Lalitavistara を第14章を利用。
- (4) 第69詩節以降、章末までの記述は Buddhacarita 第3章と第4章を連続的に利用。
ただし途中、あちこちに TJAM の改変した詩節やオリジナル詩節がはさまる。

2.1 TJAM 第17章『老人・病人・死人を観察して性愛の欲望を退ける』 の梵文テキスト

17 Jīrṇarogigatāsudarśanaratirāgavighātanaparivarta

[108a2] atha so 'rhan mahābhijña upagupto {or: °aḥ śākyasiṃho} yatih punaḥ /
tam aśokaṃ nṛpaṃ {or: ānandaṃ yatim} paśyan samāmantryaivam ādiśat // 1
etatsvapnapravṛttāntaṃ śrutvā śuddhodano nṛpaḥ /
putro 'yaṃ pravrajen nūnam iti dhyātvā vyaśīdata // 2
tataḥ sa janako rājā putrasaṃdarśanotsukaḥ /
samantrījana utthāya drutam antaḥpure 'carat // 3
tatra sa samupāviṣṭaḥ samantato vilokayan /
kāñcukīyaṃ samāmantrya papracchaivaṃ samādarāt // 4 ≈ L 186.2; H i,670.7-8
asti bhoḥ kāñcukīyātra nandano me kuhāśritaḥ /
tanmukhaṃ draṣṭum āyāmi tan me saṃdarśayātmajam // 5 ≈ L 186.2-3; H i,670.8
iti rājñā samādiṣṭaṃ kāñcukīyo niśamya saḥ /
asti ta ātmajo rājann atrāgatyaḥbhidṛśyatām // 6 ≈ L 186.3; H i,670.8
iti tenoditaṃ śrutvā śuddhodanaḥ pitā nṛpaḥ /
sahasā samupāśṛtya tam ātmajam apaśyata // 7
drṣṭvā dhyānābhisamraktaṃ ratisaṃbhoganiḥspṛham /
putraṃ taṃ suciraṃ paśyan manasaivam vyacintayat // 8
ātmajo 'yaṃ mahāsattvo virakto rājyaniḥspṛhaḥ /

tathābhiniṣkramen nūnaṃ yathā svapne 'bhidiṣyate // 9
 iti dhyātvā sa rājendra upāṣṭya tam ātmajam /
 āliṅgya śirasi ghrātvā tyaktāśrur evam abravīt // 10
 hā putra katham evaṃ tvaṃ ratisaṃbhoganiṣpṛhaḥ /
 yatir iva viraktātmā dhyānarakto 'vatiṣṭhase // 11
 kiṃ te 'bhijāyate duḥkhaṃ yat tvaṃ kāme 'pi niṣpṛhaḥ /
 yad icchasi vadasvātra dāsyāmi te tad īpsitam // 12
 yad icchasi mahīm sarvāṃ rājyaṃ śrīsampado 'pi ca /
 tyaktvā dāsyāmi te nūnam ādāya svecchayā rama // 13
 sarveṣāṃ api dharmāṇāṃ rājadharmaṃ mahattaram /
 sarvaloko 'yam āśritya [108b] saṃcarante sadā sukham // 14
 tatrāpi ca mahaddharmaṃ kāmaṃ saṃsārasādhanam /
 tadarthaṃ ratisaṃrāgacaryāvrate mahatsukham // 15
 rāgo hi vardhayec cittam saṃsāradharmasādhane /
 tasmād rāgamahotsāhasukhaṃ bhuktvācared raman // 16
 vinā rāgaṃ na saṃsāre dharmārthaguṇasatsukham /
 tasmād rāge matiṃ dhṛtvā bhukṣva kāmaṃ sukhaṃ raman // 17
 rāgo hi sādhyet kāmaṃ kāmāt santānam udbhavet /
 saṃtatiḥ sādhyet dharmam dharmeṇa kulasaṃsthiṭiḥ // 18
 kuladharmasthitir yatra tatra lakṣmīḥ sadāśrayet /
 yatra samāśritā lakṣmīs tatra sarvārthasampadaḥ // 19
 sarvārthasampado yatra sa kuryād dānam īpsitam /
 etatpuṇyaviśuddhātmā bhadrāśrīsadguṇāśrayaḥ // 20
 duṣṭamitraviraktātmā sanmitraguṇasaṃrataḥ /
 suśīlo bhadrīkācāraḥ pariśuddhatrimaṇḍalaḥ // 21
 sarvasattvahitādhāraṃ kṣāntivratam samācaret /
 tato vīryamahotsāhaiḥ sarvaṃ dharmārtham arjayet // 22
 tato dhyānaviśuddhātmā prajñāratnam avāpnuyāt /
 tadratnasuprabhādīpair bhāsayan sadgatiṃ vrajet // 23
 iti vijñāya putra tvaṃ rāgacaryāvratam caran /
 kāmīnībhīḥ sahārakto bhuktvā kāmaṃ sukhaṃ rama // 24
 vihr̥tya pramadodyāne sarvartuṣpamaṇḍite /
 varṇagandharasopetaphalavṛkṣaiḥ praśobhite // 25
 vicitraṣpamālābhīr ātmānam abhimaṇḍayan /
 phalāni pakvapatyāni prabhuñjāno yatheccchayā // 26

≈ L 186.4-6; H i,670.9-11

snātvā sarovare 'ṣṭāṅgaśuddhāmbuparipūrite /
 padmotpalādipuṣpādhye nānāpakṣisamākule // 27
 mandire trividhe ramye haimantike sadauṣṇike /
 graiṣmike śītalībhūte vārṣike samavāstuke // 28
 uṣitvā pramadāsaṅghaiḥ saha krīdet pramoditaḥ /
 yathābhilaṣitaṃ bhuktvā saṃcarasva sadā sukham // 29
 etad eva hi saṃsāre dānavratasamudbhavam /
 mahānandasukhotsāhaṃ saṃvṛttidharmasādhanam // 30
 brahmaśakrādayo devāḥ sarve lokādhipā api /
 kantā[109a]bhiḥ saha saṃraktā bhuktvā kāmāṃ ramanty api // 31
 brāhmaṇā ṛṣayaś cāpi kuladharmasamācarāḥ /
 te 'pi kāmagaṇāraktā ramanta bhāryayā saha // 32
 sarvalokādhipā bhūpā rājānaḥ kṣatriyā nṛpāḥ /
 te 'pi pañcagaṇotsāhai ramante pramadāgaṇaiḥ // 33
 vaiśyāḥ prajādhipāś cāpi pañcakāmagaṇaratāḥ /
 pramadāratibhuñjānāś carante kulasaṃvaram // 34
 gṛhasthā vaṇijaḥ śūdrāḥ kāmabhogyasukhārthinaḥ /
 sarvadravayāni vikrīya prakurvante dhanārjanam // 35
 sārthavāhā vaṇignāthā api kāmasukhāśayā /
 abdhim api samuttīrya ratnārjanam prakurvate // 36
 sādhave dhaninaś cāpi nānopāyair dhanārjanam /
 kṛtvā kāmasukhārthena na tyajanti sadodyamam // 37
 daridrāḥ kṛṣiṇaś cāpi kṛṣikarmasamudyatāḥ /
 te 'pi kāmasukhārthena na manyante pariśramam // 38
 dāsāḥ preṣyajanāś cāpi parakarmasamudyatāḥ /
 te 'pi kāmāśayā nityam prakurvate dhanārjanam // 39
 bhṛtyā sainyāś ca yoddhāras te 'pi kāmasukhāśayā /
 anapekṣya svajīve ' pi viśanti raṇamaṇḍale // 40
 durbhagāḥ kṛpaṇāś cāpi yācitvānnaṃ gṛhe gṛhe /
 bhuktvā kāmasukhaṃ bhoktuṃ bhramanti sarvadārthinaḥ // 41
 evaṃ sarve 'pi mānuṣyāḥ śrīmantaḥ kṛpaṇā api /
 yathākāmaṃ sukhaṃ bhuktvā praramante 'bhimoditāḥ // 42
 paśavo jantavaś cāpi kṛmikīṭāś ca pakṣiṇaḥ /
 svasvakāntāsahāraktā ramanto bhūñjate ratim // 43
 bhūtāḥ pretāḥ piśācāś ca te 'pi kāmasukhāśayā /

≈ L 186.10-12; H i,670.16-18

svasvabhāryāratim bhuktvā pracarante pramoditāḥ // 44
 dānavā garuḍā nāgā api kāmasukhārthinaḥ /
 pramadāratisaṃbhogaṃ bhuktvā ramanti sarvadā // 45
 gandharvāḥ kiṃnarā yakṣāḥ kumbhāṇḍā rākṣasā api /
 pramadābhiḥ sahāraktā ramanto bhuñjante sukham // 46
 evaṃ vidyādharaś cāpi siddhāḥ sādhyādayo 'pi ca /
 pramadāvaśagā nityaṃ ramanto bhuñjate sukham // 47
 śakrādayo [109b] surāḥ sarve sahāpsarogaṇair mudā /
 *divyāmṛtaṃ prabhuñjānā ramante svecchayā sukham // 48
 yāmāḥ saṃtuṣitāś cāpi nirmāṇaratikā api /
 paranirmitavaśābhivartikā amarā api // 49
 sarvakāmaguṇāraktāḥ svasvāpsarogaṇaiḥ saha /
 divyāmṛtaṃ prabhuñjānā ramante svecchayā sukham // 50
 kāmadhātusamutpannaḥ ko na kāmavaśe sthitaḥ /
 sarve kāntāvaśe sthitvā caranti kulasaṃvaram // 51
 kāmo hi sarvasaṃsāradharmamūlo nigadyate /
 vinā kāmam katham dharmam pracaret tribhaveṣv api // 52
 tasmāt kāmavaśe sthitvā kuladharmasamāśritaḥ /
 kṛtvā dānam sukham bhuktvā saṃcarasva mudā raman // 53
 yāvad yuvā svakāntābhiḥ saha raman pramoditāḥ /
 svakuladharmasamsthityai sādhyā svātmasaṃtatiḥ // 54
 tato vṛddhatvasaṃprāpte saṃsthāpya svakulasutam /
 pravrajitvā tapo'raṇye sthitvā munivrataṃ cara // 55
 tathā cet te sadā bhadraṃ yāvajjīvaṃ sukham raman /
 ante nirvṛttim āsādy saugatālayam āpsyasi // 56
 iti vatsa pariññāya svakulasthitisādhanam /
 rāgacaryāvratam dhṛtvā rama kāntāgaṇaiḥ saha // 57
 iti pitrā samādiṣṭam niśamya sa mahāmatih /
 pitaram taṃ samālokyā tatheti pratyabhāṣata // 58
 tataḥ sa janako rājā matvātmajaṃ prabodhitam /
 amātyaṃ samupāmantrya sampaśyann evam ādiśat // 59
 amātya yuvarājo 'yam udyānam gantum icchati /
 tatpathi samalaṃkṛtya ghaṇṭāghoṣam pracārāya // 60
 iti rājñā samādiṣṭam śrutvāmātyas tatheti saḥ /
 sahasā nagare mārge sarvataḥ samaśodhayat // 61

≈ L 187.7-8; H i,672.14-15

tato dhvaja*patākābhiḥ samalamkṛtya sarvataḥ /
tatrāpi pramadodyāne samalamabhyakārayat // 62
tatas tajjanam āhūya rājñādiṣṭam tathāvadat /
sādhō ghaṇṭām praṇādyaiṣam sarvāṃl lokān prabodhaya // 63
tadupādiṣṭam ākarṇya tatheti sa prabodhitaḥ /
[110a] ghaṇṭām ādāya tatrāśu saśahāyo mudācarat // 64
tato ghaṇṭām praṇāditvā sarvatra nagare yathā /
rājñādiṣṭam tathākhyāya sarvāṃl lokān vyanādayat // 65
śrīmān sarvārthasiddho 'yaṃ yuvarājo nṛpātmajaḥ /
ito 'hni saptame draṣṭum udyāne pramade vrajet // 66 ≈ L 187.8-9; H i,672.15-16
tad atrābhavyavastūni sthāpyāni mā puraḥ kvacit /
maṅgalyāny eva vastūni sthāpanīyāni sarvataḥ // 67 ≈ L 187.9-11; H i,672.16-18
tad ghaṇṭāghoṣaṇam śrutvā sarve pauraḥ pramoditāḥ /
taṃ bhadrātmakaṃ draṣṭum samutsukāḥ pracerire // 68
tataḥ **sa dhīro** mṛduśādvalāni
pumskokilonnāditapādapāni /
śuśrāva padmākaramaṇḍitāni
gītair nibaddhāni sa kānanāni // 69⁽¹⁵⁾ = Bc 3.1
śrutvā tataḥ strījanavallabhānām
manojñabhāvaṃ purakānanānām /
bahih prayāṇāya cakāra buddhim
antargṛhe nāga ivāvaruddhaḥ // 70 = Bc 3.2
tato nṛpas tasya niśamya bhāvaṃ
putrasya diṣṭyātimanoharasya /
snehasya lakṣmyā vayasaś ca yogyām
ājñāpayām āsa vihārayātrām // 71 = Bc 3.3
nivartayām āsa ca rājamārge
saṃpātam ārtasya pṛthagjanasya /

15. この第17章では第69詩節以下に馬鳴の *Buddhacarita* 第3章と第4章から借用した詩節が連続的に出てくる。詩節の横に記した、= Bc というイコールの記号は Bc の借用を示す。その借用文の中で語句表現が Johnston 版の *Buddhacarita* と少し違っている箇所は目立つように太字にした。また、≈ Bc のように二重波線（ニアリーイコール）の記号を使って出典を記している箇所は、Bc の逐字的な借用ではなく、翻案・模倣による類似であることを示す。その ≈ の記号を用いた *Buddhacarita* 出典の記述は太字にして、= の記号の箇所と見分けやすくした。

mā bhūt kumāraḥ sukumāracittaḥ saṃvignacetā *iva manyamānaḥ // 72	= Bc 3.4
pratyaṅgahīnān vikalendriyāṃś ca jīrṇāturādīn kṛpaṅāṃś ca bhikṣūn /	
tataḥ samutsārya pareṇa sāmṇā śobhāṃ parāṃ rājapathasya cakruḥ // 73	= Bc 3.5
tataḥ kṛte śrīmati rājamārge śrīmān vinītānucaraḥ sa dhīraḥ /	
prāsādapṛṣṭhād avatīrya kāle kṛtābhyanujño nṛpam abhyagacchat // 74	= Bc 3.6
dṛṣṭvā pitā taṃ sutam āgataṃ tanmano 'pi matvopavanābhilāṣim /	
gaccheti cājñāpayāti sma vācā snehān na cainaṃ manasā mumoca // 75	≈ Bc 3.7
tataḥ sa jāmbūnadabhāṅḍabhr̥dbhir yukaṃ caturbhir nibhr̥tais turaṅgaiḥ /	
aklībavidvacchuciraśmidhāraṃ hiraṇmayam syandanam āruroha // 76	= Bc 3.8
tataḥ prakīrṇojjalapuṣpajālam viṣaktamālyam pracalatpatākam /	
mārgam prapede sadṛśānuyātrāś candraḥ sanakṣatra ivāntarīkṣam // 77	= Bc 3.9
kautūhalāt [110b] sphītataraiś ca netrair nīlotpalārdhair iva kīryamāṅḍaḥ /	
śanaiḥ śanai rājapatham jagāhe pauraiḥ samantād abhivikṣyamāṅḍaḥ // 78	= Bc 3.10
taṃ tuṣṭuvuḥ saumyaguṇena kecid vavandire dīptatayā tathānye /	
saumukhyatas tu śriyam asya kecid vipulyam āśaṃsiṣur āyuśaś ca // 79	= Bc 3.11
niḥṣṛtya kubjāś ca mahākulebhyo vyūhāś ca kairātakavāmanānām /	
nāryaḥ kṛśēbhyāś ca niveśanebhyo devānuyānadhvajavat praṇemuḥ // 80	= Bc 3.12
sa rājasūnuḥ khalu gacchatīti	

śrutvā striyaḥ preṣyajanāt pravṛttim / didṛkṣayā harmyatalāni jagmur janena mānyena kṛtābhyanujñāḥ // 81	= Bc 3.13
tāḥ srastakauñcīguṇaviḡhnatās ca suptaprabuddhākulalocanās ca / vṛttāntavinyastavibhūṣaṇās ca kautūhalenānibhṛtāḥ parīyuh // 82	= Bc 3.14
prāsādasopānatalapraṇādaiḥ kāñcīravair nūpuranisvanaiś ca / vitrāsayantyo gṛhapakṣisaṃghān anyo 'nyavegāṃś ca samākṣipantyāḥ // 83	= Bc 3.15
kāsāṃcid āsāṃ tu varāṅganānām jātavarāṇām api sotsukānām / gatiṃ guruvāj jagṛhur viśālāḥ śroṇīrathāḥ pīnapayodharās ca // 84	= Bc 3.16
śrīghraṃ samarthāpi tu gantum anyā gatiṃ nijagrāha yayau na tūrṇam / hriyāpragalbhā viniḡḡhamānā rahaḥprayuktāni vibhūṣaṇāni // 85	= Bc 3.17
parasparotpīḡḡanapiḡḡatānām saṃmardasaṃkṣobhitakuḡḡḡalānām / tāsāṃ tadā sasvanabhūṣaṇānām vātāyaneṣv aprāsamo babhūva // 86	= Bc 3.18
vātāyanebhyas tu viniḡṣṛtāni parasparāyāsitakuḡḡḡalāni / strīṇām virejur mukhapaṅkajāni saktāni harmyeṣv iva paṅkajāni // 87	= Bc 3.19
tato vimānair yuvatīkarālaiḥ kautūhalodghāṭitavātāyānaiḥ / śrīmat samantān nagaraṃ babhāse viyad vimānair iva sāpsarobhiḥ // 88	= Bc 3.20
vātāyanānām aviśālabhāvād anyo 'nyagaṇḡḡarpitakuḡḡḡalānām / mukhāni rejuḥ pramadottamānām baddhāḥ kalāpā iva paṅkajānām // 89	= Bc 3.21

tebhyo yuvānaṃ pathi vīkṣamāṇāḥ

striyo [111a] babhur gām iva gantukāmāḥ /

ūrdhvonmukhāś cainam udīkṣamāṇā

narā babhur dyām iva gantukāmāḥ // 90

= Bc 3.22

dr̥ṣṭvā ca taṃ rājasutaṃ striyas tā

jājvalyamānaṃ vapuṣā śriyā ca /

dhanyāsyā bhāryeti śanair avocañ

śuddhair manobhiḥ khalu nānyabhāvāt // 91

= Bc 3.23

ayaṃ kila vyāyatapīnabāhū

rūpeṇa sākṣād iva puṣpaketuḥ /

tyaktvā śriyaṃ dharmam upaiṣyatīti

tasmim̐ hi tā gauravam eva cakruḥ // 92

= Bc 3.24

kīrṇaṃ tathā rājapathaṃ **yuvā sa**

paurair vinītaiḥ śucidhīracittaiḥ /

tat pūrvam ālokya jaharṣa kiṃcin

mene punarbhāvam ivātmanaś ca // 93

= Bc 3.25

puram̐ tu tat svargam iva prahr̥ṣṭam̐

śudhādhipāsāḥ samavekṣya devāḥ /

jīrṇaṃ naraṃ nirmamire prayātum

saṃcodanārthaṃ kṣitipātmapajasya // 94

= Bc 3.26

tataḥ sa dhīro jarayābhibhūtam̐

dr̥ṣṭvā narebhyaḥ pṛthagākṛtiṃ tam /

uvāca saṃgrāhakam āgatāsthas

tatraiva niṣkampaniviṣṭadr̥ṣṭiḥ // 95

= Bc 3.27

ka eṣa bhoḥ sūta naro 'bhyupetaḥ

keśaiḥ sitair yaṣṭi**viśakti**hastāḥ /

bhrūsaṃvṛtākṣaḥ śithilānatāṅgaḥ

kiṃ vikriyaiṣā prakṛtir yadr̥cchā // 96

= Bc 3.28

ity evam uktaḥ sa rathapraṇetā

nivedayām āsa nṛpātmapajāya /

saṃrakṣyam apy artham adoṣadaśrī

tair eva devaiḥ kṛtabuddhimohaḥ // 97

= Bc 3.29

rūpasya hantrī vyasanaṃ balasya

śokasya yonir nidhanaṃ ratīnām /

nāśaḥ smr̥tīnām ripur indriyāṇām

eṣā jarā nāma yayaiṣa bhagnaḥ // 98	= Bc 3.30
pītaṃ hy anenāpi payaḥ śísutve kālena bhūyaḥ pariṣṭam urvyām / krameṇa bhūtvā ca yuvā vapuṣmān krameṇa tenaiva jarām upetaḥ // 99	= Bc 3.31
ity evam ukte calitaḥ sa kiṃcid rājātmajaḥ sūtam idaṃ babhāṣe / kim eṣa doṣo bhavitā mamāpīty asmai tataḥ sārathir abhyuvācaḥ // 100	= Bc 3.32
āyusmato 'py eṣa vayaḥprakarṣo niḥsaṃśayaṃ kālavaśena bhāvī / evaṃ jarām rūpavināśayitrīm jānāti caivecchati caiva lokaḥ // 101	= Bc 3.33
tataḥ sa pūrvāśayaśuddhabuddhir vistīrṇaka[111b]lpācitapuṇyakarmā / śrūtvā jarām saṃvivije mahātmā mahāśaner ghoṣam ivāntike gauḥ // 102	= Bc 3.34
niḥśvasya dīrghaṃ sa śiraḥ prakampya tasmiṃś ca jīrṇe viniveśya cakṣuḥ / tāṃ caiva dṛṣṭvā janatāṃ saharśām vākyam sa saṃvigna idaṃ jagāda // 103	= Bc 3.35
evaṃ jarā hanti ca nirviśeṣam smṛtiṃ ca rūpaṃ ca parākramaṃ ca / na caiva saṃvegam upaiti lokaḥ pratyakṣato 'pīdṛśām īkṣamāṇaḥ // 104	= Bc 3.36
evaṃ gate sūta nivartayāśvān śīghraṃ bhavān eva gṛhaṃ prayātu / udyānabhūmau hi kuto ratir me jarābhaye cetasi vartamāne // 105	= Bc 3.37
athājñayā bhartṛsutasya tasya nivartayām āsa rathaṃ niyantā / tataḥ sa dhīro bhavanaṃ tad eva cintāvaśaḥ śūnyam iva prapede // 106	= Bc 3.38
yadā tu tatrāpi na śarma lebhe jarā jareti praparīkṣamāṇaḥ /	

tato narendrānumataḥ sa bhūyaḥ krameṇa tanaiva bahir jagāma // 107	= Bc 3.39
tatrāparam vyādhiparītadehaṃ ta eva devāḥ sasṛjur manuṣyam / dṛṣṭvā ca taṃ sārathim ābabhāṣe śauddhodanis tadgatadṛṣṭir * eva // 108	= Bc 3.40
sthūlodaraḥ śvāsacalaccharāḥ srast*āṃsabāhuḥ kṛśapāṇḍugātraḥ / ambeti vācaṃ karuṇaṃ bruvāṇaḥ paraṃ samāsṛtya naraḥ ka eṣaḥ // 109	= Bc 3.41
tato 'bravīt sārathir asya saumya dhātuprakopaprabhavaḥ pravṛddhaḥ / rogābhidhānaḥ sumahān anarthaḥ śakro'pi yenaiṣa kṛto 'svatantraḥ // 110	= Bc 3.42
ity uktam ākarṇya sa mahīndrasūnuḥ samīkṣya taṃ rogiṇam ādritākṣaḥ / bhūyo 'pi taṃ sārathim ādareṇa paśyan papracchaivam adhīracetāḥ // 111	≈ Bc 3.43ab
asyaiva rogo vapuṣi prajātaḥ kim cāpi sarvasya bhavāśritasya / lokasya hy asmākam api śrutaṃ syād etan mamāgre vada sārathe tvam // 112	≈ Bc 3.43cd
taduktam ākarṇya sa rathapraṇetā nṛpātmajam evam uvāca paśyan / sudhīra sādharmaṇa eṣa doṣas tathā hi sarvatra bhavālaye 'pi // 113	≈ Bc 3.44
iti śrutārthaḥ sa viṣaṇṇacetāḥ prāvepatābūrmigataḥ śaśīva / idaṃ ca vākyam karuṇā[112a]yamānaḥ provāca kiṃcin mṛdunā svareṇa // 114	= Bc 3.45
evaṃ hi rogaḥ paripīḍyamānaḥ sarve 'pi harṣaṃ samupaiti lokaḥ / idaṃ ca rogavyasanaṃ prajānāṃ paśyan kim evaṃ pracareyaṃ rantum / sarve 'pi lokā abhimugdhacittā hasanti	

ye rogabhayair amuktāḥ // 115	≈ Bc 3.46
nivartyatām sūta bahiḥprayāṇān narendrasadmaiva rathaḥ prayātu /	
śrutvā ca me rogabhayaṃ ratibhyaḥ pratyāhataṃ saṃkucatiṃ cetaḥ // 116	= Bc 3.47
ity uktam ākarṇya rathapraṇetā tatheti vijñāpya viṣaṇṇacetāḥ /	
nivartayaṃs tena yathā rathaṃ sa praveśayām āsa gṛhāntike tam // 117	
tataś caran sa nṛparājasūnuḥ pradhyānayuktaḥ praviveśa veśma /	
taṃ dvīs tathā prekṣya ca saṃnivṛttaṃ pury āgamaṃ bhūmipatiś cakāra // 118	= Bc 3.48
śrutvā nimittaṃ tu nivartanasya saṃtyaktaṃ ātmānam anena mene /	
mārgasya śaucādhikṛtāya caiva cukrośa ruṣṭo'pi ca nogradaṇḍaḥ // 119	= Bc 3.49
bhūyo 'pi tasmai vidadhe sutāya viśeṣayukaṃ viṣaya prakāram /	
calendrayatvād api nāma sakto nāsmān vijahyād iti nāthamānaḥ // 120	= Bc 3.50
yadā ca śabdādibhir indriyārthair antaḥpure naiva suto 'sya reme /	
tato bahir vyādīśati sma yātrāṃ rasāntaraṃ syād iti manyamānaḥ // 121	= Bc 3.51
snehāc ca bhāvaṃ tanayasya buddhvā saṃvegadoṣān avicintya kāmṣcit /	
yogyāḥ samājñāpayati sma tatra kalāsv abhijñā api vāramukhyāḥ // 122	= Bc 3.52
tato viśeṣeṇa narendramārge svalaṃkṛte caiva parīkṣyate ca /	
vyatyasya sūtaṃ ca rathaṃ ca rājā prasthāpayām āsa bahir yuvānam // 123	= Bc 3.53
tatas tathā gacchati rājaputre tair eva devai vihito gatāsuh /	

taṃ caiva mārge mṛtam uhyamānaṃ sūtaḥ sa dhīraś ca dadarśa nānyaḥ // 124	= Bc 3.54
athābravīd rājasutaḥ sa sūtaṃ naraś caturbhir hriyate ka eṣaḥ / dīnair manuṣyair anugamyamāno yo bhūṣitaś cāpy avarudyate ca // 125	= Bc 3.55
tataḥ sa śuddhātmabhir eva devaiḥ śuddhādhivāsair abhibhūtacetāḥ / avācyam apy artham imaṃ niyantā pravyā[112b]jahārārthavad īśvarāya // 126	= Bc 3.56
buddhīndriyapraṇaguṇair viyuktaḥ supto viśaṃjñas tṛṇakāṣṭhabhūtaḥ / saṃvardhya saṃrakṣya ca yatnavadbhir janaiḥ priyas tyajyata eṣa ko 'pi // 127	= Bc 3.57
iti praṇetaḥ sa niśamya vākyam saṃcukṣubhe kiṃcid uvāca cainam / kiṃ kevalo 'syaiva janasya dharmāḥ sarvaprajānām ayam īdṛśo 'ntaḥ // 128	= Bc 3.58
tataḥ praṇetā vadati sma tasmai sarvaprajānām idam antakarman / hīnasya madhyasya mahātmano vā sarvatra loke niyato vināśaḥ // 129	= Bc 3.59
tataḥ sa dhīro 'pi narendrasūnuḥ śrutaiva mṛtyum viśasāda sadyaḥ / aṃsena saṃśliṣya ca kūbarāgraṃ provāca nīhrādavatā svareṇa // 130	= Bc 3.60
iyam hi niṣṭhā niyatā prajānām pramodyati tyaktabhayo ' pi lokaḥ / manāṃsi śaṅke kaṭhināni nṛṇām svasthās tathā hy adhvani vartamānāḥ // 131	= Bc 3.61
tasmād rathaṃ sūta nivartyatāṃ no vihārabhūmir na hi deśakālaḥ / jānaṃ vināśaṃ katham ārtikāle sacetanaḥ syād iha hi pramattaḥ // 132	= Bc 3.62
iti bruvāṇe'pi narādhipātmaje	

nivartayām āsa sa naiva taṃ ratham / viśeṣayuktaṃ tu narendraśāsanāt sa padmaṣaṇḍaṃ vanam eva niriyayau // 133	= Bc 3.63
tataḥ śivaṃ kusumitabālapādapam paribhramatpramuditamattakokilam / vimānavat sa kamalacārudīrghikaṃ dadarśa tad vanam iva nandanam vanam // 134	= Bc 3.64
varāṅganāgaṇakalilaṃ nṛpātmajas tato balād vanam atinīyate sma tat / varāpsarovṛtam alakādhipālayam navavrato munir iva viḥnakātarah // 135	= Bc 3.65
tatrāsau bodhisattvaḥ pracalitanayano vīkṣya vṛkṣān sapuṣpān te vai śītakāle vidalakusumitāḥ śuṣkatām cāpi yāyuh / evaṃ sarve 'py antakāle vigataratirasāḥ śuṣyatām eva yāyuh ity evaṃ mṛtyucintāvigataratimano dhyānalīno ca tasthe // 136	
tatas tasmin mahodyāne pramadā ratilālasāḥ / taṃ yuvānaṃ varaṃ prāptum ivābhimukham ācaran // 137	≈ Bc 4.1
[113a] abhigamya taṃ ālokya vismayotphullalocanāḥ / cakrire samudācāraṃ padmakośanibhaiḥ karaiḥ // 138	= Bc 4.2
tasthuś ca parivāryainaṃ manmathākṣiptamānasāḥ / niścalaiḥ pṛtisaṃphullaiḥ pibantya iva locanaiḥ // 139	= Bc 4.3
taṃ hi tā menire nāryaḥ kāmo vīgrahavān iti / śobhitaṃ lakṣaṇair dīptaiḥ saḥajair bhūṣaṇair iva // 140	= Bc 4.4
saumyatvāc cāpi dhairyāc ca kāścid enaṃ prajajñire / avatīrṇo mahīm sākṣād gūḍhāṃśuś candramā iva // 141	= Bc 4.5
tās tasya vapuṣākṣiptā nigrhītaṃ jajṛmbhire / anyo'nyam dṛṣṭibhir gatvā śanaś ca viniśaśvasuḥ // 142	= Bc 4.6
evaṃ tā dṛṣṭimātreṇa nāryo dadṛśur eva tam / na vyājahrur na jahasuḥ prabhāveṇāśya yantritāḥ // 143	= Bc 4.7
tās tathā hi nirārambhā dṛṣṭvā praṇayaviklavāḥ / purohitasuto dhīmān udāyī vākyam abravīt // 144	= Bc 4.8
sarvāḥ sarvakalājñāḥ stha bhāvagrahaṇapaṇḍitāḥ / rūpacāturyasaṃpannāḥ svaguṇair mukhyatām gatāḥ // 145	= Bc 4.9
śobhayeta guṇair ebhir api tān uttarān kurūn / kuberasyāpi ca krīḍaṃ prāg eva vasudhām imām // 146	= Bc 4.10

śaktāś cālayituṃ yūyaṃ vītarāgān ṛṣīn api /	
apsarobhīś ca kalitān gṛhītuṃ vibudhān api // 147	= Bc 4.11
bhāvajñānena hāvena cāturyārūpasampadā /	
strīṇām eva ca śaktāḥ stha samrāge kiṃ punar nṛṇām // 148	= Bc 4.12
tāsām evaṃvidhānām vo viyuktānām svagocare /	
iyam evaṃvidhā ceṣṭā na tuṣṭo 'smy ārjavena vaḥ // 149	= Bc 4.13
idaṃ navavadhūnām vo hrīnikuñcitacakṣuṣām /	
sadr̥ṣaṃ ceṣṭitaṃ hi syād api vā gopayoṣitām // 150	= Bc 4.14
yady api syād ayaṃ dhīraḥ srīprabhāvān mahān iti /	
strīṇām api mahat teja iti kāryo 'tra nīscayaḥ // 151	= Bc 4.15
purā hi kāśīsundaryā veśavadhvā mahān ṛṣiḥ /	
tādīto 'bhūt padābhyām so durdharṣo devatair api // 152	= Bc 4.16
manthālagautamo bhikṣur jaṅghayā vāramukhyayā /	
piprīṣuś ca tad arthārthaṃ vyasūn niraharat purā // 153	= Bc 4.17
gautamaṃ dīrghatapasam maharṣim dīrghajīvinam /	
yoṣit samtoṣayām āsavarṇasthānā[113b]varā satī // 154	= Bc 4.18
ṛṣyaśrīgaṃ muneh putraṃ tathaiva strīṣv apaṇḍitam /	
upāyair vividhaiḥ śāntā jagrāh ābhijahāra ca // 155	= Bc 4.19
viśvāmitro maharṣiś ca vigādho 'pi mahattapāḥ /	
daśa varṣāṇy araṇyastho ghr̥tācyāpsarasā hṛtaḥ // 156	= Bc 4.20
evamādīn ṛṣiṃś tāṃś tān anayan vikriyām strīyaḥ /	
lalitaṃ pūrvavayasam kiṃ punar nṛpateḥ sutam // 157	= Bc 4.21
tad evaṃ sati viśrabdham prayatadhvaṃ tathā yathā /	
iyam nṛpasya vaṃśāsrīr ito na syāt parāṇmukhī // 158	= Bc 4.22
yā hi kāścid yuvatayo haranti sadṛṣaṃ janam /	
nikṛṣṭotkrṣṭayor bhāvaṃ yā gṛhṇanti tu tāḥ strīyaḥ // 159	= Bc 4.23
ity udāyivacaḥ śrutvā tā viddhā iva yoṣitaḥ /	
samāruruhur ātmānaṃ kumāragrahaṇaṃ prati // 160	= Bc 4.24
tā bhrūbhiḥ prekṣitair *hāvair hasitair laḍitair gataiḥ /	
cakrur ākṣepikāś ceṣṭā bhītabhītā ivāṅganāḥ // 161	= Bc 4.25
rājñas tā viniyogena yūnas tasya hi mārḍavāt /	
jahruḥ kṣipram aviśrambham madena madenena ca // 162	= Bc 4.26
atha nārījanavṛtaḥ sa yuvā vyacarad vanam /	
vāsītāyūthasahitaḥ karīva himavadvanam // 163	= Bc 4.27
sa tasmin kānane rāmye jajvāla strīpuraḥsarah /	

ākriḍa iva vibhrāje vivasvān apsarovṛtaḥ // 164	= Bc 4.28
madenāvarjitā nāma taṃ kāścīt tatra yoṣitaḥ /	
kaṭhinaih paspr̥ṣuḥ pīnaih *samhatair valgubhiḥ stanaih // 165	= Bc 4.29
srastāṃsakomalālambamṛdubāhulatābalā /	
anṛtaṃ skhalitaṃ kācit kṛtvainaṃ sasvaje balāt // 166	= Bc 4.30
kācit tāmrādharoṣṭena mukhenāsavagandhinā /	
vinīśaśvāsa karṇe 'sya rahasyaṃ śruyatām iti // 167	= Bc 4.31
kācid ājñāpayantīva provācārdrānulepanā /	
iha bhaktiṃ kuruṣveti hastam samśliṣya lipsayā // 168	= Bc 4.32
muhur muhur madavyāja srastanīlāṃśukāparā /	
ālakṣyaraśanā reje sphuradvidyud iva kṣapā // 169	= Bc 4.33
kāścīt kanakakāñcībhir mukharābhir itas tataḥ /	
babhramur darśayantyo 'sya śroṇīs tanvaṃśukāvṛtāḥ // 170	= Bc 4.34
cūtaśakhāṃ kusumitaṃ pragṛhyānyā lalambire /	
suvarṇakalaśaprakhyān darśayantyaḥ payodharān // 171	= Bc 4.35
kā[114a]ścīt kanakakāñcībhir mukharābhir itas tataḥ /	
babhramur darśayantyo 'sya śroṇīs tanvaṃśukāvṛtāḥ // 172	= Bc 4.34(!)
madhuraṃ gītam anvarthaṃ kācit sābhinaṃ jagau /	
taṃ svasthaṃ codayantīva vañcito 'sīty avekṣitaiḥ // 173	= Bc 4.37
śubhena vadanenānyā bhrūkārmukavikarṣiṇā /	
prāvṛtyānucakārāsya ceṣṭitaṃ dhīralīlayā // 174	= Bc 4.38
pīnavalgustanī kācid vātāghūrṇitakuṇḍalā /	
uccair avajahāsainaṃ samāpnotu bhavān iti // 175	= Bc 4.39
apayāntaṃ tathaiṅvānyā babandhuḥ puṣpadāmabhiḥ /	
kāścīt sākṣepamadhurair jagṛhur vacanāñkuśaiḥ // 176	= Bc 4.40
pratiyogārthinī kācid gṛhītvā cūtavallarīm /	
idaṃ puṣpaṃ tu kasyeti papraccha madaviklavā // 177	= Bc 4.41
kācit puruṣavat kṛtvā gatiṃ samsthānam eva ca /	
uvācainaṃ jitaḥ strībhir jaya bhoḥ pṛthivīm imām // 178	= Bc 4.42
atha lolekṣaṇā kācij jighrantī nīlam utpalam /	
kiṃcin madakalair vākyair nṛpātmajam abhāṣata // 179	= Bc 4.43
paśya bhartaś citaṃ cūtaṃ kusumair madhugandhibhiḥ /	
hemapañjararuddho vā kokilo yatra kūjati // 180	= Bc 4.44
aśoko dṛṣyatām eṣa kāmiśokavivarddhanah /	
ruvanti bhramarā yatra dahyamānā ivāgninā // 181	= Bc 4.45

cūtaṣṭyā samāśliṣṭo dṛśyatām tilakadrumaḥ /	
śuklavāsā yathā kāntaḥ striyā pītāṅgarāgayā // 182	= Bc 4.46
phullaṃ kurubakaṃ paśya nirbhuktālaktaka prabham /	
yo nakhaprabhayā strīṇām nirbhartsita ivānataḥ // 183	= Bc 4.47
bālāśokaś ca nicito dṛśyatām eṣa pallavaiḥ /	
yo 'smākaṃ hastaśobhābhir lajjamāna iva sthitaḥ // 184	= Bc 4.48
dīrghikāṃ prāvratām paśya tīrajaiḥ sinduvārajaiḥ /	
pāṇḍurāṃśukasamvītām śayānām pramadām iva // 185	= Bc 4.49
dṛśyatām strīṣu māhātmyaṃ cakravāko hy asau jale /	
prṣṭhataḥ preṣyavad bhāryām anuvṛtyā nugacchati // 186	= Bc 4.50
mattasya parapuṣṭasya ruvataḥ śrūyatām dhvaniḥ /	
aparaḥ kokilo ' nutkaḥ pratiśrutkteva kūjitaḥ // 187	= Bc 4.51
api nāma vihaṅgānām vasantenāhrto madaḥ /	
na tu cintayataś cittaṃ janasya prajñamāninaḥ // 188	= Bc 4.52
ity evaṃ pramadā nāryas taṃ kāmoddāma ceta[114b]saḥ /	
yuvānaṃ vividhais tais tair upacakramire nayaiḥ // 189	= Bc 4.53
evam ākṣipyamāṇo 'pi sa sudhairyā vṛtendriyaḥ /	
martavyam iti sodvego na jaharṣa na sismiye // 190	= Bc 4.54
tāsām tattve 'navasthānaṃ dṛṣṭvā sa pūruṣottamaḥ /	
sa samvignena dhīreṇa cintayām āsa cetasā // 191	= Bc 4.55
kiṃ vinā nāvagacchanti capalaṃ yauvanaṃ striyaḥ /	
yato rūpeṇa sampannaṃ jareyaṃ nāśayiṣyati // 192	= Bc 4.56
nūnam etā na paśyanti kasyacid rogasamplavam /	
tathā hrṣṭā bhayaṃ tyaktvā jagati vyādhidharmini // 193	= Bc 4.57
anabhijñās ca suvyaktaṃ mṛtyoḥ sarvāpahāriṇaḥ /	
tathā svasthā nirudvignāḥ krīḍanti prahasanti ca // 194	= Bc 4.58
jarāṃ vyādhiṃ ca mṛtyuṃ ca ko hi jānan sacetanaḥ /	
svasthas tiṣṭhen niṣīded vā suped vā kim punar haset // 195	= Bc 4.59
yas tu dṛṣṭvā paraṃ jīrṇaṃ vyādhitaṃ mṛtakaṃ ca vai /	
svastho bhavati nodvigno yathācetās tathaiva saḥ // 196	= Bc 4.60
vīyujyamāne ' pi tarau puṣpair api phalair api /	
patati chidyamāne vā tarur anyo na śocate // 197	= Bc 4.61
iti dhyānaparaṃ dṛṣṭvā viṣayeṣv api niḥspṛham /	
udāyī nītiśāstrajñas tam uvāca suhrṭtayā // 198	= Bc 4.62
aḥaṃ nṛpatinā dattaḥ sakhā tubhyaṃ kṣamaḥ kṣamaḥ kila /	

yasmāt tvayi vivakṣā me tayā praṇayavattayā // 199	= Bc 4.63
ahitāt pratiṣedho 'pi hite tv anupravartanam /	
vyasane cāparityāgas trividham mitralakṣaṇam // 200	= Bc 4.64
so 'haṃ maitrīm pratijñāya puruṣārthāt parāṇmukhaḥ /	
yadi tvāṃ samupekṣeya na bhaven mitratā mayi // 201	= Bc 4.65
tad bravīmi suhr̥d bhūtvā taruṇasya vapuṣmataḥ /	
idaṃ na pratirūpaṃ te strīṣv adākṣiṇyam īdṛśām // 202	= Bc 4.66
anṛtenāpi nārīṇaṃ yuktaṃ samanuvartanam	
tad vrīḍāparihārārtham ātmaratyartham eva ca // 203	= Bc 4.67
saṃnatis cānuvṛttiś ca strīṇāṃ hṛdayabandhanam /	
snehasya hi guṇā yonir mānakāmā hi yoṣitaḥ // 204	= Bc 4.68
tad arhasi viśālākṣa hṛdaye 'pi parāṇmukhe /	
rūpasyāyānurūpeṇa dākṣiṇyenānuvartitum // 205	= Bc 4.69
dākṣiṇyam auśadhaṃ strīṇāṃ dākṣiṇyāṃ bhūṣaṇaṃ param /	
dākṣiṇyarahitam rūpaṃ niṣpuṣpaṃ i[115a]va kānanam // 206	= Bc 4.70
kiṃ vā dākṣiṇyamātreṇa bhāvanāstu parigrahaḥ /	
viṣayān durlabhāṃl labdhvā na hy avajñātum arhasi // 207	= Bc 4.71
kāmaṃ paramitaṃ jñātvā devo 'pi hi purandaraḥ /	
gautamasya muneḥ patnīm ahalyāṃ cakame purā // 208	= Bc 4.72
agastyah prārthayām āsa somabhāryāṃ ca rohiṇīm /	
tasmāt tatsadṛśīm lebhe lopāmudrām iti śrutih // 209	= Bc 4.73
autasthyasya ca bhāryāyāṃ mamatāyāṃ mahātapāḥ /	
mārutyāṃ janayām āsa bharadvājaṃ bṛhaspatiḥ // 210	= Bc 4.74
bṛhaspater mahiṣyāṃ ca juhvatyāṃ juhvatāṃ varaḥ /	
buddhaṃ vibudhad harmāṇaṃ janayām āsa candramāḥ // 211	= Bc 4.75
kālīm cāpi purā kanyāṃ jalaprabhavasambhavām /	
jagāma yamunātīre jātarāgaḥ parāśaraḥ // 212	= Bc 4.76
mātaṅgyāṃ akṣamālāyāṃ garhitāyāṃ riraṃsayā /	
kapiñjalādaṃ tanayaṃ vasiṣṭho 'janayan muniḥ // 213	= Bc 4.77
yayātīś caiva rājarṣir vayasy api vinirgate /	
viśvācyāpsarasā sārddhaṃ reme caitrarathe vane // 214	= Bc 4.78
strīsaṃsargaṃ vināśāntaṃ pāṇḍur jñātvāpi kauravaḥ /	
mādrīrūpagaṇākṣiptaḥ siṣeve kāmajaṃ sukham // 215	= Bc 4.79
karālanakaś caivaṃ hṛtvā brāhmaṇakanyakām /	
avāpa bhraṃśam apy evaṃ na tu bheje na manmatham // 216	= Bc 4.80

evamādimahātmāno viṣayān garhitān api /	
ratihetor bubhujire prāg eva guṇasaṃhitān // 217	= Bc 4.81
tvaṃ punar nyāyataḥ prāptān balavān rūpavān yuvā	
viṣayān avajānāsi yatra saktam idaṃ jagat // 218	= Bc 4.82
iti śrutvā vacas tasya ślakṣṇam āgamasamhitam /	
meghastanitanirghoṣaḥ sa dhīraḥ pratyabhāṣata // 219	= Bc 4.83
upapannam idaṃ vākyam sauhārdavyaṅjakam tvayi /	
atra tvām anuneṣyāmi yatra mā duṣṭtu manyase // 220	= Bc 4.84
nāvajānāmi viṣayān jāne lokam tadātmakam /	
anityam hi jagan matvā nātra me ramate manaḥ // 221	= Bc 4.85
jarā vyādhiś ca mṛtyuś ca yadi na syād idaṃ trayam /	
mamāpi hi manojñeṣu viṣayeṣu ratir bhavet // 222	= Bc 4.86
nityam yady api hi strīṇām etad eva vapur bhavet /	
sasamvitkasya kāmeṣu tathāpi na ratiḥ kṣamā // 223	≈ Bc 4.87
yadā tu jarayāpītam rūpam āsām bha [115b] ved api /	
ātmano 'py anabhipretaṃ mohāt tatra ratiś caret // 224	= Bc 4.88
mṛtyuvyādhijarādharmaṃ mṛtyuvyādhijarātmabhiḥ /	
ramamāṇo ' py asaṃvignaḥ samāno mṛgapakṣibhiḥ // 225	= Bc 4.89
yad apy āttha mahatmānas te 'pi kāmātmakā iti /	
samvego 'tra na kartavyo yadā teṣām na hi kṣayaḥ // 226	= Bc 4.90
māhātmyam na ca tanmadhye yatra sāmānyataḥ kṣayaḥ /	
viṣayeṣu prasaktir vā yuktir vā nātmavattayā // 227	= Bc 4.91
yad apy āthhānṛtenāpi strījane vartyatām iti /	
anṛtam nāvagacchāmi dākṣiṇyenāpi kiṃ cana // 228	= Bc 4.92
na cānuvartanam tan me rucitam yatra nārjavam /	
sarvabhāvena samparko yadi nāsti dhig astu tat // 229	= Bc 4.93
anṛte śraddadhānasya śaktasyādoṣadarśinaḥ /	
kiṃ ca vañcayitavyam syāj jātarāgasya cetasaḥ // 230	= Bc 4.94
vañcayanti ca yady eva jātarāgāḥ parasparam /	
nanu naiva kṣamam draṣṭum narāḥ strīṇām nṛṇām striyaḥ // 231	= Bc 4.95
tad evam sati duḥkhārtaṃ jarāmaraṇa abhāvinam /	
na mām kāmeṣv anāryeṣu pratārayitum arhasi // 232	= Bc 4.96
aho 'tidhīraṃ balavac ca te manaś	
caleṣu kāmeṣv api sāradarśinaḥ /	
bhaye 'pi tivre viṣayeṣu sajjase	

nirīkṣamāṇo maraṇādhvani prajāḥ // 233	= Bc 4.97
ahaṃ punar bhīrur atīva viklavo jarāvīpadvyādhibhayaṃ vicintayan / lebhe na śāntiṃ na dhṛtiṃ kuto ratiṃ niśāmayan dīptam ivāgninā jagat // 234	= Bc 4.98
asamśayaṃ mṛtyur iti prajānato narasya rāgo hṛdi yasya jāyate / ayomayīṃ tasya paraimi cetanām mahābhaye rajyati yo na rodati // 235	= Bc 4.99
atho sa dhīraś ca viniścayātmikām cakāra kāmāśrayaghātiniṃ kathām / janasya cakṣurgamanīyamaṇḍalo mahīdharaṃ cāstam iyāya bhāskaraḥ // 236	= Bc 4.100
tato vṛthādhāritabhūṣaṇasrajaḥ kalāguṇaiś ca praṇayaiś ca niṣphalaiḥ / sa eva bhāve vinigṛhya manmathaṃ puraṃ yayur bhagnamanorathāḥ striyaḥ // 237	= Bc 4.101
tataḥ purodyānagatām janaśriyaṃ nirīkṣya cānye pratisamhṛtām punaḥ / anīyatām sarvagatām vicintayan viveśa dhiṣṇyaṃ kṣitipāla[116a]kātmajaḥ // 238	= Bc 4.102
tataḥ śrutvā rājā vimukhaṃ tasya hi mano na śīśye tām rātriṃ hṛdayagataśalyo gaja iva / atha śrānto mantre bahuvidhamārge sasacivo na so 'nyat kāmebhyo niyamanam apaśyat sutamateḥ // 239	= Bc 4.103
evaṃ sarvārthasiddhaḥ sa viṣayavirato jīrṇarogāntacintaḥ sambodhijñānakāmo vicalitaḥḥḍayo bodhicaryānurāgī / sarvān buddhān munīndrān sakalaguṇanidhīn eva samdraṣṭukāmāḥ smṛtvā dhyātvā samādhipraṇihitasumanāḥ svālayāntaḥsthito 'bhūt // 240	
// iti jīrṇarogigatāsudarśanaratirāgaviḡhātano nāma saptādaśo 'dhyāyaḥ //	

Apparatus criticus of the chapter 17⁽¹⁶⁾

- 1a mahābhijñā] D: mahābhijñāḥ A: mahābhijñō B.
- 1b upagupto] A(post corr. int. lin.) B D: śākyasiṃho A(ante corr.).
- 1c tam aśokaṃ nṛpaṃ] A(post corr.): tam ānandaṃ yaṭiṃ A(ante corr.): tatāśokaṃ nṛpaṃ B: tatośokaṃ nṛpaṃ D.
- 5a bhoḥ kāñcu°] corr.: bho kāñcu° A B D.
- 23c °ratnasupra°] A(post corr. int. lin.) B D: °ratnapra° A(ante corr.).
- 48c *divyāmṛtaṃ] ex conī (cf. 50c): divyāmṛte A: divyāmṛta B: divyāmṛta D.
- 49a cāpi] A(post corr. marg.) B: ca A(ante corr.).
- 55d °vrataṃ cara //] A(post corr. marg.) B D: °vratam // A(ante corr.).
- 62a °*patākābhiḥ] ex conī: °patākādi A B.
- 65a praṇāditvā] corr.: pranāditvā A: pravāditvā B.
- 69a sa dhīro] A B. (Cf. Bc 3.1: kadācin)
- 69b puṃsko°] D (= Bc): pusko° A: pusko° B.
- 71b putrasya diṣṭyātīmanoharasya] A D: putrasya didhyātīmanoharasya B. (Cf. Bc 3.3 putrābhīdhānasya manorathasya)
- 72d °cetā *iva] ex conī: °cetā[pya]va A: °cetāpya ca B. (Cf. Bc 3.4 cetā iti)
- 73b bhikṣūn] A: bhikṣunu B. (Cf. Bc 3.5 dikṣu)
- 74b sa dhīraḥ] sic A B. (Cf. Bc 3.6 kumāraḥ)
- 75ab dṛṣṭvā pitā taṃ sutam āgataṃ tanmano 'pi matvopavanābhilāṣiṃ] A: dṛṣṭvā pitā ta sutam āgataṃ tan mano 'pi matvā pavanābhilāṣiṃ B. (Cf. Bc 3.7 atho narendraḥ sutam āgatāśruḥ śīrasy upāghrāya ciraṃ nirīkṣya)
- 75 note] a stanza (“mārgasya śocādhikṛtām janamś ca uvāca rājā apakaravanīyāḥ / jarābhībhūtā vikalendriyās ca rogābhībhūtā iti apakarāṇīyāḥ //”) is written in the margin of A (seconda manu!). In B D the same stanza is written after of the 75th stanza in the body text.
- 76a °bhāṇḍabhṛdbhir] A(post corr. marg.) B: °bhābhṛdbhir A(ante corr.).
- 77b viṣakta°] corr.: visakta° A: visakta° D: visaka° B. (Cf. Bc 3.9 viṣakta°)
- 78b kīryamāṇaḥ] sic A B. (Cf. Bc 3.10 kīryamāṇam).
- 79d vipulyam] sic A B. (Cf. Bc 3.11 vaipulyam)
- 81a sa rājasūnuḥ] A: su rājasunuḥ B. (Cf. Bc 3.13 tataḥ kumāraḥ)

16. 第17～19章のテキスト校訂においては主に A 写本と B 写本の異読を示したが、B 写本は A 写本から派生した粗悪な伝承本であるので、A 写本を底本とする。また B 写本以外に、必要に応じて D 写本（系統的に B と同じであり粗悪な伝本）も参照した。

- 87b °sitakuṇḍalāni] A(post corr. marg.) B: °sikuṇḍalāni A(ante corr.). (Cf. Bc 3.19 °sitakuṇḍalāni)
- 88b °ghāṭitavātā°] A(post corr. marg.) B: °ghāṭivātā° A(ante corr.). (Cf. Bc 3.20 °ghāṭitavātā°)
- 90a tebhyo yuvānaṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.22 taṃ tāḥ kumāraṃ)
- 92c upaiśyatīti] corr.: upeśyatīti A: upepyatīti B. (Cf. Bc 3.24 upaiśyatīti)
- 93a yuvā sa] sic A B. (Cf. Bc 3.25 kumāraḥ)
- 93b °cittaiḥ] sic A B. (Cf. Bc 3.25 °veśaiḥ)
- 94c prayātum] corr.: prayātaṃ A B. (Cf. Bc 3.26 prayātum)
- 95a tataḥ sa dhīro] sic A B. (Cf. Bc 3.27 tataḥ kumāro)
- 96b °viśakti°] sic A B. (Cf. Bc 3.28 °viśakta°).
- 96 note] Between 96ab and 96cd A(seconda manu!) the following stanza is added in the margin — śiraḥpravayo dhamanīvivṛddhaḥ pratraṣṭadantaś ca kṛṣāṃgayaṣṭiḥ / padaskhalan b(?)ālavivṛddhavakraḥ kṛṣṇa(?)kuśaḥ snāyutvacābhinaddhaḥ //. B have the same stanza in body text.
- 101a eṣavayaḥ] A(post corr. marg.) B: evavayaḥ A(ante corr.).
- 101b kālavaśena bhāvī] A(post corr. marg.): kālavaśe bhāvī A(ante corr.): kālavaśena sāvī B.
- 103a niḥśvasya] corr.: niśvasya A B || sa śiraḥ] sic A B. (Cf. Bc 3.35 svaśiraḥ)
- 103d sa saṃvigna idaṃ] corr.: sa saṃvignam idaṃ A B. (Cf. Bc 3.35 sa saṃvigna idaṃ).
- 105b bhavān eva gṛhaṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.37 gṛhāny eva bhavān).
- 106c sa dhīro] sic A B. (Cf. Bc 3.38 kumāro)
- 107a tatrāpi] sic A B. (Cf. Bc 3.39 tatraiva)
- 108a tatrāparaṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.40 athāparaṃ)
- 108c dṛṣṭvā sa] sic A B. (Cf. Bc 3.40 dṛṣṭvā ca).
- 108d *eva] ex conī (cf. Bc): evaṃ A B. (Cf. Bc 3.40 eva).
- 109b srast*āṃsabāhuḥ] ex conī (cf. Bc.): śrastāṃsubāhuḥ A B. (Cf. Bc 3.41 srastāṃsabāhuḥ).
- 109d samāśṛtya] sic A B. (Cf. Bc 3.41 samāśṛitya).
- 110d śakro'pi yenaīṣa kṛto 'svatantraḥ] A(post corr. marg.) B: om. A(ante corr.).
- 112d mamāgre vada] A(post corr. marg.): mamā vada A(ante corr.): maṃmāmāśe B.
- 114c idaṃ ca vākyam] A(post corr. marg.) B: idaṃ vākyam A(ante corr.). (Cf. Bc 3.45 idaṃ ca vākyam) || °mānaḥ] corr.: °mānaḥ A B. (Cf. Bc 3.45°mānaḥ)
- 115a evaṃ hi rogaiḥ] A(post corr. marg.) B: evaṃ rogaiḥ A(ante corr.) || °mānaḥ] corr.: °mānaḥ A B.
- 115b rogavyasanaṃ] A: rogaṃ vyasanaṃ B.
- 117a ākarṇya] A: ākarṇā B.
- 117b viṣaṇṇacetāḥ] A: viṣaṇacetāḥ B. (Cf. Bc 3.45 viṣaṇṇacetāḥ).
- 117c nivartayaṃs] ≅ nivarttayaṃs A: nivarttayaṃ B.

- 118a tataś caran] corr.: tataś caraṃ A B. (Cf. Bc 3.47 tato nivṛttaḥ) || nṛparājasunuḥ] A: nṛparājasunuḥ B. (Cf. Bc 3.47 sa nivṛttaharṣaḥ)
- 118d pury āgamaṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.48 paryeṣaṇaṃ)
- 119b saṃtyaktam ātmānam anena mene] A(post corr. marg.) (= Bc 3.49b): om. A(ante corr.): saṃtyaktam ātmānam anena senara B.
- 120a bhūyo 'pi] sic A B. (Cf. Bc 3.50 bhūyaś ca).
- 120b °prakāraṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.50 °pracāram)
- 122b saṃvega°] corr.: saṃvega° A B. (Cf. Bc 3.52 sa rāga°).
- 123b parīkṣyate] sic A B. (Cf. Bc 3.53 parīkṣite)
- 123d yuvānaṃ] A: yurvānaṃ B. (Cf. Bc 3.53 kumāram).
- 124d sa dhīraś] A: sudhīraś B. (Cf. Bc 3.54 kumāraś).
- 125d yo bhūṣitaś] B: yo bhūṣitaḥ A. (Cf. Bc 3.55 ..bhūṣitaś)
- 127b ṛṇakāṣṭhabhūtaḥ] A(post corr. marg.) B: ṛṇakābhūtaḥ A(ante corr.). (Cf. Bc 3.57 ṛṇakāṣṭhabhūtaḥ)
- 127c °vadbhir] A: °vahiḥ B. (Cf. Bc 3.57 °vadbhiḥ)
- 127d janaiḥ priyas] sic A B. (Cf. Bc 3.57 priyapriyais)
- 129d sarvatra] sic A B. (Cf. Bc 3.59 sarvasya).
- 131a hi] A: om. B. (Cf. Bc 3.61 ca)
- 131b pramodyati] A: om. B. (Cf. Bc 3.61 pramādyati) || °bhayo 'pi] A: om. B. (Cf. Bc 3.61 °bhayaś ca)
- 132a rathaṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.62 rathaḥ)
- 132b vihārabhūmir] A: vijñānabhūmi B. (Cf. Bc 3.62 vihārabhūmer)
- 133c °śāsanāt] corr.: °śāsanān A B. (Cf. Bc 3.63 °śāsanāt).
- 135b atinīyate] A(post corr. marg.): atinīya A(ante corr.): abhinīyate B. (Cf. Bc 3.64 atinīyate)
- 136a sapuṣmān] B: sapuṣmāne A.
- 136b te vai] A(post corr. marg.) B: te pi A(ante corr.).
- 136c vigataratirasāḥ] A: vigatanatirasā B.
- 137a mahodyāne] A: mahādyāne B.
- 138a tam ālokya] sic A B. (Cf. Bc 4.2 ca tās tasmai)
- 138c samudācāraṃ] A(post corr. marg.) B: samucāraṃ A(ante corr.). (Cf. Bc 4.2 samudācāraṃ)
- 139b °mānasāḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.3 °cetasāḥ)
- 139c pṛtisaṃphullaiḥ] A: pṛtisaṃsthulaiḥ B. (Cf. Bc 4.3 pṛtīvikacaiḥ)
- 141a cāpi] sic A B. (Cf. Bc 4.5 caiva).
- 142a tās tasya] sic A B. (Cf. Bc 4.6 tasya tā).
- 142c gatvā] sic A B. (Cf. Bc 4.6 hatvā).

- 144a hi] sic A B. (Cf. Bc 4.8 tu).
- 147c apsarobhiś ca] A(post corr. int. lin.) B: apsarobhi A(ante corr.). (Cf. Bc 4.11 apsarobhiś ca) || kalitān] corr.: kalitām A B. (Cf. Bc 4.11 kalitān)
- 147d vibudhān api] A(post corr.) B: vibudhānāpi A(ante corr.). (Cf. Bc 4.11 vibudhān api)
- 148b cāturyārūpa°] ≙ cāturyyārūpa° A: yāturmādrupa° B. (Cf. Bc 4.12 rūpacāturya°)
- 148c eva ca] A(post corr. marg.): eva A(ante corr.): iva ca B. (Cf. Bc 4.12 eva ca)
- 148c śaktāḥ] corr.: śaktā A B. (Cf. Bc 4.12 śaktāḥ)
- 151a yady api] sic A B. (Cf. Bc 4.15 yad api)
- 151d iti kāryo] sic A B. (Cf. Bc 4.15 itaḥ kāryo)
- 152c padābhyām so] A: padābhyām yo B. (Cf. Bc 4.16 padā vyāso)
- 155a muneḥ putram] A. (Cf. Bc 4.19 munisutam)
- 155d jagrābhijahāra] A: jagrābhijahāra B. (Cf. Bc 4.19 jagrāha ca jahāra)
- 156b mahattapāḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.20 mahat tapāḥ)
- 156c araṇyastho] A: eraṇyethā B. (Cf. Bc 4.20 ahar mene)
- 159cd bhāvaṃ yā gr°] A(post corr. marg.): bhāvaṃ gr° A(ante corr.): bhāvaṃ yām gr° B. (Cf. Bc 4.23 bhāvaṃ yā gr°)
- 159d tu tāḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.23 tā[h] tu)
- 161b *hāvair] ex conī (cf. Bc): bhāvair A B. (Cf. Bc 4.25 hāvair)
- 162a rājñās tā] A: rājñās tā B. (Cf. Bc 4.26 rājñās tu)
- 162b yūnas tasya hi] A: mūnas tasyābhi B. (Cf. Bc 4.26 kumārasya ca)
- 162c jahruḥ] A: jahuḥ B. (Cf. Bc 4.26 jahuḥ)
- 163b sa yuvā] sic A B. (Cf. Bc 4.27 kumāro)
- 164b strīpuraḥsaraḥ] corr.: strīpurassaraḥ A B.
- 164d vivasvān] corr.: vivaśvān A B. (Cf. Bc 4.28 vivasvān)
- 165d *saṃghatair] ex conī: saṃghatair A B. (Cf. Bc 4.29 saṃghatair)
- 166a srastāṃsa°] corr.: śrastāṃśu° A: śrastīśu B. (Cf. Bc 4.30 srastāṃsa°)
- 166ab °ālambamṛdubāhu°] A(post corr. marg.) B: °ālambabāhu° A(ante corr.).
- 166c skhalitaṃ] corr.: khalitaṃ A B. (Cf. Bc 4.30 skhalitaṃ)
- 168d hastam saṃśliṣya] corr.: hastasaṃśliṣya A B. (Cf. Bc 4.32 hastasaṃśleṣa)
- 169b srasta°] B: śrasta° A. (Cf. Bc 4.33 srasta°)
- 169c ālakṣyaraśanā] corr.: ālakṣyaraśanā A: ārakṣyeraśanā B. (Cf. Bc 4.33 ālakṣyaraśanā)
- 172 note] By mistake of the scribe of A, this 172th verse overlaps with the 170th verse (= Bc 4.34). The verse of Bc 4.36 should have been written here.
- 174a vadanenānyā] A(post corr. marg.): vadanānyā A(ante corr.): vanedanānyā B.
- 176b puṣpa°] sic A B. (Cf. Bc 4.40 mālya°)

- 178a puruṣavat] A(post corr. marg.) B: puruṣat A(ante corr.). (Cf. Bc 4.42 puruṣavat)
- 178d bhoḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.42 bho)
- 182c yathā kāntaḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.46 iva naraḥ)
- 183d nirbhartsita] corr.: nirbhatsita A B. (Cf. Bc 4.47 nirbhartsita)
- 185b °vārajaiḥ] sic A B. (cf. Bc 4.49 °vārakaiḥ)
- 186d anuvṛtyānu°] sic A B. (Cf. Bc 4.50 anuvarty anu°)
- 187c 'nutkaḥ] ≙ nutkaḥ A: rutkaḥ B. (Cf. Bc 4.51 'nvakṣam)
- 187d kūjitaḥ] A: kūjiteḥ B. (Cf. Bc 4.51 kūjati)
- 188c cintayataś cittam] sic A B. (Cf. Bc 4.52 cintayato 'cintyam)
- 189a pramadā nāryas] sic A B. (Cf. Bc 4.53 yuvatayo)
- 189b taṃ kāmoddāma°] A: tas taṃ kāmoddāma° B. (Cf. Bc 4.53 manmathoddāma°)
- 189c yuvānaṃ] sic A B. (Cf. Bc 4.53 kumāraṃ)
- 190b sudhairyā°] sic A B. Cf. Bc 4.54 tu dhairyā°)
- 190d sismiye] sic A B. (Cf. Bc 4.54 vivyathe)
- 191a tattve] A(post corr. marg.): bhava A(ante corr.) B. (Cf. Bc 4.55 tattve)
- 191c sa saṃvignena] sic A B. (Cf. Bc 4.55 samaṃ vignena)
- 192a kiṃ vinā] ≙ kim binā A B. (Cf. Bc 4.56 kim v imā)
- 192b saṃpannaṃ] sic A B. (Cf. Bc 4.56 saṃmattaṃ)
- 192d jareyaṃ] A: jarayaṃ B. (Cf. Bc 4.56d jarā yan)
- 194c tathā] sic A B. (Cf. Bc 4.58 tataḥ)
- 194d prahasanti] sic A B. (Cf. Bc 4.58 ca hasanti)
- 195d suped] A: suyed B. (Cf. Bc 4.59 śayed)
- 196b mṛtakaṃ ca vai] sic A B. (Cf. Bc 4.60 mṛtam eva ca)
- 197a 'pi] ≙ pi A B. (Cf. Bc 4.61 hi)
- 198b viṣayeṣv api niḥspr̥ham] A: viṣayeṣv api nispaḥam B. (Cf. Bc 4.62 viṣayebhyo gataspr̥ham)
- 199cd vivakṣā me tayā] A(post corr. int. lin.): vivakṣā tayā A(ante corr.): vivakṣaḥ me tatayā B. (Cf. Bc 4.63 vivakṣā me tayā)
- 200a °ṣedho 'pi] ≙ °ṣedho pi A B. (Cf. Bc 4.64 °ṣedhaś ca)
- 200b tv anupra°] A: tv anutra° B. (Cf. Bc 4.64 cānupra°)
- 204c yonir] corr.: yoni A B.
- 204d °kāmā hi] sic A B. (Cf. Bc 4.68 kāmās ca)
- 208a paramitaṃ] sic A B. (Cf. Bc 4.72 param iti)
- 210a *autathyasya] ex conī: autastyasya A: autastasya B. (Cf. Bc 74.74 utathyasya)
- 210b mamatāyāṃ] corr. (cf. Bc.): samatāyāṃ A B. (Cf. Bc 4.74 mamatāyāṃ)
- 211c °dharmāṃ] A: °dharmāṃ B. (Cf. Bc 4.75 °karmāṃ)

- 212a cāpi] sic A B. (Cf. Bc 4.76 caiva)
- 216d bheje] sic A B. (Cf. Bc 4.81 seje)
- 217a evamādi°] sic A B. (Cf. Bc 4.81: evamādyā)
- 218a nyāyataḥ] corr.: nyāyatas A B. (Cf. Bc 4.82 nyāyataḥ)
- 219d sa dhīraḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.83 kumāraḥ)
- 220c tvām anuneṣyāmi] sic A B. (Cf. Bc 4.84 ca tvānuneṣyāmi)
- 221c hi] sic A B. (Cf. Bc 4.85 tu)
- 222ab mṛtyuś ca yadi] A(post corr. marg.) B: mṛtyu yadi A(ante corr.). (Cf. Bc 4.86 mṛtyuś ca yadi)
- 223b etad eva] A(post corr. marg.) B: eva A(ante corr.). (Cf. Bc 4.87 etad eva)
- 223c sasaṃvitkasya] = sasambitkasya A B. (Cf. Bc 4.87 doṣavatsv api)
- 223d tathāpi na ratiḥ kṣamā] A: tathāpi na ratiḥ kṣamāḥ B. (Cf. Bc 4.87 kāmam rajyeta me manaḥ)
- 224b bhaved api] sic A B. (Cf. Bc 4.88 bhaviṣyati)
- 224d ratiś caret] sic A B. (Cf. Bc 4.88 ratiḥ bhavet)
- 225c 'py] sic A B. (Cf. Bc 4.89 hi)
- 226d na hi] sic A B. (Cf. Bc 4.90 api)
- 227a tanmadhye] sic A B. (Cf. Bc 4.91 tan manye)
- 227c prasaktir] corr.: praśaktir A B. (Cf. Bc 4.91 prasaktir)
- 228b vartyatām iti] A(post corr. marg.) B: vartyatāmi A(ante corr.). (Cf. Bc 4.92 vartyatām iti)
- 230a anṛte] sic A B. (Cf. Bc 4.94 adhr̥teḥ)
- 230c ca] A: na B. (Cf. Bc 4.94 hi)
- 231a eva] sic A B. (Cf. Bc 4.95 evam)
- 232b bhāvinam] sic A B. (Cf. Bc 4.97 bhāginam)
- 233b kāmeṣv api] sic A B. (Cf. Bc 4.97 kāmeṣu ca)
- 235d rodati] sic A B. (Cf. Bc 4.100 roditi)
- 236a sa dhīraś] sic A B. (Cf. Bc 4.100 kumāraś)
- 236b °āśrayaghātīnīm] A(post corr.): °āśrayavighātīnīm A(ante corr.): °kṣayaghātīnīm B. (Cf. Bc 4.100 °āśrayaghātīnīm)
- 237b niṣphalaiḥ] corr.: niṣphalaiḥ A B. (Cf. Bc 4.101 niṣphalaḥ)
- 237c sa eva] sic A B. (Cf. Bc 4.101 sva eva) || viniḡhya] sic A B. (Cf. Bc 4.101 viniḡr̥hya)
- 238a janaḥ striyaṃ] A: janastriyaṃ B. (Cf. Bc 4.102 janaśriyaṃ)
- 238b cānye] A(post corr. marg.): sāṅya A(ante corr.): cānya B. (Bc 4.102 sāyaṃ)
- 239a viṣayavimukhaṃ] A(post corr. marg.) B: vimukhaṃ A(ante corr.). (Bc 4.103 viṣayavimukhaṃ) || hi] sic A B. (Cf. Bc 4.103 tu)

239b hṛdayagataśalyo] B: hṛdayaśalyo A. (Cf. Bc 4.103 hṛdayagataśalyo)

240a °virato] A: viratā B.

240c munīndrān] A: munindrān B.

240d dhyātvā] A: om. B. || 'bhūt] A: 'sut B.

Colophon: iti jīrṇa°] A(ante corr.): iti śrīlālitavistare jīrṇa° A(post corr. marg.) B.

Colophon: vighātano] A: vighātānā B.

2.2 TJAM 第17章の和訳 (全訳)

『老人・病人・死人を観察して性愛の欲望を退ける』という第17章

かの阿羅漢、大通慧者である出家修行者ウパグプタは {or: 釈迦族の師子は} 再びかのアショーカ王を {or: 出家修行者アーナンダを} 見つめながら話しかけて、次のように教示しました。— [1]

それらの夢の出来事を聞くと、シュッドーダナ王は「きっとあの息子は出家してしまう」と沈思して、懊悩しました。[2]

その後かの王は父として息子に会いたいと願い、立ち上がると、大臣たちを伴って急いで後宮の中に歩み入りました。[3]

其処に入り来ると、彼はあたりを見渡し、近侍の者を呼んで、丁重に次の様に尋ねました。[4]

「おお侍従官よ、私の息子は何処にいるのだろうか。彼の顔を見るために私はやって来たのだ。それ故、私を息子に会わせてほしい。」[5]

そう王が命じたのを聞いて、かの侍臣が「王よ、あなた様のご子息はここにおります。どうかこちらにいらして、お会いになって下さい」と、[6] そう答えたのを聞くと、さっそく父であるシュッドーダナ王は赴いて、かの息子を見ました。[7]

性の享樂への欲求をもたず、瞑想を愛するその息子をずっと長い間見つめながら、彼は心で次の様に考えました。[8]

「この息子は大士（菩薩）であり、欲望を離れ、王権を得ようと願っていない。夢の中で見られたように、きっと出家してしまうに違いない。」[9]

このように思い耽りながら、かの王はその息子のもとに行きました。抱きしめて、頭にキス（鼻で嗅ぐようにするキス）をしながら涙をこぼし、次のように語りました。[10]

「ああ、息子よ、どうしてお前は性の享樂への欲求をもたず、出家修行者のように欲望を離れた心で、瞑想を愛好し続けているのか。[11]

お前が欲望に無関心になるほどの苦しみが、どうしてお前に生まれたのか。もし望むなら、ここで語って欲しい。そのお前が願うものを私は与えよう。[12]

もしお前が欲するなら、大地すべてを、王権を、栄光と諸々の財産を私は捨てて、お前に必ず与えよう。受け取って、欲するがままに楽しむがよい。[13]

あらゆる法の中でも最も重要なものである王法に、このあらゆる世の人々が依拠しながら、いつも快適に暮らしているのだ。[14]

その〔世の人々〕においても愛欲（カーマ）は偉大な法であり、輪廻を成就せしめるものである。その目的のため性愛の欲望の行為という誓行において偉大な快樂がある。[15]

輪廻の法の成就において、性愛（ラーガ）は実に〔お前の〕心を拡大させるだろう。それ故、性愛という大喜悦の快樂を味わい、楽しみながら〔それを〕行いなさい。[16]

性愛がなければ、輪廻における法・益・徳性・善き幸せはない。それ故、性愛に尊重の思いを常にいだき、快樂を楽しみつつ愛欲を享受しなさい。[17]

性愛は愛欲（カーマ）を成就させるし、愛欲によって子孫が生まれることができる。子孫は法（ダルマ）を成就させるだろうし、法によって家系の維持がある。[18]

家の法（クラ・ダルマ）の持続があるところに、常に繁栄の女神がとどまるだろう。繁栄の女神がいるところ、あらゆる富と財がある。[19]

あらゆる富と財があれば、その者は望むとおりの布施を行えるだろう。その功德によって心が清められた者は、幸福な美の輝きある善き徳性の抛り所たる者となるだろう。[20]

邪悪な友人を嫌悪し、善良な友人の徳性を喜び、道徳的に勝れ、善良な行いをなす、三輪清浄の者は、[21] あらゆる有情の益を助け、忍辱の誓行を行うことができる。その後、精進と大勇猛心をもって一切法という富を得るだろう。[22]

その後、禅定によって心を清め、智慧（般若）という宝を得ることが出来る。その宝の光明という灯明によって、善き者たちの道（善趣）を照らしながら進むことだろう。[23]

このように認識して、息子よ、お前は性愛の行為という誓行を行いつつ、愛する女たちと共に愛し合い、愛欲（カーマ）を享受し、快樂を楽しみなさい。[24]

あらゆる季節に花に飾られ、よき色と香りと味を具えた果実の樹々が飾っている、悦楽の庭園に住しながら、[25] 色とりどりの花環によって自らを飾り、熟して身体によい果実を欲するままに食べながら、[26] 八種の功德のある浄らかな水に満ちた、紅蓮や青蓮などの花々に溢れた、種々の鳥たちが沢山いる見事な池で沐浴し、[27] 快い三種の宮殿、〔すなわち〕常に暖かい冬殿、冷涼である夏殿、〔冷暖〕均等の家屋である雨季殿に[28] 住しながら、若い女たちと共に戯れて遊び、欲するがままに享受して、絶えず安楽に暮らしなさい。[29]

なぜなら輪廻において大歓喜・快樂の喜悅があるこの世俗法の達成は、布施の誓行によって生じたものである。[30]

梵天やシャクラなどの神々すべても、世界の守護神たちも、愛の欲望に染まった美しい女たちと共に享樂し、愛欲（カーマ）を楽しんでいる。[31]

婆羅門たちや仙人たちも、家の法を行じており、彼らも愛欲という徳目を好み、妻と共に楽しんでいる。[32]

あらゆる世界の支配者、大地の守護者たる諸王、クシャトリヤ、人民の守護主たち — 彼らも五種の〔欲望の〕徳目（五欲樂）を意欲する若い女たちの群と楽しんでいる。[33]

生類の主であるヴァイシャたちも五欲樂を楽しみ、女たちと性的享樂を味わいながら、家法の掟に従っている。[34]

家住者たち、商人たち、シュードラたちも愛欲の味わうべき快樂を求めて、あらゆる商品を売り買いしながら、財の獲得を行っている。[35]

隊商長たち、商人の長たちも愛欲の快樂を願う心を抱いて、海すら越えて、宝石の獲得を行う。[36]

有徳の財産家たちも様々な手段をもって財産の獲得を行って、愛欲の快樂のために常に熱心な努力を怠らない。[37]

貧しい者たち、農夫たちもまた耕作の仕事に努力しつつ、愛欲の快樂のために〔その仕事を〕ひどい労苦であると考えない。[38]

奴婢や召使たちも他者に仕える仕事に努力し、彼らも〔皆〕愛欲を思う心を抱いて、絶えず財を稼いでいる。[39]

家来たち、兵、戦士たち — 彼らも〔皆〕愛欲を思う心を抱いて、自分の命すら顧みることなく、戦闘の圏内に入ってゆく。[40]

不運な者たち、貧窮者たちすら、家から家へ食物を求めて食べながら、愛欲の快樂を味わうため常に乞い求めて彷徨い歩いている。[41]

このようにして、あらゆる人間たちが、榮えある者も哀れな者も、欲望のままに愛欲を味わい、悦び、楽しんでいる。[42]

家畜、動物たち、虫たち、鳥たちも、それぞれの美しい伴侶を愛し、楽しみながら、性愛の悦びを味わっている。[43]

鬼（ブータ）、餓鬼、ピシャーチャたち — 彼らも〔皆〕愛欲の快樂を思う心を抱いて、それぞれの妻との性愛の悦びを味わいながら、喜悅して暮らしている。[44]

ダーナヴァ、ガルダ、ナーガ（龍）たちも愛欲の快樂を求め、女たちと性愛の享受を味わい、常に愉悅している。[45]

ガンダルヴァ、キンナラ、ヤクシャ（夜叉）、クンバーンダ、羅刹たちも、女たちと共に快樂を楽しみ、[46] 同様にヴィディヤダラ、シッダたち、またサーディヤを始

めとする者たちすら、女たちの支配下にあり、つねに楽しんで快樂を享受している。

[47]

シャクラを始めとする神々も皆悦んで、アプサラス（天女）の群と共に、天の不死の甘露を味わいながら、自ら意欲して快樂を楽しんでいる。[48]

またヤーマ天、サントウシタ天、化樂天、他化自在天の神々も、[49] あらゆる感官の享樂の対象に愛著し、それぞれのアプサラスの群と共に、天の不死の甘露を味わいながら、自ら意欲して快樂を楽しんでいる。[50]

欲界に生まれたいかなる者が、愛欲の支配下にないだろうか。あらゆる者が愛する伴侶の支配下にあり、家法の掟に従っているのだ。[51]

愛欲（カーマ）こそ実に一切の輪廻の法の基礎たるものと言われる。愛欲がなければどうして三界において法が活動できるだろうか。[52]

それ故〔お前も〕愛欲の支配下にいて、家族の法に住し、布施を行いながら、快樂を味わい、悦びをもって楽しみながら、暮らさなさい。[53]

若者である間は、自分の愛する女たちと共に楽しみ、歓び、自分の家法の維持のために自分の家系の継続を達成しなさい。[54]

その後、老境に達した時に、自分の家の息子を後継ぎに置き、出家して苦行の森に住して、牟尼の誓行を行いなさい。[55]

もしそのようにするなら、生きている間ずっと快樂を楽しみながら、お前に常に幸があらう。最後に寂滅の至福に達して、仏の住まいにお前は達するだろう。[56]

いとしい子よ、そのように十分認識して、自分の家の持続を達成させる性愛の行為という誓行を堅持し、美しい女たちと共に楽しみなさい。」[57]

このように父王が教示されたのを聞いて、かの大慧者はその父を見つめながら「わかりました」と答えました。[58]

その後、父であるかの王は、息子がよく理解したと考え、大臣を呼んで、見つめながら次の様に命じました。[59]

「大臣よ、この副王（王子）が、園林に行きたいと願っている。その道を莊嚴し、鐘を鳴らして布告しなさい。」[60]

この様に王が命じたのを聞き、かの大臣は「かしこまりました」と答え、ただちに都城の道を完全に掃除しました。[61]

そして飾り旗やのぼりなどによって至る所を飾り付けし、またかの歡喜園においても飾り付けをしました。[62]

それから〔大臣は〕彼の部下を呼んで、王に命じられたことを次の様に告げました。

「君、鐘を鳴らして、あらゆる人民にも同様に報せなさい。」[63]

彼が命じたのを聞いて、その者は「そうします」としっかり心得て、鐘を手に取り、すぐに従者を伴って、悦んで〔都城を〕歩き回りました。[64]

そして都城のあらゆる場所で鐘を鳴らしながら、王に命じられた通りに、すべての人民に語りかけ、大声で布告しました。[65]

「かの副王たる王子、栄光あるサルヴァールタシッダ様は今から七日後に、観覧のため歓喜園に行かれるであろう。[66]

それ故、この地で都城のどこにも不適切な物が置かれていてはならない。至る所にめでたい物だけが置かれるべきである。」[67]

鐘が鳴らされてのその布告を聞いて、すべての都民たちは歓喜し、かの尊いお方を見たいと願い、[その様に] 行動しました。[68]

以下、ネパールに伝承されていた馬鳴の *Buddhacarita* 第3章と第4章からの逐字的な借用が始まる。TJAM のそれらの借用詩節において、梵文テキストが *Buddhacarita* と大部分合致するか、または完全に同じであるような場合、ここでは翻訳を省略するが、テキストの内容が大きく異なる詩節については和訳を示す。

Buddhacarita 3.1 からの借用詩節	[69]
Buddhacarita 3.2 からの借用詩節	[70]
Buddhacarita 3.3 からの借用詩節	[71]
Buddhacarita 3.4 からの借用詩節	[72]
Buddhacarita 3.5 からの借用詩節	[73]
Buddhacarita 3.6 からの借用詩節	[74]
Buddhacarita 3.7 と前半が異なる詩節	[75]

訳：父はかの息子がやって来たのを見ると、彼の心が園林を欲していることを考え、「行きなさい」と言葉では命じ、心では愛情のゆえに彼を離しませんでした。[75]

Buddhacarita 3.8 からの借用詩節	[76]
Buddhacarita 3.9 からの借用詩節	[77]
Buddhacarita 3.10 からの借用詩節	[78]
Buddhacarita 3.11 からの借用詩節	[79]
Buddhacarita 3.12 からの借用詩節	[80]
Buddhacarita 3.13 からの借用詩節	[81]
Buddhacarita 3.14 からの借用詩節	[82]
Buddhacarita 3.15 からの借用詩節	[83]
Buddhacarita 3.16 からの借用詩節	[84]
Buddhacarita 3.17 からの借用詩節	[85]
Buddhacarita 3.18 からの借用詩節	[86]

Buddhacarita 3.19 からの借用詩節	[87]
Buddhacarita 3.20 からの借用詩節	[88]
Buddhacarita 3.21 からの借用詩節	[89]
Buddhacarita 3.22 からの借用詩節	[90]
Buddhacarita 3.23 からの借用詩節	[91]
Buddhacarita 3.24 からの借用詩節	[92]
Buddhacarita 3.25 からの借用詩節	[93]
Buddhacarita 3.26 からの借用詩節	[94]
Buddhacarita 3.27 からの借用詩節	[95]
Buddhacarita 3.28 からの借用詩節	[96]
Buddhacarita 3.29 からの借用詩節	[97]
Buddhacarita 3.30 からの借用詩節	[98]
Buddhacarita 3.31 からの借用詩節	[99]
Buddhacarita 3.32 からの借用詩節	[100]
Buddhacarita 3.33 からの借用詩節	[101]
Buddhacarita 3.34 からの借用詩節	[102]
Buddhacarita 3.35 からの借用詩節	[103]
Buddhacarita 3.36 からの借用詩節	[104]
Buddhacarita 3.37 からの借用詩節	[105]
Buddhacarita 3.38 からの借用詩節	[106]
Buddhacarita 3.39 からの借用詩節	[107]
Buddhacarita 3.40 からの借用詩節	[108]
Buddhacarita 3.41 からの借用詩節	[109]
Buddhacarita 3.42 からの借用詩節	[110]
Buddhacarita 3.43 に内容が類似する詩節	[111]

訳：そう語ったのを聞いて、かの王子は注意深い眼でその病人を眺め、更にかの御者を見つめて不安な心で、丁重に次の様に質問しました。[111]

Buddhacarita 3.43 に内容が類似する詩節 [112]

訳：「彼だけの身体に病気は起こるものなのか、或いは更に、輪廻的生存にいるあらゆる生類、我々の [身体] にも [それが起こると] 知られているのか、御者よ、そのことを私の前であなたは語りなさい。」[112]

Buddhacarita 3.44 に内容が類似する詩節 [113]

訳：彼がそう語ったのを聞いて、かの御者は王子を見つめながら、次の様に語りました。「賢きお方よ、この〔病という〕弱点は〔生き物に〕共通のものなのです。輪廻的生存の住まいのどこにおいても同様なのです。」[113]

Buddhacarita 3.45 からの借用詩節 [114]

Buddhacarita 3.46 に内容が類似する詩節 [115]

訳：「このように病によって押しひしがれていながら、どんな人でも〔生に〕歓喜している。生類がもつこの病気という禍を見ながら、どうしてこのように楽しもうと、ふるまっているのか。病気の恐怖から逃れていないのに、あらゆる人々が、愚迷の心をいだいて笑っている。」[115]

Buddhacarita 3.47 からの借用詩節 [116]

Buddhacarita 3.47 に内容が類似する詩節 [117]

訳：そのように〔王子が〕語ったのを聞いて、御者は落胆した心で「かしこまりました」と返答して、その通りに車を転じると、それを王宮の中に入れました。[117]

Buddhacarita 3.48 からの借用詩節 [118]

Buddhacarita 3.49 からの借用詩節 [119]

Buddhacarita 3.50 からの借用詩節 [120]

Buddhacarita 3.51 からの借用詩節 [121]

Buddhacarita 3.52 からの借用詩節 [122]

Buddhacarita 3.53 からの借用詩節 [123]

Buddhacarita 3.54 からの借用詩節 [124]

Buddhacarita 3.55 からの借用詩節 [125]

Buddhacarita 3.56 からの借用詩節 [126]

Buddhacarita 3.57 からの借用詩節 [127]

Buddhacarita 3.58 からの借用詩節 [128]

Buddhacarita 3.59 からの借用詩節 [129]

Buddhacarita 3.60 からの借用詩節 [130]

Buddhacarita 3.61 からの借用詩節 [131]

Buddhacarita 3.62 からの借用詩節 [132]

Buddhacarita 3.63 からの借用詩節 [133]

Buddhacarita 3.64 からの借用詩節 [134]

Buddhacarita 3.65 からの借用詩節 [135]

Buddhacarita に対応がない独自の詩節 [136]

訳：其処で、かの菩薩は視線をあちこちに動かし、花が咲いた樹を見て、「あれらの満開の花たちも、寒い季節になれば、萎れてしまうことだろう。このようにすべての者も最後の時には快樂・歡びを失って萎れるにいたるだろう」と、そのように死を沈思しながら、快樂の心を離れ、瞑想に耽ったままでいました。[136]

Buddhacarita 4.1 に内容が類似する詩節 [137]

訳：その後、かの大きな園林において、性愛の快樂を強く望む若い女たちは、あたかも到着した若い花婿を迎えるように、彼に向かって歩いて来ました。[137]

Buddhacarita 4.2 からの借用詩節	[138]
Buddhacarita 4.3 からの借用詩節	[139]
Buddhacarita 4.4 からの借用詩節	[140]
Buddhacarita 4.5 からの借用詩節	[141]
Buddhacarita 4.6 からの借用詩節	[142]
Buddhacarita 4.7 からの借用詩節	[143]
Buddhacarita 4.8 からの借用詩節	[144]
Buddhacarita 4.9 からの借用詩節	[145]
Buddhacarita 4.10 からの借用詩節	[146]
Buddhacarita 4.11 からの借用詩節	[147]
Buddhacarita 4.12 からの借用詩節	[148]
Buddhacarita 4.13 からの借用詩節	[149]
Buddhacarita 4.14 からの借用詩節	[150]
Buddhacarita 4.15 からの借用詩節	[151]
Buddhacarita 4.16 からの借用詩節	[152]
Buddhacarita 4.17 からの借用詩節	[153]
Buddhacarita 4.18 からの借用詩節	[154]
Buddhacarita 4.19 からの借用詩節	[155]
Buddhacarita 4.20 からの借用詩節	[156]
Buddhacarita 4.21 からの借用詩節	[157]
Buddhacarita 4.22 からの借用詩節	[158]
Buddhacarita 4.23 からの借用詩節	[159]
Buddhacarita 4.24 からの借用詩節	[160]
Buddhacarita 4.25 からの借用詩節	[161]
Buddhacarita 4.26 からの借用詩節	[162]

Buddhacarita 4.27 からの借用詩節	[163]
Buddhacarita 4.28 からの借用詩節	[164]
Buddhacarita 4.29 からの借用詩節	[165]
Buddhacarita 4.30 からの借用詩節	[166]
Buddhacarita 4.31 からの借用詩節	[167]
Buddhacarita 4.32 からの借用詩節	[168]
Buddhacarita 4.33 からの借用詩節	[169]
Buddhacarita 4.34 からの借用詩節	[170]
Buddhacarita 4.35 からの借用詩節	[171]
Buddhacarita 4.34 (!) からの借用詩節 ⁽¹⁷⁾	[172]
Buddhacarita 4.37 からの借用詩節	[173]
Buddhacarita 4.38 からの借用詩節	[174]
Buddhacarita 4.39 からの借用詩節	[175]
Buddhacarita 4.40 からの借用詩節	[176]
Buddhacarita 4.41 からの借用詩節	[177]
Buddhacarita 4.42 からの借用詩節	[178]
Buddhacarita 4.43 からの借用詩節	[179]
Buddhacarita 4.44 からの借用詩節	[180]
Buddhacarita 4.45 からの借用詩節	[181]
Buddhacarita 4.46 からの借用詩節	[182]
Buddhacarita 4.47 からの借用詩節	[183]
Buddhacarita 4.48 からの借用詩節	[184]
Buddhacarita 4.49 からの借用詩節	[185]
Buddhacarita 4.50 からの借用詩節	[186]
Buddhacarita 4.51 からの借用詩節	[187]
Buddhacarita 4.52 からの借用詩節	[188]
Buddhacarita 4.53 からの借用詩節	[189]
Buddhacarita 4.54 からの借用詩節	[190]
Buddhacarita 4.55 からの借用詩節	[191]
Buddhacarita 4.56 からの借用詩節	[192]
Buddhacarita 4.57 からの借用詩節	[193]
Buddhacarita 4.58 からの借用詩節	[194]

17. このTJAM第 172 偈は第170 偈 (= Bc 4.34) とテキストが重複している。本来ここに Bc 4.36 を写すはずであったが、A 写本の筆写人が誤って Bc 4.34 を写してしまったものである。

Buddhacarita 4.59 からの借用詩節	[195]
Buddhacarita 4.60 からの借用詩節	[196]
Buddhacarita 4.61 からの借用詩節	[197]
Buddhacarita 4.62 からの借用詩節	[198]
Buddhacarita 4.63 からの借用詩節	[199]
Buddhacarita 4.64 からの借用詩節	[200]
Buddhacarita 4.65 からの借用詩節	[201]
Buddhacarita 4.66 からの借用詩節	[202]
Buddhacarita 4.67 からの借用詩節	[203]
Buddhacarita 4.68 からの借用詩節	[204]
Buddhacarita 4.69 からの借用詩節	[205]
Buddhacarita 4.70 からの借用詩節	[206]
Buddhacarita 4.71 からの借用詩節	[207]
Buddhacarita 4.72 からの借用詩節	[208]
Buddhacarita 4.73 からの借用詩節	[209]
Buddhacarita 4.74 からの借用詩節	[210]
Buddhacarita 4.75 からの借用詩節	[211]
Buddhacarita 4.76 からの借用詩節	[212]
Buddhacarita 4.77 からの借用詩節	[213]
Buddhacarita 4.78 からの借用詩節	[214]
Buddhacarita 4.79 からの借用詩節	[215]
Buddhacarita 4.80 からの借用詩節	[216]
Buddhacarita 4.81 からの借用詩節	[217]
Buddhacarita 4.82 からの借用詩節	[218]
Buddhacarita 4.83 からの借用詩節	[219]
Buddhacarita 4.84 からの借用詩節	[220]
Buddhacarita 4.85 からの借用詩節	[221]
Buddhacarita 4.86 からの借用詩節	[222]
Buddhacarita 4.87 に内容が類似する詩節	[223]

訳：もし女たちのこの肉体的な美が永遠のものであったとしても、それでも、知ある者にとって、愛欲において楽しむことは堪えられない。[223]

Buddhacarita 4.88 からの借用詩節	[224]
Buddhacarita 4.89 からの借用詩節	[225]
Buddhacarita 4.90 からの借用詩節	[226]

Buddhacarita 4.91 からの借用詩節	[227]
Buddhacarita 4.92 からの借用詩節	[228]
Buddhacarita 4.93 からの借用詩節	[229]
Buddhacarita 4.94 からの借用詩節	[230]
Buddhacarita 4.95 からの借用詩節	[231]
Buddhacarita 4.96 からの借用詩節	[232]
Buddhacarita 4.97 からの借用詩節	[233]
Buddhacarita 4.98 からの借用詩節	[234]
Buddhacarita 4.99 からの借用詩節	[235]
Buddhacarita 4.100 からの借用詩節	[236]
Buddhacarita 4.101 からの借用詩節	[237]
Buddhacarita 4.102 からの借用詩節	[238]
Buddhacarita 4.103 からの借用詩節	[239]
Buddhacarita に対応がない独自の詩節	[240]

訳：このようにかのサルヴァールタシッダは感官の対象を嫌悪し、老・病・死を考えて、悟りの智慧を欲し、揺るぎない心で、菩提行を愛し、あらゆる徳性の蔵たる牟尼たちの王、一切の仏たちを見んと欲して、憶念しながら瞑想し、三昧に専念して心楽しみ、自分の住まいの中に居ました。[240]

『老人・病人・死人を観察して性愛の欲望を退ける』という第17章 [終わる]。

3. Tathāgatajanmāvadānamālā 第18章の校訂研究

第18章を内容的に8区分して、各部所のソースとオリジナル箇所をおおまかに示せば、次の通り：

(1) 第6～第26詩節（観耕、樹下の瞑想、一比丘を見る）の記述は Buddhacarita 第5章を利用。

(2) 第27～第61詩節（王子が出家への意欲を友人たちに話す）の記述は TJAM オリジナル。

(3) 第62～第66詩節（ウダーインの忠告1）の記述は Buddhacarita 第4章を利用。

(4) 第67～第121詩節（ウダーインの忠告2）の記述は TJAM オリジナル。

(5) 第122～第126詩節（女の声を帰城の途中で聞いて涅槃を思う）の記述は Buddhacarita 第5章を利用。

(6) 第127～第138詩節（菩薩が父王に出家を願い出る）の記述は TJAM オリジナル。

(7) 第139～150詩節（出家の是非をめぐる菩薩と王との対話1）の記述は Buddhacarita 第5章を利用。

(8) 第151～第215詩節（出家の是非をめぐる菩薩と王との対話2）の記述は TJAM オリジナル。

3.1 TJAM 第18章『出家に進み行くことを請い願ひ、理解せしめる』の梵文テキスト

18 pravrajyābhigamanaprārthanābhisaṃbodhano nāma parivarta

[116a3] atha so 'rhan mahābhijña **upagupto** {or: °ḥ śākyasiṃho} yatīśvaraḥ /
aśokaṃ {or: ānandaṃ} taṃ **patiṃ** {or: yatiṃ} paśyan samāmantryaivam ādiśat // 1
tasya sarvārthasiddhasya saṃbodhivratasādhanam /
vakṣyāmy ahaṃ mahāsattva śṛṇuṣva tat samāhitaḥ // 2
tadyathāsau mahāsattvo lobhyamāno 'pi yatnataḥ /
kāntābhī ratiraktābhī rantuṃ naiva samaicchata // 3
atha sa viṣayāsakto vasante 'pi vanāśrame /
vivikto vṛkṣam āśritya dhyātvā sthātuṃ samaihataḥ // 4
tata iṣṭasuhṛnmitrasacivaiḥ sa samanvitaḥ /
kaṅṭhakam aśvam āruhya vane draṣṭuṃ mudācarat // 5

tatra mārge mahīm sarvām kṛṣyamāṇām samantataḥ / śaṣpadarbhāṅkurotpannām sampaśyann acarac chanaiḥ // 6	≈ Bc 5.5
tatrānekān krimīn kīṭān jantūṃs tān āturān pathi / dṛṣṭveva svajanān ārttān śúśoca sa kṛpāmatih // 7	≈ Bc 5.5
kṛṣataś ca narān vīkṣya vātātapāhataśrayān / dhuryāmś ca vahato bhārām cukṣubhe 'tikṛpāhataḥ // 8	≈ Bc 5.6
avatūrya tato 'śvāt sa vyacarad bhūtale śanaiḥ / sarveśām hi jarārogamṛtyūn eva vicintayan // 9	≈ Bc 5.7
abhīpsur vijane sthātum sarvāṃs tān anuyāyinaḥ / nivārya svayam ekānte gatvā paśyan samantataḥ // 10	≈ Bc 5.8
vṛkṣachāyām samāśritya tṛṇāsana[116b]samāśritaḥ / sarvān buddhān anusmṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 11	≈ Bc 5.9
jagataḥ prabhavavyayau vicintyan niścalāśayaḥ / prathamadhyānasatsaukhyam anāsravaṃ samāptavān // 12	≈ Bc 5.9; 5.10
tataḥ prītisukhaṃ prāpya sa vivekasamādhijam / sarvalokagatiṃ vīkṣya pradadhyāv evam ātmanā // 13	≈ Bc 5.11
yaj jano 'yaṃ jarāvyādhimṛtyudharmāvimocitaḥ / mṛtakam āturaṃ jīṛṇam madāndho nindate param // 14	≈ Bc 5.12
ahaṃ ced īdṛśaḥ svayaṃ vinindeya paraṃ tathā / na hi tat sadṛśaṃ vā syāt kṣamaṃ mama vijānataḥ // 15	≈ Bc 5.13
iti vīpaśyatas tasya jagadjarāturavyayān / balayauvanajīveṣu svātmagato mado 'kṣiṇot // 16	≈ Bc 5.14
na jaharṣānutepe na vicikitsām ca nāyayau / tandrinidre ca kāme na raraṅje nāvamanyate // 17	≈ Bc 5.15
iti buddhir viśuddhābhūn nīrajaskāsyā sanmateḥ / anyair adṛśyamānaś ca bhikur eka upāsarat // 18	≈ Bc 5.16
vīkṣya sarvārthasiddhas tam abhyapṛcchat sa sādaram / bhavān kaḥ kuta āyāti kimarthaṃ tad bravītu me // 19	≈ Bc 5.17ab
iti taduktam ākarṇya sa bhikṣur yatipuṅgavaḥ / nṛpātmajaṃ tam ālokya purastha evam abravīt // 20	≈ Bc 5.17b
ahaṃ pravrajīto bhikṣuḥ śramaṇaḥ saugato yatiḥ / jarārogāntabhīto 'smi mumukṣur bodhisamcarī // 21	≈ Bc 5.17cd
jagati kṣayidharme 'tra mṛgaye saugataṃ padam / svaparatulyasadbuddhiniḥkleśo bhavaniḥsṛhaḥ // 22	≈ Bc 5.18
vasaṃś caityavihāre vā tarumūle girau vane /	

tyaktaparigraho yogī bhikṣānno vicaro nṛpa // 23	≈ Bc 5.19
ity uktvā sa mahābhijñas tatra utthāya pakṣivat /	
vihāyasā jvaladvahnir iva devālayam yayau // 24	≈ Bc 5.20
tam evaṃ khe gataṃ vīkṣya vismitaḥ sa nṛpātmajaḥ /	
tadvrataṃ samupālabdhyaḥ pravrajitum samaicchata // 25	≈ Bc 5.21
tataḥ sudhīḥ sa śuddhātmā bodhisattvo jitedriyaḥ /	
nivṛtya ca tadudyāne dhyātvā tasthau samāhitaḥ // 26	≈ Bc 5.22
tatra te sacivāḥ sarve taṃ vṛkṣatalam āśritam /	
samīkṣya sahasopetya parivṛtyo[117a]patasthire // 27	
tān sarvān samupāsīnān dṛṣtvā bhūpātmajo 'pi saḥ /	
rāgacaryāvīraktātmā niḥśvasann evam abravīt // 28	
aho janmajarārogavyayaṃ dṛṣtvāpi rāginaḥ /	
svechayā ratisambhogaṃ bhuktvā ramanti nirbhayāḥ // 29	
sarve 'pīme narā nūnaṃ jarāturā hatendriyāḥ /	
mṛtyum āsādyā bhūyo 'pi janmalabdā bhavādhvani // 30	
svechākarmānusaṃcārāḥ saṃpattisukhasādhiṇaḥ /	
svadaivaphalabhogyāni bhuktvā bhrameyur ābhavam // 31	
yadā svargatā devā bhuktvāmṛtaṃ pramoditāḥ /	
ratibhogātisaṃraktāḥ pracareyuḥ pramoditāḥ // 32	
kāle tataḥ paricyutvā svadaivābhipramoditāḥ /	
prajātā martyaloke ca kecic cāpy āsure kule // 33	
tiryagyonīṣu kecic ca kecit prete ca nārake /	
svakarmaphalabhuñjānā bhrameyuḥ sarvadā bhavaḥ // 34	
muktimārgam apaśyanto bhramyamānā vane 'ndhavat /	
vividhāny api duḥkhāni bhuñjamānā vimohitāḥ // 35	
kleśaduḥkhābhisaṃtaptā aśaraṇyā anāyakāḥ /	
asaddharmābhisaṃraktāś careyur evam ābhavam // 36	
kadācit sugatān dṛṣtvā mudā vandeyur ānatāḥ /	
tadā te vimalātmāno labhēyur dharmamānasaṃ // 37	
tato dharmābhivāñchanto mṛgeyur dharmam uttamam /	
śrutvā te saugataṃ dharmam bodhicittam avāpnuyuḥ // 38	
tatas te syur mahāsattvā bodhisattvā jitendriyāḥ /	
pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā saṃcarerañ jagaddhite // 39	
tatas te bodhisambhāraṃ pūrayitvā yathākramam /	
arhatpadaṃ samāsādyā jitvā māragaṇān api // 40	

trividhāṃ bodhim āsādyā labheyuḥ saugatālayam
niḥkleśā nirmalātmānaḥ pariśuddhendriy*āśrayāḥ // 41
iti matvāham atraivam dhyātvā saṃbodhimānasaḥ /
triratnasmarāṇaṃ dhṛtvā sthātum icchāmi sarvadā // 42
etan me vākyam ākarṇya sarve yūyaṃ sahāyakāḥ /
bhadrāśrīsadguṇaṃ saukhyaṃ dātum prāptum yadīcchatha // 43
tathā me vacanaṃ śrutvā gatvā svasvālayasthitāḥ /
dattvārthibhyaḥ sadā dānaṃ saṃcaradhvaṃ samāhitāḥ // 44
śuddhaśīlasamācārāḥ sambodhini[117b]hitāśayāḥ /
triratnabhajanaṃ kṛtvā caradhvaṃ ghoṣataṃ vratam // 45
tataḥ kṣāntivrataṃ dhṛtvā svaparātmahitodyatāḥ /
sambodhisādhanam dharmam dhṛtvā carata sarvadā // 46
tataḥ kleśān vinirjitya duṣṭān mārāṇān api /
samādhinihitātmānāś carata dhyānaṣaṃvaram // 47
tataḥ prajñābhim uttīrya sambodhijñānam uttamam /
cintāmaṇiṃ samāsādyā saṃbuddhapadam āpsyatha // 48
evaṃ bauddhapadam prāptum yadīcchatha jagaddhite /
sarve svasvālaye sthitvā caradhvaṃ bodhisamvaram // 49
aham api jagaloke saddharmasamprakāśitum /
saṃbodhijñānam āsādyā prāpsyāmi saugataṃ padam // 50
ato 'haṃ sāmpratam gatvā gayāśīrṣe nagottame /
tapo 'tiduṣkaram taptvā jayan sarvāṃs tapasvinaḥ // 51
tato bodhidrume gatvā duṣṭān mārāṇān jayan /
dhyātvā saṃbodhim āsādyā saṃbuddhapadam āpnuyām // 52
tataḥ sarveṣu lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /
bodhimārge pratiṣṭhāpya cārayeyaṃ śubhe jagat // 53
evaṃ dharmamayaṃ kṛtvā sarvatra bhuvaneṣv api /
samāpya saugataṃ kāryaṃ samāpsyāmi sunirvṛtim // 54
etaddhetor gayāśīrṣe girau gacchāni sāmpratam /
yūyaṃ svasvālaye gatvā carata bodhisamvaram // 55
yadāhaṃ bodhisamprāptaḥ saddharmasamprakāśayan /
tadāgatyeḥa yuṣmākam upadekṣyāmi saṃvaram // 56
sarve yūyaṃ samāgatya śāsane me samāśritāḥ /
pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā saṃcaradhvaṃ jagaddhite // 57
mayā sārđham caranto 'pi kṛtvā sarvatra bhadratām /

saddharmaṃ samupādiśya cārayata jagacchubhe // 58
tathā cen nirmalātmānaḥ pariśuddhendriyāśrayāḥ /
arhanto bodhim āsādy sambuddhapadam āpsyatha // 59
tato dharmam prakāśitvā kṛtvā dharmamayaṃ jagat /
samāpya saugataṃ kāryam samāpsyatha sunirvṛtim // 60
etat satyaṃ mayākhyātaṃ śrutvā sarve prabodhitāḥ /
yūyaṃ svasvālaye sthitvā saṃcaradhvaṃ [118a] sadā vṛṣe // 61
iti tenoditaṃ śrutvā purohitātmajo dvijaḥ /
udāyī nāma taṃ paśyan suhīram evam abravīt // 62 ≈ Bc 4.62
śṛṇu sakhe suhṛdvākyam yan mayā hitam ucyate /
yat te 'haṃ supriyo 'smiṣṭaḥ suhṛt sakhā sadānugaḥ // 63 ≈ Bc 4.64
yaḥ sakhā suhṛdaḥ sakhyur hitārthaṃ nopabhāṣati /
akārye cārayen naiva sa kim iṣṭaḥ suhṛt sakhā // 64 ≈ Bc 4.65
yaś cāpi suhṛdaḥ sakhyuḥ śṛṇute na hitam vacaḥ /
śrutvāpi mānāyena naiva so 'pi kim supriyaḥ sakhā // 65
ity ahaṃ te hitam vākyam vaktum icchāmi sanmate /
tad arhati bhavāñ chrotuṃ yadi me tvam suhṛt sakhā // 66
pitā te sarvarājendro vṛddhas tyaktvā parigrahān /
vanāśrame samāśrītya municaryāṃ samācāret // 67
yac cāpi te pitū rājānā tvam eka ātmajaḥ sutaḥ /
tad atra ko nṛpo rājā saṃpālayet prajāś sadā // 68
yāvan na jāyate putras tāvad rājyāśrame vasan /
saṃvṛtidharmam ādhāya saṃcara svakulavratam // 69
yadā te ātmajo jātaḥ saṃskārapariśodhitāḥ /
sarvavidyāguṇābhijño yuvarājo vinītikaḥ // 70
tadā taṃ śrīguṇādhāraṃ abhiṣiñcya yathāvidhi /
nṛpāsane pratiṣṭhāpya kṛtvā narādhipam prabhum // 71
sambodhijñānasamprāptyai tyaktvā sarvān parigrahān /
pravrajyāsamvaram dhṛtvā saṃcarasva jagaddhite // 72
evaṃ cet te sadā bhadram bhavec chrīśatsukhānvitam /
kuladharmasthitiś cāpi jayaśrīkīrtisaṃyutāḥ // 73
tathā bhavāñ jagaloke saddharmaṃ saṃprakāśayan /
jagad dharmamayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuyāt // 74
sarve 'pi hi mahāsattvā bodhisattvā narādhipāḥ /
svātmajaṃ svāsane sthāpya kṛtvā rājyādhipam prabhum // 75

vṛddhā rājyāśramam tyaktvā samāśritya vanāśrame /
 municaryāvratam dhṛtvā samprayātāḥ sunirvṛtim // 76
 evam sarve 'pi sambuddhā atītā vartamā[118b]nikāḥ /
 janayitvātmajam dhīram pratiṣṭhāpya nṛpāsane /
 vinīya sarvalokānām samvṛtidharmapālāne // 77
 vṛddhā gṛhāśramam tyaktvā samāśritya vanāśrame /
 pravrajyāsamvaram dhṛtvā samcaranto jagaddhite // 78
 niḥkleśā vimalātmānaḥ parisuddhatrimaṇḍalāḥ /
 jītvā māragaṇān duṣṭān bodhim prāpya munīśvarāḥ // 79
 saddharmam samupādiśya kṛtvā dharmamayaṁ jagat /
 samādhinihitātmāno yātā yāsyanti nirvṛtim // 80
 evam anāgatāś cāpi ye bhavedur munīśvarāḥ /
 te 'pi sarve samutpādya svātmajam rājyapālāne /
 abhiṣiñcyā pratiṣṭhāpya nṛpāsane vinīya ca // 81
 vṛddhā rājyāśramam tyaktvā samāśritya vanāśrame /
 pravrajyāsamvaram dhṛtvā samādhinihitāśayāḥ // 82
 jītvā māragaṇān duṣṭān niḥkleśā vimalendriyāḥ /
 sambodhijñānam āsādyā bhaviṣyanti munīśvarāḥ // 83
 te 'pi sarvatra saddharmam upādiśya jagaddhite /
 jagad dharmamayaṁ kṛtvā samyāsyanti sunirvṛtim // 84
 evam vijñāya bhūmendra saṁsāradharmasādhanam /
 yāvan na vidyate *putras tāvad rājyāśrame vasan // 85
 sarvalokahitārthena samvṛtidharmam cārayan /
 janayitvātmajam devyām saṁpālayasva sādaram // 86
 tato vinīya kaumāryam tam ātmajam yathākramam /
 adhītya sakalā vidyāḥ samvṛtau sampracārayan // 87
 tato 'bhiṣiñcyā yauvanyam pratiṣṭhāpya nṛpāsane /
 sarvadharmādhipam kṛtvā saṁcārayan prajāhite // 88
 tatas sve vārddhake tyaktvā rājyam samsāraniḥspṛhaḥ /
 pravrajyāsadvratam dhṛtvā samcarasva jagaddhite // 89
 tathā cet tvam viśuddhātmā jītvā māragaṇān api /
 trividhām bodhim āsādyā sarvajño 'rhañ jino bhaved // 90
 tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmam samprakāśayan
 jagad dharmamayaṁ kṛtvā sunirvṛtim samāpnuyāḥ // 91
 evam te sarvadā bhadram vaṁśa[119a]sthitir bhaved api /

iha dharmayaśaḥ saukhyaṃ paratra saugatālayam // 92
 kiṃ cāpy etāḥ priyāḥ kāntā bhāryās te dharmacārikāḥ /
 suśīlābharaṇā bhadraḥ kalpavidyāvicakṣaṇāḥ // 93
 kathaṃ tvayā parityājyā satyadharmānucārikāḥ /
 yuvatyāḥ pramadā rāmāḥ sudakṣiṇāḥ priyaṃvadāḥ // 94
 yadā tvayā parityaktās tadātmavirahārditāḥ /
 sarvāḥ kleśāgnisaṃtaptās careyuḥ kelisaṃratāḥ // 95
 tvannāmānusmṛtim ādhāya kāścid yāyur yamālayam /
 dhyātvā tvāṃ eva paśyantyās tiṣṭheyur nīscalendriyāḥ // 96
 kāścid bhrameyur unmattā iva rāgābhimohitāḥ /
 kāścid viśādyapathyāni bhuktvā vibhrāntamānasāḥ /
 smṛtvā te prāṇam utsṛjya gaccheyur narakeṣv api // 97
 kāścit pāsair gale baddhā prahatvā cātmani svayam /
 patitvā vā jale gādhe vahnau vāpi mahojjvale // 98
 prapātād vā patitvāpi kāścid annaṃ payo 'pi ca /
 abhuktvaiva tava smṛtvā tyajeyuḥ prāṇam ātmanā // 99
 tadā kiṃ te mahāsattva pravrajya vratasādhanaḥ /
 saṃbodhim api saṃprāpya rahite prācared vṛṣam // 100
 strīhatyā kaluṣātmā tvāṃ kathaṃ bodhiṃ samāpnuyāḥ /
 saṃbuddho 'rhan viśuddhātmā dharmarājā hi nirmalaḥ // 101
 mātā te gautamī cāpi parityaktā tvayā yadā /
 tadā te snehaduḥkhāgnitāpitā vihatāśayā // 102
 tava rūpam anusmṛtvā bhadrāśrīsadguṇānvitam /
 dhyātvā nāma samuccārya tyajet prāṇam adhīritā // 103
 sarve lokāḥ prajāś cāpi tvayi yāte 'vibodhitāḥ
 kleśamadābhimānāndhās careyur duriteṣv api // 104
 tadaitatpāpasaṃcārāt pravartet pracalaḥ kaliḥ /
 tadā sarve durārādhyā daśākuśalacāriṇāḥ // 105
 duṣṭāśayā durācārāḥ pāpānuraktamānasāḥ /
 unmattā iva durdāntās cariṣyanti yathecchayā // 106
 arājakam idaṃ rājyaṃ dṛṣtvā sarve 'pi te dviṣaḥ /
 parākramya prajā hatvā grahīṣyanti yathecchayā // 107
 tadā ko 'tra prajā rājā saṃpālayed yathā bhavān /
 kalipracāraṇotpātaṃ durbhikṣaṃ vā cared api // 108
 tataḥ sarve 'pi lokās te durvṛttikliṣṭamānasāḥ [119b] /

satyadharmam pratikṣīpya bhaveyuḥ kāmācāriṇaḥ // 109
 tatas te duritā raktā dāruṇapātakeṣv api /
 pracaranto nirviśaṅkaṃ yāsyanti narake dhruvam // 110
 tatra te kṣutpipāsāgni*dāhitāḥ karmabhoginaḥ /
 tīvraduḥkhāhatātmāno bhrameyuḥ sarvanāraḥ // 111
 svasaṃtānān nipātyaivaṃ nāraḥ nirdayāśayaḥ
 parān eva samuddhṛtya kiṃ tvaṃ dharmam avāpnuyāḥ // 112
 bodhim api samāsādyā kṛtvāpi kiṃ jagaddhitam /
 saddharmaśrīyaśaḥsukhyaṃ labdhvāpi na praśobhitaḥ // 113
 iti vijñāya rājendraprajāḥ svaśaraṇāśritāḥ /
 svātmajā iva saṃpaśyan saṃpālayitum arhasi // 114
 yāvad yuvā samāśritya rājyāśrame prajāhite /
 dattvārthibhyo yathākāmaṃ bodhicaryāṃ caran vasa // 115
 yadā vṛddho viraktātmā kṛtvātmajaṃ narādhipaṃ /
 pravrajya saṃvaram dhṛtvācara saddharmam ādiśan // 116
 evaṃ te sarvadā bhadraṃ nirutpātaṃ bhaved api /
 pravrajya saṃvaram dhṛtvā saṃbodhim api prāpsyasi // 117
 tato 'rhaṃs trijagacchāstā saddharmam saṃprakāśayan /
 jagad bhadramayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuyāḥ // 118
 etat taduktam ākarṇya bodhisattvaḥ sa sanmatīḥ /
 prabodhitaḥ samālokya tasthau dhyānasamāhitaḥ // 119
 tataḥ sarvārthasiddho 'sau bodhisattvo mahāmatīḥ /
 udāyinaṃ sahāyaṃ taṃ saṃpaśyann evam abravīt // 120
 mano na rocate kāmaṃ jarārogakṣayāśrayam /
 yuṣmākaṃ *vacane moḥaṃ pure gantuṃ samutsahe // 121
 ity uktvā sa mahāsattvaḥ samutthāya tatas caran /
 aśvam āruhya saṃpaśyan puramārgam upācarat // 122 ≈ Bc 5.22
 tatra sarve sahāyās te drṣṭvā taṃ sahasā pathi /
 sametyābhyānugacchanto mahotsāhaiḥ samācaran // 123
 nṛpātmajaṃ tam āyātaṃ śrutvā draṣṭum upāgatāḥ /
 sarve pauraḥ narā nāryaḥ samapaśyan pramoditāḥ // 124
 taṃ samīksya varā kanyā natvāhaivaṃ kṛtāñjaliḥ /
 sabhāgyā nirvṛtā sā strī yasyā idṛg varāḥ patīḥ // 125 ≈ Bc 5.24
 nirvṛteti ravaṃ śrutvā sa sudhīro 'bhinoditaḥ /
 nirvṛtisukhasaṃprāptyai matiṃ dhṛtvālayaṃ yayau // 126 ≈ Bc 5.25

tatra taṃ janakaṃ dṛṣṭvā mantri[120a]janaiḥ saha sthitam /
 natvā pādābjayoḥ paśyann upāśrayat prasannadhīḥ // 127
 tato rājā niśamyaitat sarvavr̥ttaṃ janoditam /
 matvātmajamanobhāvaṃ sampaśyann evam abravīt // 128
 tāta vatsa sudhīr vijña kiṃ te mano *'bhilāṣati /
 vadasva tat puro me 'tra pradāsyāmi yad īpsitam // 129
 iti pitrā samādiṣṭaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /
 janakaṃ taṃ samālokyā sāñjalir evam abravīt // 130
 mṛtyuṃ hi jagatāṃ dṛṣṭvā sarvatra bhavacāriṇāṃ /
 tat pravrajyāvratam ādhāya nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 131
 tadanujñāṃ pradattvā me dharmasrīśadyaśo'nvitaḥ /
 sarvalokahitaṃ kurvan sukham bhuktvā samācara // 132
 yan mayā sādhitam puṇyaṃ tatṣaṣṭhāṃśaṃ bhavāṃl labhet /
 etatpuṇyavipākena bodhicittaṃ samāptavān // 133
 bodhisattvo mahābhijño bhadrāsṛisadguṇāśrayaḥ /
 sarvasattvahiṭhānaṃ bodhicaryāvratam caret // 134
 tataḥ saṃbodhisambhāraṃ pūrayitvā yathākramam /
 daśabhūmīśvaro nātho sarvadharmādhipo bhavet // 135
 tato māragaṇāñ jītvā parīsuddhatrimaṇḍalaḥ /
 arhan saṃbodhim āśadya sambuddhaḥ sugato bhavet // 136
 tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /
 jagad bhadrāmayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuyāt // 137
 iti matvā bhavān deva saddharmaṃ yadi vāñchati /
 śraddhānugrahacittena tadanujñāṃ dadātu me // 138
 iti putroditaṃ śrutvā janakaḥ sa nṛpādhipaḥ /
 tam ātmajaṃ samālokyā sāñjalir evam abravīt // 139
 pratisaṃhara tāta buddhim etāṃ
 na hi kālas tava dharmasaṃśrayasya
 vayasi prathame matau calāyāṃ
 bahudoṣāṃ pravahanti dharmacaryām // 140
 viṣayeṣu kutūhalendriyasya
 vratakhedeṣv asamarthaniścayasya /
 taruṇasya manaś calaty arañyād
 anabhijñāsya viśeṣato viveke // 141
 mama tu priyadharmā dharmakālas

≈ Bc 5.27

≈ Bc 5.28

= Bc 5.30

= Bc 5.31

tvayi lakṣmīm avasījya lakṣma[120b]bhūte
 sthīravikrama vikrameṇa dharmas
 tava hitvā tu guruṃ bhaved adharmaḥ // 142 = Bc 5.32
 tad imaṃ vyavasāyam utsrja tvam
 bhava tāvan nirato gr̥hasthadharme /
 puruṣasya vyaḥsukhāni bhuktvā
 ramaṇīyo hi tapovanapraveśaḥ // 143 = Bc 5.33
 iti vākyam **asau** niśamya rājñāḥ
 kalaviṅkasvara uttaram babhāṣe /
 yadi me pratibhūś caturṣu rājan
 bhavasi tvam na tapovanaṃ śrayiṣye // 144 = Bc 5.34
 na bhaven maraṇāya jīvitam me
 viharet svāsthyam idaṃ ca me na rogaḥ /
 na ca yauvanam ākṣipej jarā me
 na ca sampattim imāṃ hared vipattiḥ // 145 = Bc 5.35
 iti durlabham **abhiyācitāraṃ**
 tanayaṃ **vīkṣya jagāda** śākyarājāḥ /
 tyaja buddhim imāṃ atipravṛttām
 avahāsyo 'tīmanorathaḥ **kramaś** ca // 146 = Bc 5.36
 atha merugurur guruṃ babhāṣe
 yadi nāsti krama eṣa nāsmi vāryaḥ /
 śaraṇāj jvalanena dahyamānān
 na hi **niścikramitum** kṣamaṃ grahītum // 147 = Bc 5.37
 jagataś ca **yathā** dhruvo viyogo
na tu dharmāya varam svayaṃvivyogaḥ /
 avaśaṃ nanu viprayojayen mām
 akṛtasvārtham atṛptam eva mṛtyuḥ // 148 = Bc 5.38
 iti mṛtyuṃ bhave dṛṣtvā bhavasamratiniḥspṛhaḥ /
 pravrajya bodhim āsādyā nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 149
 iti tāta kṛpā te 'sti mayi sambodhisādhini /
 anumodya prasannātmā tadanujñāṃ pradehi me // 150
 iti putrārthitaṃ śrutvā janakaḥ sa nṛpādhipaḥ /
 snehaduḥkhāgnitaptātmā galadaśrumukho 'vadat // 151
 kasya mṛtyur bhave nāsti kaś ca rogair na pīdyate /
 ko na jirṇo bhavet kasya sampattiḥ sarvadā sthīrā // 152

avaśyaṃ bhāvino bhāvā bhavanti bhavacāriṇāṃ /
 iti niḥśaṅkito vīraḥ kṛtvā dharmam sukham caret /
 kiṃ tadanyat mahaddharmam icchan saṃsāraṇiḥsṛḥaḥ // 153
 pravrajya durgame 'raṇye duṣṭajantusamākule /
 vyādhatakarasaṃcāre daṃśamaśakasamkule /
 śītavātātapākṛāntaśarīras taptum icchasi // 154
 kiṃ cāpi [121a] te mahad duḥkham bhayaṃ cāpi kuto vada /
 yena tvam rājyam utsṛjya pravrajitum samicchasi // 155
 eko 'pi te ripur nāsti sarve nrpā vaśe tava /
 tat kasmāt te bhayaṃ tāta yad rājyaṃ tyaktum icchasi // 156
 saptaratnāni te santi bhadrāśrīsadguṇāny api /
 tat kuto jāyate duḥkham vada sarvanrpādhipa // 157
 iti pitroditam śrutvā bodhisattvaḥ sa sanmatih /
 janakam mantrilokāṃś ca sampāśyann evam abravīt // 158
 śṛṇu tāta yadarthe 'ham samtrasto bhavaniḥsṛḥaḥ /
 vihāya viṣayān rājyaṃ pravrajitum samutsahe // 159
 santi me vidviṣo vīrā mahānto 'hitakāriṇaḥ /
 ye sadevāsuraṃl lokān pramathnanti bhavāśritān // 160
 tebhyaḥ trilokaduṣṭebhyo bhayāni vividhāny aham /
 dṛṣṭvā bhavāśrayam tyaktvā nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 161
 yac caitair aribhir duṣṭaiḥ prakṣipto narakeṣv api /
 nānāvīdhāni duḥkhāni bhūñjamāno *'bhramam purā // 162
 tāni sarvāni duḥkhāni smṛtvādhunā muhur muhuḥ /
 samtrastas tadvimuktyartham sambodhiṃ prāptum utsahe // 163
 sarve lokā api kleśaiḥ parikliṣṭāśayā bhava /
 bhramanto duḥkhabhuñjānāḥ patitā narakeṣv api // 164
 tad ete ripavo duṣṭā mahānto 'hitakāriṇaḥ /
 pramathnanti jagat sarvam narake pātayanty api // 165
 etān duṣṭān jagacchatrūn sarve lokādhipā api /
 nirjetum ṛṣayaś cāpi na śaknuvanti sarvathā // 166
 harīndrabrahmarudrādyaḥ sarve lokādhipā api /
 kleśābhivaśagā mattāḥ pracaranti yathechchayā // 167
 sarve lokā api kleśavaśasthitāḥ pramattitāḥ /
 yathechchākāmabhuñjānāḥ pracaranty aśubhāśritāḥ // 168
 ete hi prabalā duṣṭā jagadunmattakāriṇāḥ /

nirjetuṃ naiva kenāpi śakyante bhavacāriṇā // 169
 buddhā eva mahābhijñā bhavacaryāvinirgatāḥ /
 etān duṣṭān vinirjitvā saṃprāptā bodhim utta[121b]mām // 170
 lokānām api nirjitya hy etān duṣṭān jagadarīn /
 saddharmaṃ samupādiśya prakurvantaḥ subhadrakam // 171
 tato dharmamayaṃ kṛtvā sarvatra bhuvaneṣv api /
 samāpya saugataṃ kāryaṃ sunirvṛtiṃ samāgatāḥ // 172
 aham apy evam ālokya kartuṃ dharmamayaṃ jagat /
 pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā samādhim prāptum utsahe // 173
 tad etān prabalān chatrūn hantuṃ saṃnirjitya yatnataḥ /
 rājyāśramaṃ parityajya pravrajituṃ samutsahe // 174
 pravrajyāsaṃvaram dhṛtvā nihatyaitān jagaddviṣaḥ /
 arhan saṃbodhim āsādy sambuddhapadam āpnuyām // 175
 tataḥ sarvatra lokānām nirjityaitān mahaddviṣaḥ /
 saddharmaṃ samupādiśya kariṣyāmi sumaṅgalam // 176
 jagad dharmamayaṃ kṛtvā saddharmaṃ saṃprakāśayan /
 samāpya saugataṃ kāryaṃ sunirvṛtiṃ samāpnuyām // 177
 etaddhetor ahaṃ tāta pravrajituṃ samutsahe /
 tadanujñāṃ bhavān mahyaṃ śraddhayā dātum arhati // 178
 iti putroditaṃ śrutvā janakaḥ sa mahīpatiḥ /
 galadaśrumukhaḥ paśyann ātmajam evam abravīt // 179
 yady evaṃ te samicchā hi tathāpi me vacaḥ śṛṇu /
 yāvad yuvā gṛhe dharmaṃ saṃcarasva prajā avan // 180
 janayitvātmajam rāje pratiṣṭhāpya vinīya ca /
 yadā vṛddho jarākrāntaḥ pravrajasva jagaddhite // 181
 evaṃ cet tvaṃ mahaddharmaṃ bhadrāśrīkīrtisaṃyutam /
 saukhyaṃ saṃbodhim āsādy saṃbuddhapadam āpnuyāḥ // 182
 tathā dharmam upādiśya kṛtvā dharmamayaṃ jagat /
 samāpya saugataṃ kāryaṃ sunirvṛtiṃ samāpnuyāḥ // 183
 iti matvā mahābhijñā tāvad rājyāśrame vasan /
 sarvasattvahiṃ kṛtvā saṃcarasva śubhe raman // 184
 yadi snehaṃ mayi tyaktvā rājyaṃ jñātīṃś ca bāndhavān /
 nirapekṣaḥ svajīve 'pi pravrajase jagaddhite // 185
 tadā tvatsnehaduḥkhāgnipratapto 'haṃ pramohitaḥ /
 sarājyaṃ deham utsṛjya vrajeyaṃ maraṇaṃ dhruvam // 186

gautamī sāpi mātā ca snehaduḥkhāgnitā[122a]pitā /
 tvām eva manasā smṛtvā yāyād yamālayaṃ dhruvam // 187
 yaśodharāpi te bhāryā snehaduḥkhāgnitāpitā /
 tvadguṇānusr̥tiṃ dhṛtvā tanuṃ tyaktvā yame vrajet // 188
 anyā api ca sarvās tāḥ priyās te virahārditāḥ /
 kleśāgnitaptaduḥkhārtā yāyur nūnaṃ yamālayam // 189
 arthino 'pi prajālokā api sarve nirāśitāḥ /
 tvadguṇānusr̥tiṃ dhṛtvā bhrameyur vigatoddhavāḥ // 190
 etatpātakajātāni duḥkhāni te bhavāntare /
 bhoktavyāni na naśyeyur gaccheyuḥ praśamaṃ katham // 191
 tathā kiṃ pravrajitvāpi kṛtvāpi ca jagaddhitam /
 kiṃ bodhim adhigamyāpi kevalaṃ duḥkhasādhanam // 192
 iti vijñāya vijña tvam tāvan mā pravrajyotsukaḥ /
 yadā vṛddhas tadā gatvā pravrajyāsaṃvaram caran // 193
 jitvā kleśān mahāśatrūn bodhiṃ prāpya jagaddhite /
 saddharmaṃ samupādiśya saṃcarasva samantataḥ /194
 tathā tvam pariśuddhātmā sarvadharmādhipo jinaḥ /
 jagad dharmamayaṃ kṛtvā *sunirvṛtiṃ samāpnuyāḥ // 195
 vayam api tathā sarve tvatsaddharmaviśodhitāḥ /
 sambodhijñānam āsādyā yāsyāmahe sunirvṛtim // 196
 iti matvā mahāsattva kṛpāsmāsu tavāsti cet /
 tāvad rājyāśrame sthitvā bodhicaryāvratam cara // 197
 iti pitroditam śrutvā bodhisattvo mahāmatiḥ /
 dhyātvā kṣaṇaṃ samālokya janakam evam abravīt // 198
 satyam evaṃ samādiṣṭam hitārthaṃ me tvayā pitaḥ /
 śṛṇu me 'pi hitam vākyaṃ abhiprāyaṃ yad ucyate // 199
 mṛtyur hi balavāms tāta kasya vaśe samāsthitaḥ /
 aviśvāsyo jagaloke sarvahantātinirdayaḥ // 200
 sarveṣāṃ api jantūnāṃ sarvataḥ samupāśritaḥ /
 kenāpi śakyate jetaṃ naiva hi tribhaveṣv api // 201
 akasmāt sa mahāvīryaḥ prāgatya samupāśritaḥ /
 puratas te gṛhītvā māṃ hariṣyati yamājñayā // 202
 tadā kiṃ te kariṣyāmi tvam mayi kiṃ kariṣyasi /
 [122b] jñātibandhviṣṭabhr̥tyāś ca kiṃ kariṣyanti te mama // 203
 vṛddho jīrṇendriyo rogi bhogye 'pi viratādarah /

tadā jagaddhitam kartum prācareyam aham katham // 204
 vipattayo hi sarveṣāṃ bhoktavyā api daivajāḥ /
 tadāham kiṃ kariṣyāmi yadā jāto vipan mama // 205
 kadācit kupitā bhūpā sarve 'pi me virodhitāḥ /
 hatvā jīvaṃ hariṣyanti sarājyāḥ sarvasampadaḥ // 206
 bandhane vā pratiṣṭhāpya mām sajnātīṣṭabāndhavam /
 cirān niṣkāsayitvā vā prerayīṣyanti jaṅgale // 207
 tadāham kiṃ kariṣyāmi nighnito durbalendriyaḥ /
 svātmānam api samdhātum na śaknuyām adhīritāḥ // 208
 katham cittam samādhāya pravrajya samvaram caran /
 duṣṭān māragaṇān jītvā sambodhiṃ samavāpnuyām // 209
 vinā sambodhijñānena saddharmaṃ ka upādiṣet /
 vinā dharmopadeśena katham kuryāj jagaddhitam // 210
 iti matvā mahārāja bodhiṃ prāptum jagaddhite /
 māracaryāṃ samutsṛjya pravrajitum samutsahe // 211
 yadi sneho 'sti te tāta mayi saddharmasādhini /
 tadanujñāṃ pradattvā me yaśaḥśrīdharmam āpnuhi // 212
 iti putroditam śrutvā pitā prabodhito 'pi saḥ /
 galadaśrumukhaḥ paśyaṃs tasthau snehaviṣārditāḥ // 213
 tataḥ sarvārthasiddho 'sau bodhisattvaḥ samutthitāḥ /
 gatvā svālayam āśrītya tasthau dhyānasamāhitāḥ // 214
 so 'pi śuddhodano rājā mantribhṛtyajanānvitāḥ /
 gatvā svālayam āśrītya tasthau tad eva cintayan // 215
 iti *tasya {or: mama} purākṛtyaṃ sāmpratam tat mayocyate /
 tvam api ca mahāsattva śrutvaitad anumodatu // 216
 ye 'pīdam śraddhayā śrutvā pravrajyāgamanārthanam /
 anumodanti te sarve bhavyeṣuḥ śrīguṇāśrayāḥ // 217
 iti śāstrā samākhyātam nīśamya sa mahāmatīḥ /
 tathety abhyanumoditvā prābhyanandat sasabhyakaḥ // 218

// iti [123a] pravrajyābhigamanaprārthanābhisambodhano nāmāṣṭādaśo 'dhyāyāḥ //

Apparatus criticus of the chapter 18

1a mahābhijñā] corr.: mahābhijñāḥ A B.

- 1b upagupto] A(post corr. marg.) A: śākyasiṃho A(ante corr.).
- 1c aśokaṃ] A(post corr.) B: ānandaṃ A(ante corr.) || patiṃ] A(post corr.) B: yatiṃ A(ante corr.).
- 1d samāmantryaivam] corr.: samāmantryevam A: samāmanty evam B.
- 6c śaśpa°] A(post corr.) B(post corr.): śaśpa A B.
- 7a tatrānekān] A: tatrānekon B.
- 7b jantūṃs tān āturān] A(post corr.): jantūṃs tām ātun A(ante corr.): jantusthām āturān B.
- 10c sarvāṃs] corr.: sarvās A B.
- 12a prabhava°] corr.: prabhava A B.
- 12b niścalāśayaḥ] A(post corr. marg.) B: niścalāyaḥ A(ante corr.).
- 13a prāpya] A: prāpye B.
- 15b vinindeya] A: viniṃdāyāyu A(marg.; seconda manu!): vigniṃdeya B.
- 23a vasaṃś] A(post corr.): nivasamś A(ante corr.) B.
- 23d vicaro] A(ante corr.): vicarau A(post corr.): vicarai B.
- 31 note] pāda ab are written in the margin of A (propria manu!)
- 34b nārake] corr.: nārakeḥ A B.
- 34d sarvadā bhava] sic A B.
- 41 note] pāda cd are written in the margin of A, but are missing in B.
- 41d °ndriy*āśrayāḥ] ex conī (cf. 59b): °ndriyāśayāḥ A.
- 42a atraivaṃ] corr.: atrevaṃ A: etraivaṃ B.
- 42b °mānasaḥ] A(post corr. marg.) B: °mānaḥ A(ante corr.).
- 45d ghoṣataṃ] A: pauṣataṃ B.
- 47a vinirjitya A(post corr. marg.) B: virjitya A(ante corr.).
- 52a bodhidrume] A: bodhidrumataṃ B.
- 52d saṃbuddhapadam] A: saṃbodhipadam B.
- 55b gacchāni] A: gacchāmi B.
- 59d sambuddhapadam] A(post corr. marg.): sambuddham A(ante corr.).
- 85c *putras] ex conī: putra A B.
- 100b mahāsattva] ≙ mahāsatva B: mahāsatve A.
- 100d prācared vṛṣaṃ] A: prācared dhṛṣaṃ B.
- 104b yāte 'vibodhitāḥ] corr.: yāte vibodhitāḥ A: yātavibodhitāḥ B.
- 106 note] pāda ab are written in the margin of A (propria manu!).
- 106a mānasaḥ] corr.: mānasaḥ A.
- 107 note] verses 107 and 108 are written in the margin of A (propria manu!).
- 111a tatra te] A(post corr. marg.) B: tatra A(ante corr.).
- 111b *dāhitāḥ] ex conī: dahitāḥ A B

112 note] two verses 112 and 113 are written in the margin of A (propria manu!).

119c prabodhitāḥ] corr.: prabodhitas A B.

129b *'bhilāṣati] ex con: (m.c. of 'bhilaṣati?): bhilāṣatā A B.

131d nirvṛtiḥ] B: nirvṛtim A.

138c cittena] A(post corr. marg.): citte A(ante corr.): cittera B.

140d bahudoṣāḥ pravahanti] corr.: bahudoṣāḥ pravahanti] A(post corr. marg.): bahudoṣāḥ va-
hanti A(ante corr.): bahudoṣā pravahanti B. (Cf. Bc 5.30 bahudoṣāḥ hi vahanti) || °caryām] corr.:
°caryā A B. (Cf. Bc 5.30 °caryām)

140 note] the stanzas 140 to 148 are identical to Bc 5.30 to 5.38.

144a vākyaḥ asau niśamya] A(post corr. marg.) B: vākya[śa]mya A(ante corr.). (Cf. Bc 5.34
vākyaḥ idaṃ niśamya)

146a abhiyācitāraḥ] A: bhiyācitāraḥ B. (Cf. Bc 5.36: artham ūcivāṃṣaḥ)

146b vīkṣya jagāda] A B. (Cf. Bc 5.36 vākyaḥ uvāca)

146d °rathaḥ kramaś ca] A B. (Bc 5.36 °ratho 'kramaś ca)

147c jvalanena] B: jvālanena A. (Cf. Bc 5.37 jvalanena)

147d niścakramitum] A: niścakramitraḥ B. (Cf. Bc 5.37 niścikramiṣuḥ)

148a yathā] A B (Cf. Bc 5.38 yadā)

148b na tu] A B. (Cf. Bc 5.38 nanu) || dharmāya] A(post corr. marg.): dharmā A(ante corr.) B.

154e °śarīras] corr.: °śarīlas A B.

161a trilokaduṣṭebhyo] corr.: trilokaduṣṭebhye A B.

162d *'bhramaḥ] ex con: 'bhramat A B.

170c vinirjītvā] B: vinijītvā A.

174cd parityajya pra°] A(post corr. marg.) B: paritya pra° A(ante corr.).

176d sumaṅgalaḥ] A: sumagālaḥ B.

187ab mātā ca sneha°] A(post corr. marg.) B: mātā sneha° A(ante corr.).

189a sarvās tāḥ] corr.: sarvās te A(ante corr.): sarvās teḥ A(post corr.) B.

195d *sunirvṛtiḥ] ex con: sunirvṛtaḥ A.

196b tvatsaddharma°] A(post corr. marg.): tvaddharma° A(ante corr.).

199b hitārthaḥ me tvayā] A(post corr. marg.): hitārthaḥ tvayā A(ante corr.): hitārthaḥ svayā B.

200a balavāṃs tāta] corr.: balavān tāta A B.

203cd °bhṛtyāś ca kiṃ] A(post corr. marg.) B: bhṛ kiṃ A(ante corr.).

205a vipattayo] A(post corr. marg.) B: vipatta[m]o A(ante corr.).

210c dharmopadeśena] A(post corr. int. lin.) B: dharmopadena A(ante corr.).

216a *tasya] ex con: A(ante corr.): mama A(post corr.).

Colophon: iti pravrajyā°] A(ante corr.): iti śrīlālitavistare pravrajyā° A(post corr. marg.) B.

3.2 TJAM 第18章の和訳 (全訳)

『出家に進み行くことを請い願ひ、理解せしめる』という第18章

かの阿羅漢たる出家修行者たちの王、大通慧者ウパグプタは (upagupto) {or: 釈迦族の獅子は (śākyasiṃho)}、かの王アショーカを (aśokaṃ taṃ patim) {or: かの出家アーナンダを (ānandaṃ taṃ yatim)} 見つめながら呼びかけて、次のように語りました。— [1]

「大士よ、かのサルヴァールタシツダの、悟りのための誓行の達成を私は語りましょう。集中してそれをお聞きなさい。[2]

それはかくの如くです。— 大士 (菩薩) は熱心に求められているにもかかわらず、性愛に愛着した美しい女たちと共に楽しむことを望みませんでした。[3]

感官の対象に愛著しない彼は、春にもかかわらず、森のアーシュラマ (隠棲地) で孤独に樹の根元に坐って瞑想しながら居ることを欲しました。[4]

その後、好きな仲間・親友・朋友たちを伴って、馬のカンタカに乗り、景色を見んとして楽しげに森を遊歴しました。[5]

その道で、若草やダルバ草や新しい芽葉が生じたすべての大地が至るところ耕されているのを見ながら、彼はゆっくりと逍遙しました。[6]

無数の蛆虫や昆虫、それらの苦しむ生き物たちを道で見て、憐れみの思いをいさぐ彼は、まるで自分の親族が苦しんでいるかのように悲しみました。[7]

また身体が風や熱い日差しに打たれて耕作している人々、重荷を運んでいる駄獣たちを眺めて、彼はひどく同情に打たれて、動揺しました。[8]

その後彼は馬から降りて、ゆっくり地面を歩き回りました。「あらゆる者には老いと病と死があるのだ」と思考しながら。[9]

誰もいない場所で過ごしたいと願って、すべてのその随行した者たちを遠ざけ、あたりを見渡ししながら、自ら一隅に行き、[10] 木蔭に身を寄せ、草の座に坐って、あらゆる仏を憶念しながら、瞑想に集中して過ごしました。[11]

彼は生類の誕生と死を思惟しながら、心を不動にして、無漏なる、初禪の善き安樂を獲得しました。[12]

その後、孤独な精神統一から生じる、喜び (喜) と安樂 (樂) を得てから、あらゆる生類の行処 (あり方) を観察し、自ら次の様に深思しました。[13]

「これらの人々は老病死の法から解放されておらず、[若さの] 驕りによって盲目となって、死んだり病気になったり老いている他人を軽侮している。[14]

自分自身もそのようなものである私が、もし同様に他人を軽侮するならば、そのことは [真実を] 認識する私にとってふさわしいことでなく、適切なことではない。」[15]

このように生類の中の老いた者・病んだ者・死んだ者たちを観察した時、彼から、力・若さ・生命についての自己に関する驕慢が消え去りました。[16]

彼は笑うことも、悲しみに沈むこともなく、疑いをもつに至ることもなく、怠惰や眠気に陥ることもなく、愛著も軽蔑もしませんでした。[17]

このようにして、かの善慧者（菩薩）の精神は、塵（煩惱）を離れて清らかになりました。すると他の人には見えない一人の比丘が近づいてきました。[18]

サルヴァールタシッダはその人を見て丁重に尋ねました。「あなたはどなたですか。何処から、何のためにいらっしゃいましたか。どうかそれを私におっしゃってください。」[19]

そのように彼が尋ねるのを聞いて、出家修行者たちの最勝者（雄牛）のようなその比丘は前に立ち、かの王子をじっと見て、次の様に答えました。[20]

「私は出家した者、比丘・沙門であり、善逝に属する（仏教の）出家修行者です。老病死を怖れ、解脱せんとして、悟りのために行をなす者です。[21]

有滅の法をもつこの世界において仏の位を私は求めています。身内にも他人にも平等な善き心において無煩惱となり、輪廻的生存を欲しません。[22]

王子よ、[この私は] 祠や寺院、樹の根元、山や森の中に住みながら、所有物を捨て、ヨーガ行者として、食物を乞食しつつ遊行する者なのです。」[23]

偉大な通智者たる彼はそう言うと、鳥の如く上に昇り、燃え輝く火のように虚空を通って神々の住まいに去ってゆきました。[24]

その人がそのように空へ去ったのを見て、かの王子は驚愕し、その[行者の] 誓戒を得るために出家することを欲しました。[25]

その後、かの賢き、清浄な心をもち、感官を抑制した菩薩は[都に] 引き返すと、其処の園林において瞑想しながら、心集中して過ごしました。[26]

其処で彼ら友人たちは皆、彼が樹の根元に坐っているのを見ると、ただちに近づいてとり囲み、近侍しました。[27]

彼らが皆、近侍するのを見て、欲望の行為を嫌悪する心をもつかの王子は溜息をついて、次の様に語りました。[28]

「ああ、欲望をもつ者たちは、生老病死を見てもなお、自己の欲するがままに欲望の享受を味わい、怖れなく楽しんでます。[29]

これらの人のすべては、老い、病気になり、損なわれた感官を有し、死に達しては、更にまた輪廻的生存の道において再生を得ているのです。[30]

自分が欲する行いをし続ける者たち、成功と快楽を達成した者たちは、自らの運命の果の味わうべきものを味わいながら、輪廻的生存をずっと彷徨い続けることでしょう。[31]

天界に行ったなら、神々として、不死の甘露を味わいながら遊び、性愛の享楽に愛著し、歡喜し、行動するでしょう。[32]

その後、時が来て、自分の運命に飲んでいた者たちは〔天界から〕死没して、或る者たちは死すべき生き物の世界に、またアスラ族に生まれます。[33]

或る者たちは畜生に、或る者たちは餓鬼や地獄において、自分の業を味わいながら、輪廻的生存の中を常に彷徨います。[34]

脱出の路を見つけられないまま、盲人の如く森の中を彷徨う者たちは、様々な苦を味わいながら、迷乱に陥ります。[35]

煩惱の苦しみに焼かれながら、寄る辺とすべきものをもたず、導師をもたず、正法ではない教えに執着し、そのようにして輪廻的生存をずっと彷徨い続けるでしょう。[36]

しかし或る時、善逝たち（諸仏）を見て、喜心をもって礼拝し稽首するなら、その時彼らは心が無垢となり、法を望む心を得ることでしょう。[37]

その後、彼らは正法を欲して、最高の法を探し求めるでしょう。彼らは善逝（仏）の法を聞いて、菩提心を得ることでしょう。[38]

その後、彼らは感官を制御した菩薩・大士となり、出家の禁戒を堅持しつつ、生類を利益するため活動するでしょう。[39]

その後、彼らは次第に菩提のための資糧を満たしながら、阿羅漢の位に達し、マール（魔）の群に勝利し、[40] 三種の菩提に達して、仏の住まいを得ることでしょう。煩惱が消え、浄らかな心となり、清浄な感官と身体を有するでしょう。[41]

そう私はここで考え、このように瞑想しながら、悟りに心を向けて、三宝への憶念を堅持しながら居ることを私は常に欲しているのです。[42]

この私の言葉を聞いて、朋友である君たちすべてが、幸福な美の輝きある善き徳性を、安らかな幸せを、与えたり獲得したりすることをもし欲するならば、[43] それなら私の言葉を聞いて帰って、それぞれの住まいに居て、常に乞う者たちに布施を与え、心集中して行為しなさい。（布施波羅蜜）[44]

清浄なる戒律の行いをなし、悟りに心を定め、三宝への奉事をなして、高く鳴り響く誓戒を行いなさい。（戒波羅蜜）[45]

その後、忍辱の誓戒を堅持して、身内と他者と自分の益に努力し、悟りを成就する教えを堅持し、常に実践しなさい。（忍辱・精進波羅蜜）[46]

その後、煩惱を克服し、悪しきマールの群にも勝ち、三昧に心を定め置き、禪定と禁戒を行いなさい。（禪定波羅蜜）[47]

その後、智慧（般若）の海を渡って、如意宝珠の如き最高の悟りの知に達して、仏の位をあなた方は得なさい。（智慧波羅蜜）[48]

このように衆生の益のため、仏の位を得ることをもし欲するなら、あなた方は皆がそれぞれの住まいに居て、菩提のための禁戒を行いなさい。[49]

私も世の生類に正法を明らかに説き示すため、悟りの知に達して、仏の位を得るでしょう。[50]

それ故今や私はガヤー・シールシャ（象頭山）という勝れた山に行き、甚だなしがたい苦行を行って、すべての苦行者を凌駕し、[51] その後菩提樹のもとに行って、悪きマーラの群に打ち勝ち、禅定をなして悟りに達し、仏の位を私は得ます。[52]

その後あらゆる生き物たちに正法を教示しながら、私は菩提への道に安立せしめ、生類に浄行を行わせます。[53]

このようにして諸世界の一切処において〔生類を〕法から成る者に変えて、仏のなすべき仕事を達成し、善き寂滅の至福（涅槃）を私は得るでしょう。[54]

そのために私は今ガヤー・シールシャ山へと行きたいのです。あなた方もそれぞれの住まいに戻り、菩提のための禁戒を行じて下さい。[55]

私が悟りを得たら、その時、正法を教示しながら、ここに戻って来て、あなた方に禁戒を教えましょう。[56]

あなた方は皆集まり来て、私の教えに依り、出家の禁戒を堅持しながら、生類の益のために行動してください。[57]

私と共に行動しながら、至る所で幸せをもたらし、正法を教えながら、生類に浄行を行わせてください。[58]

そうすれば、無垢の心もち、清浄なる感官と身体をもつ阿羅漢として、あなた方は悟りに達し、仏の位を得るでしょう。[59]

そして法を明らかに示して、生類を法から成るものに変え、仏のなすべき仕事を完了して、あなた方は善き寂滅の至福を得ることでしょう。[60]

私によって説かれたこの真実を聞いて、あなた方は皆よく理解し、それぞれの住まいに居ながら、常に徳行をなさって下さい。」[61]

このように彼が語ったのを聞いて、プローヒタの息子たる婆羅門であるウダーインという名の者は、甚だ〔決意が〕堅固な彼を見つめながら、次のように語りました。[62]

「わが友よ、益することを私が言いますので、その親友の言葉を聞きなさい。私はあなたにとって最も親愛なる友人であり、親友、常に随行してきた友ですから。[63]

友たる者・親友が〔あなたという〕友を益するための言葉を言わないで、もし避けるべき行為をさせてしまうなら、その時その者はどうして親友・仲の良い友でありえましょうか。[64]

また親友・友が語る有益な言葉を聞かない者、聞いても尊重しない者であれば、その者もどうして親友・友でありえましょうか。[65]

そういうわけで、善慧者よ、私はあなたに有益な言葉を述べたいのです。もしあなたがわが親友・友であるなら、どうかそれをあなたはお聞きください。[66]

あらゆる王たちの王であるあなたの御父上は、年老いた時、所有財を捨てて、森のアーシュラマ（隠棲地）に身を落ち着けて、聖者の行をなさることでしょう。[67]

そしてあなたの御父上である国王にとっての唯一の実子・息子があなたですから、この場合、いかなる王・人民の守護者が臣民をずっと護ることができるのでしょうか。[68]

〔あなたは〕息子が生まれるまでの間は、王位にある人生期に住しつつ、世俗法を受け容れて、自分の家の誓行を行いなさい。[69]

もしあなたに息子が生まれて、サンスカーラ（誕生の儀式など）によって清められ、あらゆる学問の徳性を知る者、よく訓育された者、副王となったなら、[70] その時は、輝かしい徳性の蔵であるその者に作法通りに灌頂をなし、王座に立たせ、王・君主にしてやり、[71] 〔その後〕悟りの知を得るためにすべての所有財を捨てて、出家の禁戒を堅持し、生類を益するために行動しなさい。[72]

もしそのようにするなら、あなたには輝かしい真の悦楽を具えた幸があるでしょう。また勝利の輝かしい名声を伴った、家の法の持続もあります。[73]

そうすれば、あなたは世の生類に正法を説き明かして、生類を法から成るものに変えた後、善き寂滅の至福（涅槃）を得ることでしょう。[74]

〔過去の〕あらゆる菩薩・大士たる王たちも、自分の息子を自分の王座に立たせて、王国の王・君主にしてから、[75] 年老いて、王の地位にある人生期を捨てて、森のアーシュラマに住し、聖者の行の禁戒を堅持しながら、善き寂滅の至福に至ったのです。[76]

このように、過去や現在の仏たちすべても、聡明な息子を作り、王座に立たせ、あらゆる人々の世俗法の保持のためよく教導してから、[77] 年老いた時、家住の人生期を捨てて、森のアーシュラマに住し、出家の禁戒を堅持しつつ、生類の益のために行動しながら、[78] 〔やがて〕煩惱を滅し、心に汚れがなく、三輪清浄となり、悪しきマーラの群に打ち勝って、菩提を得て、牟尼の王になり、[79] 正法を教示して、生類を法から成るものに変えて、三昧に心を定め置き、彼らは寂滅の至福に至った、あるいは〔今後〕至ることでしょう。[80]

同様に、未来に仏となる者たちも皆、王権の保持のために息子をもうけて、灌頂し、王座に立たせて、教導し、[81] 年老いた時、王としての人生期を捨てて、森のアーシュラマに住し、出家の禁戒を堅持しながら、三昧に心を定め置き、[82] 悪しきマーラの群に勝利して、煩惱を滅し、無垢の感官を有し、悟りの知に達して、仏となることでしょう。[83]

彼らもあらゆる場所で生類の益のため正法を教示し、生類を法から成るものに変えて、善き寂滅の至福に至ることでしょう。[84]

王子よ、輪廻の法の成就をこのように認識なさって、息子が出来るまでは王としての人生期に住し、[85] あらゆる人々を益する目的をもって、世俗法を行わしめ、お妃に息子を産ませて、大事にお守り下さい。[86]

その後、少年たるその息子を徐々に教導して、あらゆる学問を学んでから、世俗[法]において行動させ、[87] その後、副王に灌頂して、王座に立たせ、あらゆる法の支配者にしてやり、民衆の益のために活動させ、[88] その後、ご自身が老いられた時、王位を捨てて、輪廻を厭い、出家の善き誓戒を堅持して、生類の益のため行動なさって下さい。[89]

そうすれば、清らかな心をもつあなたはマーラの群にすら打ち勝ち、三種菩提を達成して、一切智・阿羅漢・ジナとなることでしょう。[90]

その後、あらゆる場所で人々に正法を教示して、生類を法から成るものに変えてから、善き寂滅の至福を得ることでしょう。[91]

このようにしてあなたには常に幸があり、また家系の継続があるでしょう。この世で法の名声と快樂があり、あの世で仏の住まいがあります。[92]

更にまた、あなたのこれらの愛すべき美しい妻たちは法を行っている者たちです。よき戒徳を装飾品として、善良で、教令や学問に通達しています。[93]

どうしてあなたは真正の法に随行する女たちを捨てようとするのですか。愛らしく、礼儀正しく、柔和な話し方をする、美しく若い女たちです。[94]

もしあなたに捨てられたなら、彼女らは自分を失って苦しみ、皆煩惱の火に焼かれて、愛の戯れを楽しむ女として振舞うことでしょう。[95]

或る女たちはあなたの名前の憶念を持したまま、ヤマ（死王）の住まいに赴くでしょう。また瞑想して、あなただけを観ながら、感官を不動にして過ごすことでしょう。[96]

或る女たちは狂乱者のように彷徨い歩き、情欲に分別を失うでしょう。或る女たちは毒などの不健康なものを食べて心を狂わせ、あなたを憶念しながら命を捨てて、地獄にも墮ちることでしょう。[97]

或る女は紐で首をくくって自殺し、あるいは深い水に、あるいは大きな燃え盛る火に落ち、[98] または崖から身投げし、或る女は食物も水も摂らないで、あなたを憶念しながら自ら命を捨てるでしょう。[99]

その時、大士よ、出家して諸誓戒の成就によって悟りにすら達したとしても、あなたがいけない所で[女たちの誰が]徳行をなすでしょうか。[100]

女たちを破滅させて、汚れた心をもつあなたはどのように悟りを得られるでしょうか。なぜなら仏・阿羅漢は清らかな心をもつ者、法王は汚れなき者ですから。[101]

またあなたの母であるガウタミーが捨てられる時、彼女はあなたへの愛情の苦しみの火に焼かれ、苦悩する心をおもちになることでしょう。[102]

幸福な美の輝きある善き徳性を具えたあなたの姿を思い出しながら、沈思し、[あなたの] 名前を叫びながら、心堅固でない女として、命を捨てるかもしれません。

[103]

あなたが去った時、覚知を得ていないあらゆる人々や生き物たちは、煩惱・驕り・我執に盲目になって、罪深い行為すら行うでしょう。[104]

その時、その罪惡の行いによって広範囲の鬭争が起こるでしょう。その時あらゆる者たちが宥めがたい不満をもって十不善[業道]を行うことでしょう。[105]

墮落した心性をもち、悪しき振舞いをなし、悪を好む心をもつ者たちは、狂酔者のように制御不能となり、好き勝手に行動するでしょう。[106]

この王国が無王になったのを見て、あらゆる彼ら敵[王]たちが進撃して、民を殺し、好きなように略奪するでしょう。[107]

その時、いかなる王があなたの如く民衆を護れるのでしょうか。鬭争の拡がりという悪い出来事を伴った飢饉も拡がることでしょう。[108]

その後犯罪に苦しめられた心で、すべての人々が真正の法を捨離して、欲望に従って行動する者となるでしょう。[109]

そして彼ら悪行者たちは、残忍な犯罪すら愛好し、怖れをもたずに行動し、疑いなく地獄に墮ちるでしょう。[110]

その[地獄]で彼ら、業を味わう者たちは飢えと渇きの火に焼かれ、激しい苦痛に打ちのめされた心で、すべての地獄を徘徊することでしょう。[111]

自分の一族の子たちがそのように地獄に墮ちる時に、無慈悲な心をもつあなたはどうして他人だけを救済しながら、法を得ることが出来るのでしょうか。[112]

悟りにすら達しようと、いかなる生類の益をなそうとも、正法の光輝と名声と安樂を得ても、[その時あなたは]清らかな者ではないのです。[113]

このように認識して、[王子]ご自身を依り処としている王の国民たちを、ご自身から生まれた子供たちの如く見なして、お護り下さい。[114]

どうか若い間は、国民たちのために王の位にある人生期に住し、乞い求める者たちに好きなだけ布施を行い、菩提行をしながら、お暮らしになって下さい。[115]

年を取ったら、離欲の心で、息子を王にして後、出家して禁戒を堅持し、正法をお教えになりながら、行をなさって下さい。[116]

このようにすれば、あなたには常にめでたい幸せがあり、息災であられるでしょう。出家して禁戒を堅持し、悟りをも得られるでしょう。[117]

その後、阿羅漢・三界の師として正法を教示しつつ、生類を幸から成るものに変え、善き寂滅の至福を得ることでしょう。」[118]

[以上の] この彼が語った言葉を聞いて、善慧者であるかの菩薩はよく理解して、[彼を] 見つめながら、深思に集中したままでいました。[119]

その後、大慧者である菩薩は随行者であるウダーインを見つめて、こう言いました。

[120]

「[わが] 心は愛欲（カーマ）を、老いと病によって滅びる身体を、あなた方の言葉にある愚かな迷いを、好みません。私は都城に戻ることを欲します。」[121]

こう言って、かの大士は立ち上がり、それから歩いて、馬に乗ると、都城の路を見ながら進み行きました。[122]

其処でかのすべての随行者たちもその彼を見て、ただちに路上に集まり、追いながら、大きな喜びの興奮を伴って進みました。[123]

かの王子がやって来ると聞いて、見るために集まって来たすべての都民、男や女たちは、見ながら歓喜しました。[124]

彼を眺めて、一人の勝れた娘が、お辞儀し、合掌して次のように言いました。「あのような勝れた方を夫としてもつ女は、幸運に恵まれた「至福のひと」（nirvṛta）です」[125]

「至福のひと」という言葉を聞いて、とても賢い彼は励ましを受け取り、寂滅（nirvṛti）の幸せに達することに思いを定めながら、宮殿へと行きました。[126]

其処で大臣たちと共にいるかの父王を見て、彼はその蓮の両足を拝みつつ、澄んだ喜びの心でそばに寄りました。[127]

すると王は、部下が報告したそのすべての出来事を聞いて、息子の心の状態を考えながら、見つめて次の様に言いました。[128]

「親しい、いとしい子よ、とても賢い、よく分別する者よ。お前の心が欲するものは何か。それを此処で私の前で語りなさい、欲するそれを私は与えよう。」[129]

このように父が説かれたのを聞いて、かの菩薩はその父を見つめて、合掌し、次の様に述べました。[130]

「あらゆる所で輪廻的生存の中をさまよう生き物たちの死を見つめ、かの出家の誓戒を受持し、寂滅の至福を得たいと私は願っています。[131]

その御許可を私にお与え下さり、[お父上は] 法の輝きと善き名声を具えた者として、あらゆる人々に益をなしつつ、幸せを味わい、活動なさってください。[132]

[出家した] 私によって達成された福德の、その六分の一をあなたが得ることでしょう。その福德の異熟によって、菩提心が得られます。[133]

そして菩薩・大通慧者として、めでたい輝きのある善き徳性の依処として、あらゆる有情に益を生じさせる、菩提行の誓戒を実践なさってください。[134]

その後次第に悟りの資糧を満たし、どうか十地の王、守護主、一切法王となられて下さい。[135]

その後どうかマーラの群に勝利して、三輪清浄の者として悟りに達し、阿羅漢・仏・善逝となられますように。[136]

そののち、一切処で人々に正法を説き示しながら、生類を幸せから成るものに変えた後、善き寂滅の至福を得られますように。[137]

このようにお考えになられて、閣下、あなたがもし正法を願うのであれば、信と饒益のお心により、私に〔出家の〕許可をお与え下さい。〕[138]

このように息子が語ったのを聞いて、父であるかの王中の王はその息子を見つめ、合掌してこの様に言いました。[139]

(以下、ネパールに伝承されていた馬鳴の *Buddhacarita* 第5章テキストからの逐字的な借用が TJAM 第140～148詩節にある。これらの馬鳴の詩節については既に諸学者による訳があるので、TJAM でごく僅かな表現の違いがあっても、それらの詩節の翻訳をここでは省きたい。)

Buddhacarita 5.30 からの借用詩節	[140]
Buddhacarita 5.31 からの借用詩節	[141]
Buddhacarita 5.32 からの借用詩節	[142]
Buddhacarita 5.33 からの借用詩節	[143]
Buddhacarita 5.34 からの借用詩節	[144]
Buddhacarita 5.35 からの借用詩節	[145]
Buddhacarita 5.36 からの借用詩節	[146]
Buddhacarita 5.37 からの借用詩節	[147]
Buddhacarita 5.38 からの借用詩節	[148]
…… 以上の詩節の翻訳は省略 ……	

「このように輪廻的生存における死を見て、輪廻的生存における快樂の欲望も失せて、出家して悟りに達し、寂滅の至福を得たいと私は願っています。[149]

そこでどうか父上よ、私に憐れみをお持ちになり、悟りに達する私を随喜なさせて、仁慈のお心で、そのこと（出家）への許可を私にお与え下さい。〕[150]

このように息子が求めたのを聞いて、父であるかの王中の王は、愛情の苦しみの火に心が焼かれ、涙を滴らせた顔で答えました。[151]

「誰の輪廻的生存において死が存在しないのか。誰が病に苦しめられないだろうか。誰が老いないだろうか。誰の成功繁栄が永久に続くだろうか。[152]

輪廻的生存をさまよう、生存を有する者たちには必然的に様々な生存の状態がある。そのことに恐れをいだかぬ勇者は、法をなしながら、楽しげに振舞うだろう。どうしてそれとは異なる偉大な法を求め、輪廻を嫌悪するのか。[153]

出家すれば、悪い生き物たちが沢山いる、獵師や盜賊がうろつき、虻や蚋だらけの、人が近づき難い森の中で冷風と熱暑が身体を襲うが、お前は苦しむことを願うのか。[154]

また更に、お前に大きな苦しみがあり、恐怖があるだろうことも言うまでも無い。そのためお前は王権を捨て、出家することを欲するのか。[155]

お前には一人も敵はいない。すべての王たちはお前の支配下にある。それ故、愛しい子よ、そのため王権を捨てることを願うほどの怖れをどうしてお前は持つのか。[156]

お前には七宝があり、美しい輝きの善き徳性もある。それ故どうして苦しみが生じるのか。一切王の王よ、言いなさい。」[157]

このように父が語ったのを聞いて、善慧者であるかの菩薩は父と大臣たちを見つめながら、次のように答えました。[158]

「父上よ、何のために私が怖れて、輪廻的生存を欲せず、感官の諸対象（快樂）と王権を捨てて、出家することを望んでいるのかをお聞き下さい。[159]

害をなす、強大な勇士たち（煩惱）が敵として私にもいるのです。彼らは輪廻的生存に住する神々やアスラを含む生類を苦しめています。[160]

それら三界の邪悪な者たちからの様々な怖れを見て、私は輪廻的生存という依処を捨てて、寂滅の至福を得たいと願っています。[161]

それらの邪悪な敵によって地獄にも投げ込まれた者として、かつて様々な苦を味わいながら〔輪廻の中を〕私は彷徨いました。[162]

それらのあらゆる苦しみを今絶えず思い出しながら、恐怖する私は、それから免れるために悟りに達しようと願うのです。[163]

種々の煩惱のためにあらゆる人々は心苦しめられ、輪廻的生存の中で彷徨いながら、苦を味わい、地獄にすら堕ちています。[164]

害をなす、悪しきこれらの大きな敵たち（煩惱）があらゆる生類を苛み、地獄へ墮としているのです。[165]

これらの悪しき生類の敵たちを、世界の守護神たちすべても、仙人たちでさえも、打ち負かすことが全く出来ません。[166]

ハリ（ヴィシュヌ）やインドラやブラフマーやルドラなどの者たち、すべての世界の守護神たちも、煩惱の支配下にあり、狂酔して、自分の欲するがままに振舞っています。[167]

あらゆる人々も煩惱の支配下にあり、狂酔して、己が願望に従い欲望を楽しみ、罪惡に住して行動しています。[168]

それら悪しき者たち（煩惱）は強大であり、生類を狂酔せしめる者であり、輪廻的生存を彷徨う者は誰も打ち勝つことができません。[169]

大通智者である仏たちのみが、輪廻的生存を彷徨うことから免れ出た者であり、それら悪しき者たちに打ち勝って最高の悟りを得た者です。[170]

[仏たちは] 人々のためにも、悪しきそれらの生類の敵たちに打ち勝ち、正法を教示し、とても幸せな状態を作り出し、[171] そして三界のあらゆる場所で生類を法から成るものに変え、仏としてのなすべき仕事を達成してから、善き寂滅の至福にいたる者です。[172]

この私も同様に、観察して生類を法から成るものに変え、出家の禁戒を堅持しつつ、三昧を得たいと願っています。[173]

それ故、努力してこれらの強大な敵を打ち負かして滅ぼすため、王の位にある人生期を捨てて、出家したいと願うのです。[174]

出家の禁戒を堅持しながら、これらの生類の敵に勝って、阿羅漢として悟りに達し、仏の位を得たいのです。[175]

そして人々のためにあらゆる場所でこれらの大きな敵たちを打ち負かし、正法を教示しながら、最も幸せな状態を私は作りたいのです。[176]

生類を法から成るものに変え、正法を教示しながら、如来のなすべき仕事を達成して、善き寂滅の至福を得たいのです。[177]

そのために、父よ、私は出家することを欲します。あなたはどうか信をもってその許可を私にお与え下さい。」[178]

このように息子が語ったのを聞いて、父たるかの王は、涙を滴らせた顔で見つめながら、息子に次の様に言いました。[179]

「もしそのようにお前が望んでいるとしても、それでも私の言葉を聞きなさい。若い間は人民を護りながら、家で法を行いなさい。[180]

息子をつくり、よく教育して、王座に立たせ、そして [お前が] 年を取って老いに襲われた時、生類の益のために出家しなさい。[181]

もしそのようにするなら、お前はすばらしい光輝ある名声を伴った偉大な法に、安らぎに、悟りに達して、仏の位を得られるだろう。[182]

そのようにして、法を教示し、生類を法から成るものに変え、仏のなすべき仕事を達成してから、お前は善き寂滅の至福を得ることが出来よう。[183]

大智者よ、このように考えて、さしあたって王位にある人生期に住し、あらゆる生類に益を齎しつつ、楽しみながら浄行をなしなさい。[184]

もしお前が私への愛情を、王位を、家族・親縁の者たちを捨てて、自分の命すら顧みずに、生類の益のため出家するなら、[185]

その時、私はお前への愛情の苦しみの火に焼かれて、惑乱し、王位とともに肉体を捨てて、間違いなく死に至るだろう。[186]

またあの母たるガウタミーも、愛情の苦しみの火に焼かれて、心でお前だけを憶念しながら、間違いなくヤマの住まい（死の国）に赴くだろう。[187]

お前の妻であるヤショーダラーも、愛情の苦しみの火に焼かれて、お前の徳性を思い出しながら、肉体を捨てて、ヤマのもとへと赴くだろう。[188]

他の女たち、お前にとって愛しいかの女たちすべても、別れに苦悩し、煩悩の火に焼かれ、苦しみに悩まされて、[ついに]ヤマの住まいに赴くに違いない。[189]

乞い求める人々、また民衆の皆も絶望し、お前の徳性を思い出しながら、歓びの興奮を失って、彷徨うことだろう。[190]

次の生で味わわねばならない、これらの罪から生じるお前の苦は消滅することがない。どうして[自ら]消えるに至るだろうか。[191]

そのようであれば、出家しても、生類に益をなしても、悟りに達しても、何になるだろうか。ただ苦の成就のみがある。[192]

賢き者よ、このように認識して、今は出家することを願わず、年を取った時に去って出家の禁戒を行じ、[193] 煩悩という大敵たちを克服して、悟りに達し、生類の益のために正法を教示して、広く周く行わせるがよい。[194]

そのようにすれば、清浄な心をもつお前は、一切法王・ジナ（仏）として、生類を法から成るものに変え、善き寂滅の至福を得るであろう。[195]

そのようにすれば、われわれも皆、お前の妙法によって浄められ、悟りの知に達して、善き寂滅の至福を得ることだろう。[196]

大士よ、このように考えて、もしお前に私たちに対する憐れみがあるなら、今はとりあえず王の位にいる人生期に住し、菩提行の誓戒を行いなさい。」[197]

このように父が語ったのを聞いて、菩薩・大士は暫し沈思して、父を見つめ、この様に語りました。[198]

「父よ、まことに正しく私を益するためにこの様に御教示されました。しかし私にも有益な言葉と意見があり、それを語りますので、お聞きください。[199]

父よ、死は実に強力であり、誰をも支配下に置きます。信頼できず、生き物の世界で皆殺しにする、極めて無慈悲な者です。[200]

彼はあらゆる生き物にとって、あらゆる方角から近づいてくる者です。三界において誰も打ち勝つことができません。[201]

不意にその大剛勇の者はやって来て、傍に寄ります。ヤマ（死王）の命に従い、あなたの目の前で、私を掴んで、連れてゆくことでしょう。[202]

その時、私はあなたのために何がなせるでしょうか。あなたは私に対して何がなせるでしょうか。家族や親族、愛しい者も家来たちも、彼らは私のために何がなせるでしょうか。[203]

老人となり、感官が衰え、病気をもち、享楽への熱望も消えたその時、どうして私が生類を益するために行動することが出来るでしょうか。[204]

種々の災難は運命から生じるものであり、あらゆる者が味わわねばならないものですが、もし私に災いが生じたとしたら、その時私は何をなすうでしょうか。[205]

もしいつか激怒した王たちが皆、私に敵対したとしたら、彼らは殺害をなし、王権と共にすべての富財を奪うでしょう。[206]

或いは、私を家族や友や血縁者と共に牢に拘束したり、あるいは永久追放して沙漠に送ったりすることでしょう。[207]

その時、服従させられ、衰弱した感官を有する私は何が出来るでしょう。心の堅固さを失った私は、自分自身をすら落ち着かせることが出来ないでしょう。[208]

[その時] どうして心を堅く保って、出家して、禁戒を行じながら、悪しきマーラの群に勝利して、悟りを得ることが出来るでしょう。[209]

悟りの知がなければ、誰が正法を教示できましようか。正法の教示がなければ、どうして生類を益することが出来るでしょうか。[210]

このように考えて、大王よ、私は生類を益するために悟りを得ようとして、[王宮での] 魔の所行を捨てて、出家することを望むのです。[211]

父上よ、もし正法を実践する私への愛情があなたにあるなら、このことの許可を私にお与え下さり、名声・栄光と法とを獲得なさって下さい。」[212]

このように息子が語るのを聞いて、かの父はよく理解したものの、顔に涙を滴らせ、[彼を] 見つめながら愛情という毒に苦しめられた状態でいました。[213]

その後、かの菩薩サルヴァールタシッディは立ち上がり、立ち去って、自分の住まいに居て、瞑想に集中して過ごしました。[214]

かのシュッドーダナ王も大臣・家臣・部下たちを伴って立ち去り、自分の住まいに居て、その事を考えながら過ごしました。— [215]

以上、かの人の (*tasya) {or: 私の (mama)} 往古の活動を今私は語りました。大士よ、あなたもこれを聞いて信受して歎びなさい。[216]

この[話]を信心をもって聴聞して、『出家に進むことを請い求める』[という本話]を随喜する者は皆、美しい輝きがある徳性の抛り所たる者となることでしょう。[217]

— 以上のように師が説かれたのを聞いて、気高い心をもつ彼は、「そのようにいたします」と随喜しながら、集会の出席者たちと共に喜んで信受しました。[218]

『出家に進み行くことを請い願ひ、理解せしめる』という第18章 [終わる]。

4. Tathāgatajanmāvadānamālā 第19章の校訂研究

第19章を内容的に区分して、各部所のソースとオリジナル箇所をおおまかに示せば、次の通り：

- (1) 第4～第6詩節（ルンビニー園の精霊が王子の出離を王に予言する）の記述は Mahāvastu を利用。
- (2) 第6～第17詩節（王子の出離がないよう見張りの強化を王が命令する）の記述は Lalitavistara 第14章を利用。
- (3) 第18～第42詩節（宮廷の歓楽の強化が命令される）の記述は Buddhacarita 第4章を利用。
- (4) 第43～第55詩節（菩薩の性愛の行動、妻の懐妊）の記述は Mahajātakamālā または Karuṇāpuṇḍarīka を利用。
- (5) 第56～第83詩節（妊娠した妻と菩薩との対話）の記述は TJAM オリジナル。
- (6) 第84～第125詩節（菩薩と義母プラジャーパティとの対話）の記述は TJAM オリジナル。
- (7) 第126～第140詩節（菩薩の義母から連絡を受けた後宮の女たちと菩薩との対話）の記述は TJAM オリジナル。
- (8) 第141～170詩節（菩薩が夜中に父王のもとに訪れ、話し合う）は Lalitavistara 第15章を利用。
- (9) 第171～210詩節（菩薩と父王の対話の続き）の記述は TJAM オリジナル。
- (10) 第211～215詩節は（父王が菩薩の願いに同意する）Lalitavistara 第15章を利用。

4.1 TJAM 第19章『出離することの許可を請う』 の梵文校訂テキスト

19 Niryaṇānujñāsamprārthānāparivarto nāmonaviṃśatitamo 'dhyāyaḥ

[123a3] athāśoko mahīpālaḥ {or: athānando mahāsattvaḥ} punar upāsrito mudā /
sāñjalis taṃ yatim natvā punar evam abhāṣata // 1
bhadanto 'sau mahābhijño bodhisattvaḥ kathaṃ purāt /
nirgatas tat samādiśya sarvān asmān prabodhaya // 2
iti samprārthitaṃ tena śrutvā so 'rhan mahāmatiḥ /
aśokaṃ {or: ānandaṃ} taṃ sabhāṃ sarvāṃ sampaśyann evam ādiśat // 3
tatrākāśe samāśritya lumbinīvanadevatā /

śuddhodanaṃ mahīndraṃ taṃ samāmantryaivam abravīt // 4	≈ S ii,145.6-7; M ii,185.8-9
vijānātu narendro 'yaṃ bodhisattvas tavātmajaḥ / viraktas tribhave nūnaṃ pravrajed bodhiprāptaye // 5	≈ S ii,145.7-9; M ii,185.9-11
iti devatayākhyātaṃ śrutvā śuddhodano nṛpaḥ / paśyantīm devatām natvā sahasotthāya prācarat // 6	
galadaśruviliptāsya udvignadīnamānasaḥ / prāsādatalam āśritya tasthau paśyan samantataḥ // 7	
tatra śuddhodano rājā mantriṇaḥ sasuhṛjjanān / sarvān paśyan samāmantrya purata evam ādiśat // 8	
bhavantaḥ kriyatām yatno yathāsau nandanaḥ purāt / na niryāyāt tathā sarvair yuṣmābhir api sarvathā // 9	
iti rājñā samādiṣṭaṃ śrutvā te mantriṇo janāḥ / tatheti prativijñāpya sarve 'carams tato drutam // 10	
tatra te mantriṇo 'mātyāḥ purād bahiḥ samantataḥ / parikhāḥ khānayitvāśu jalapūrṇā vyadhāpayat // 11	≈ L 193.6; H i,684(vs.)16c
tataḥ prāccīraprākārān samantato vyamāpayan / dvārakapāṭa*yantrāni sudṛḍhāny abhyakārayan // 12	≈ L 193.6-7; H i,684(vs.)16cd
gopureṣv api sarveṣu yoddhṛn sainyādhipān api / samabhiṣṭhāpayām āsuḥ saṃnaddhān astrasamṃyutān // 13	≈ L 193.4; H i,684(vs.)16a
śṛṅgāṭakeṣu sarveṣu yoddhṛn sainyagaṇādhipān / savāhanān balavyūhān sthāpayanti sma sarvataḥ // 14	≈ L 193.5; H i,684(vs.)16b
evaṃ sarvatra mārgēṣu sarvagehāṅganāsv api / rathyāsv āpaṇadeśēṣu pratiṣṭhāpyaivam ādiśan // 15	
yuvarājo mahāsattvaḥ pravrajituṃ samicchati / tad atra nṛpater vaṃśaḥ samucchinnno bhaved api // 16	
iti jāgaraṇaṃ dhṛtvā sarve yūyaṃ samāhitāḥ / dīvānīsaṃ samālokya pratyabhiṣṭhātum arhatha // 17	
sarvāṇy api ca vādyāni vādayanto divānīsaṃ / mahotsāham avicchinnaṃ cārayantu samantataḥ // 18	
evaṃ sarvatra deśēṣu sarve tadrakṣiṇo janāḥ / vādayanto mahotsāhaṃ saṃtasthire pramoditāḥ // 19	
evaṃ vidhāya sarve te mantribhṛtya[123b]janās tataḥ / gatvaivaṃ tasya rakṣārtham antaḥpure 'py upācaran // 20	
tatra te samupāmantrya dṛṣṭvāntaḥpurikāñ janān / yathādiṣṭaṃ narendreṇa tathā sarvān upādiśān // 21	

yad ayam nṛparājasya nandano bhavaniḥsṛhaḥ /
 tad rājyāśramam tyaktvā vanāśramam samicchati // 22
 tad yathāyam mahāsattvo naiva yāyād vanāśramam /
 tathāsya gamanotsāham vighātituṃ samarhatha // 23
 iti mantrijanādiṣṭam śrutvāntapurikā janāḥ /
 sarve tatheti bhāṣitvā jagmur antaḥpure drutam // 24
 tatra te samupāśritya sarvās tā ratisamṇibhāḥ /
 kalāguṇāśrayāḥ kāntāḥ samāmantryaivam abruvan // 25
 bhoḥ sarvāḥ pramadāḥ kāntā sarvavidyāvicakṣaṇāḥ /
 tac chrutvā nṛpater ājñām pratikartuṃ tathārhatha // 26
 yad ayam ātmajo rājño bodhisattvo viraktikaḥ /
 rājyāśramam parityajya pravrajituṃ samicchati // 27
 tad bhavantyo yathā tasya manaḥ kāmaguṇāratam /
 tathā ratimahotsāhe saṃrāgayantu sarvathā // 28
 yathā rājyāśramam tyaktvā naiṣa vrajed vanāśramam /
 tathā yatnair vaśīkṛtya saṃsthāpyatām nṛpāsane // 29
 iti taiḥ samupādiṣṭam śrutvā tāḥ pramadāḥ striyaḥ /
 tatheti pratisaṃśrutyā prābhyanandan pramoditāḥ // 30
 tatas tāḥ śrīsamākārā ratirūpasamāśrayāḥ /
 saṃgītinṛtyasaṃcārair mahotsāham acārayan // 31
 kāścīn murajavādyāni saṃpravādya mudāraman /
 kāścīt tad gītīgāyantaḥ samāraman pramoditāḥ // 32
 kāścīt tat tūryasaṃrāvaṃ cārayantyo mudāraman /
 kāścīn nṛtyavilāsāni prakurvantyo mudāraman // 33
 kāścīd veṇusunirghoṣaiḥ sugītiṃ samacārayan /
 kāścīd vīṇāṃ pravāditvā sagītiṃ prāraman mudā // 34
 kāścīd ḍhakkāṃ pravādantaḥ sagītiṃ prāraman mudā /
 kāścīd bherīṃ parāhantaḥ saṃharṣitā mudāraman // 35
 kāścīc ca ḍamarūm maṇḍu[124a]ḍiṇḍimajharjharān api /
 mardalapraṇavādīni pravādantyo mudālasan // 36
 tālānusāranṛtyantaḥ śṛṅgārollāsadīpanaiḥ /
 madhuraniḥsvanair gītam gāyantaḥ prolalāsire // 37
 sarvās tāḥ pramadāḥ kāntāḥ suvastrālaṃkāramaṇḍitāḥ /
 pañcasugandhiliptāṅgāḥ sugandhipuṣpabhūṣitāḥ // 38
 yuvarājam tam ālokya vihasantya upāśritāḥ /

samīksyaiv*āṅganāḥ kāścīl lajjābhinamatānanāḥ // 39
 kāścīd vīkṣya kaṭākṣeṇa sthitāḥ kāścīd natānanāḥ /
 darśayantyāḥ sthitāḥ kāścīc chṛṅgārarasavibhramam // 40
 kāścīl lajjām parityajya vibhrāntā iva cerire /
 kāścīd uddīptakāmās ca samkrīḍitum upāśrayan // 41
 evaṃ nānāprakāraīś ca ratikrīḍābhīdarśanaīḥ /
 hāsyalāsyavilāsais tā yuvānaṃ taṃ vyanodayan // 42
 tataḥ sa yuvarājo 'pi bodhisattvo jītenḍriyaḥ /
 dṛṣṭvā tā ratīsamraktā dhyātvaivaṃ samacintayat // 43
 imā hi pramadāḥ kāntāḥ kāmakleśāhatāśayaḥ /
 yatnenāpi vaśīkṛtya mohayeyur mano mama // 44
 tadā vighnaṃ bhaven nūnaṃ mama saṃbodhisādhane /
 itīmābhiḥ (!) saḥārakto ramituṃ nārḥāmi sāmpratam // 45
 iti dhyātvā samādhāya bodhisattvaḥ sa sanmatīḥ /
 svayaṃ tataḥ samutthāya nijavāsālaye 'carat // 46
 tatra śayyāsanāsīno jīṛṇarogivyasūn smaran /
 saṃsāraviratotsāhaḥ saṃbodhinihitāśayaḥ // 47
 sarvasattvāhitādhānabodhivratasamutsukaḥ /
 sarvān buddhān anusmṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 48
 tatra sā mahīṣī gopā bhartṛdharmānucāriṇī /
 patiṃ śayyāsanāsīnaṃ samīksya samupāśrayat // 49
 tāṃ dṛṣṭvā samupāsīnāṃ saṃvṛtidharmakāminīm /
 bodhisattvo 'nuraktātmā vihasan samapaśyata // 50
 sāpi devī prasannāsyā ratidharmānurāgiṇī /
 [124b] patiṃ ratirasāraktaṃ vihasantī samaikṣata // 51
 evaṃ mitho 'bhīpaśyantyor (!) bhāryāpatyos tayor api /
 mahārāgāgnir uddīpto manodhṛtiṃ vyadāhayat // 52
 tatas tau dampatī śliṣya mahārāgā*nurāgitau /
 vihasantyaṃ samālokya pramodantau prarematuḥ // 53
 śrīcāritracaraṇasudarśanayūthikābhīdhaḥ /
 śakras tadā divas cyutvā martyaloke samāyayau // 54
 tatra sa samaye dṛṣṭvā bodhipraṇihitāśayaḥ /
 gopāyā nirmale garbhamaṇḍalābje samāviśat // 55
 tadā sā śrīsamā devī yaśodharābhīnandīnī /
 saddharmasāadhanotsāhā babhūva vimalāśayā // 56

≈ Bc 4.53

≈ Mahajjātakamālā 32.19;
 Karuṇāpuṇḍarīka,ii,p.315

tataḥ sā vigatakleśāsuddhāśayā yaśodharā /
 bhartāraṃ taṃ mahāsattvaṃ sampaśyan hy evam abhāṣata // 57
 svāminn adya manaḥ kleśavimuktaṃ dharmam icchati /
 tad ahaṃ poṣadhaṃ nāma vrataṃ caritum utsahe // 58
 yadi te vidyate bharta dharmārthinyāṃ kṛpā mayi
 tadanujñāṃ prasannātmā bhavān me dātum arhati // 59
 iti bhāryoditaṃ śrutvā bhartā sa viduṣāṃ varaḥ /
 dhyātvā kṣaṇaṃ samādhāya tannimittaṃ vyalokayat // 60
 tannimittaṃ pariññāya bodhisattvaḥ sa sanmatih /
 tāṃ gopāṃ supriyāṃ bhāryāṃ sampaśyann evam ādiśat // 61
 bhoḥ priye tvam subhāgyāsi yat te 'dya garbhamaṇḍale /
 bodhisattvo divaś cyutvā saṃpraviṣṭaḥ prasīda tat // 62
 tathā te supriye cittaṃ vrataṃ caritum icchati /
 tat subhadre samādhāya saṃcarasva vratottamam // 63
 bhūyo 'tra śṛṇu me vākyaṃ abhiprāyaṃ yad ucyate /
 tatanumodanāṃ kṛtvā tiṣṭha vratasamāhitā // 64
 aham api priye gatvā gayāyāṃ bodhimaṇḍape /
 bodhivṛkṣam upāśritya sambodhiṃ prāptum utsahe // 65
 sarvān kutīrthikāṅ jetuṃ kāśyāṃ bauddhāśramāśritaḥ /
 saddharmaṃ samupādiśya kartum icche jagacchubham // 66
 iti hetor ahaṃ bhadre pravrajituṃ samutsahe /
 [125a] yāvan nāham ihāyātas tāvat tiṣṭha samāhitā // 67
 iti bhartroditaṃ śrutvā yaśodharā pativratā /
 svāminaṃ taṃ mahāsattvaṃ sampaśyanty evam abravīt // 68
 aham api tvayā sārthaṃ pravrajituṃ samutsahe /
 vinā bhavantam atraivaṃ tiṣṭheyāṃ hi kathaṃ prabho // 69
 iti bhāryoktam ākarṇya bodhisattvo mahāmatih /
 dṛṣṭvā tāṃ supatnīm sādhvīm punar evaṃ samādiśat // 70
 śṛṇu priye mayākhyātaṃ hitārtham āvayor api /
 yat te garbhe praviṣṭo 'tra mahāsattvaḥ śubhārthabhṛt // 71
 yāvad eṣa maheśākhyāḥ saṃtiṣṭhate tavodare /
 tāvat tvayā samāraḥsya poṣaṇīyaḥ samādarāt // 72
 yadāyaṃ paripuṣṭāṅgaḥ saṃjātaḥ śrīguṇāśrayaḥ /
 tadāsya darśanaṃ kartuṃ prāgamiṣyāmy ahaṃ dhruvam // 73
 iti satyaṃ mayā proktaṃ matvā dhairyasamāhitā /

sarvān buddhān anusmṛtvā saṃtiṣṭhasva pramoditā // 74
ity ādiśya sa sarvārthasiddhaḥ sa susiddhimān /
pratisarāmahāvidyāṃ gopāyai pradadau japan // 75
tatas tām subhagāṃ bhāryāṃ bodhisattvaḥ samīkṣya ca /
tadvidyāyāḥ prabhāvāni samādiśyaivam abravīt // 76
iyam bhadre mahāvidyā sarvopadravarakṣiṇī /
bhadrāśrīsadguṇādhārā sarvabhayavināśiṇī // 77
tad enāṃ sarvadā dhṛtvā smṛtvā sarvabhayeṣv api /
dhyātvā pratisarāṃ devīm sampañthantī samācara // 78
etadvidyānubhāvena sarvālokādhipā api /
sagaṇā mātrkāś cāpi sarve grahāḥ satārakāḥ // 79
ṛṣayaḥ siddhamantrās ca yogino yatayo 'pi ca /
bodhisattvā mahāsattvaḥ sasamghās ca munīśvarāḥ // 80
sarvadā tvāṃ samālokya sarvatrāpi kṛpādrśā /
sarvaduṣṭabhayebhyo 'pi samrakṣeyuḥ prasāditāḥ // 81
iti matvā mahāvidyāṃ enāṃ dhṛtvā sadādarāt /
svātmānaṃ dāraṃ cāpi pālayantī samācara // 82
iti bhartrā samādiṣṭaṃ nīsamya sā yaśodharā /
snehaduḥkhāgnisaṃtaptā tasthau *vi[125b]ṣaṇṇitāśayā // 83
tataḥ sarvārthasiddho 'sau mātaraṃ tām prajāpatīm /
gautamīm samupāśritya natvaivam āha sājñjaliḥ // 84
mātar ahaṃ gayāśrīse caritvā vratam uttamam /
bodhimaṇḍe samāśritya saṃbodhiṃ prāptum utsahe // 85
tataḥ kāśīpure gatvā mṛgadāve jināśrame /
saddharmaṃ samupākhyāya kartum icche jagacchubham // 86
tato 'trāpi samāgatya yuṣmākam api darśanam /
kṛtvā saddharmam ākhyāya kariṣyāmi sadā śubham // 87
tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /
jagad dharmamayam kṛtvā nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 88
iti hetor ahaṃ mātāḥ pravrajitum samutsahe /
tadanujñāṃ pradattvā me dharmāśrīkīrtim āpnuhi // 89
iti putroditaṃ śrutvā gautamī sā pramohitā /
cirāc caitanyam āsādyā niḥśvasanty evam abravīt // 90
hā daiva kiṃ mayā pāpaṃ prakṛtaṃ tan na manyate /
yad eka eva me putraḥ so 'pi mām hātum icchati // 91

tad atra kiṃ kariṣyāmi buddhir hi me viśīryate /
 etacchokāgnisaṃdagdhāṃ ko 'tra māṃ pariśodhayet // 92
 hā jīva vraja tāvan me yāvan na vrajate sutaḥ /
 śokāgnidagdhite dehe sthitvā kiṃ guṇam āpsyasi // 93
 avaśyaṃ niścares tyaktvā mamedam sendriyaṃ vapuḥ /
 tat tāvat sahasā gaccha yāvat sutam na pasyase // 94
 yadi na gacchate tāvan nūnam duḥkhāni lapsyasi /
 avaśyam eva gantavyam iti gaccha jinān smaran // 95
 iti sā gautamī mātā vilapitvāvilānanā /
 nandanam taṃ mahāsattvaṃ sampaśyanty evam abravīt // 96
 api deva tvam eko hi nandano me 'sti nāparaḥ /
 tat katham māṃ sarājyāṅgaṃ tyaktvā gantum kuhecchasi // 97
 kiṃ te duḥkhāni jātāni bhayāny api kuto vada /
 yaj janakaṃ sabandhuṃ māṃ sajnātīṃ tyaktum icchasi // 98
 bhāryās ca supriyāḥ kāntāḥ śrīrūpā ratisaṃnibhāḥ /
 etāḥ sarvā api tyaktvā kiṃ su[126a]kham prāptum icchasi // 99
 tvayā yadā parityaktās tadā sarvā imāḥ striyaḥ /
 tava viyogaśokāgnidagdhā yāyur yamālayam // 100
 tadā kiṃ te sukham puṇyam bhadrāśrīkīrtisadguṇam /
 bodhim api samāsādyā kṛtvāpi ca jagaddhitam // 101
 iti matvā mahāvijña tāvad rājyāśrame sthitaḥ /
 dattvārthibhyo yathākāmaṃ dhṛtvā vrataṃ sukham cara // 102
 yadātmaḥ 'bhijātas te tadā dharme vinīya tam /
 rājyāśrame pratiṣṭhāpya kṛtvā nṛpaṃ tatasā cara // 103
 yadā cāpi jarākrāntadeho vṛddho jitendriyaḥ /
 tadā bauddham vrataṃ dhṛtvā saṃcarasva jagaddhite // 104
 yadi cāsti samīcchās ta ṛṣicaryāvrate vane /
 viśayābhiratiṃ tyaktvā vanāśrame tadā cara // 105
 evaṃ cet te sadā bhadraṃ nirapāyaṃ bhaved api /
 bodhim api samāsādyā bodhicaryāṃ samācareḥ // 106
 saddharmaṃ samupādiśya kṛtvā sarvatra maṅgalam /
 jagad dharmamayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuyāḥ // 107
 iti mātrā samādiṣṭam bodhisattvo niśamya saḥ /
 mātaram tāṃ samālokyā bhūyo 'py evam abhāṣata // 108
 mātāḥ satyaṃ tvayākhyātaṃ tathāpi me vacaḥ śṛṇu /

yad ahaṃ saugatīm caryāṃ caritum utsahe 'dhunā // 109
 yadā vṛddho jarākrāntadeho rogāhatendriyaḥ /
 tadā kathaṃ praśaknūyāṃ caritum saugataṃ vratam // 110
 akasmān mṛtyur āghrāya sarvān asmān grased api /
 bhava kasya vaśe mṛtyus traidhātubhuvaneṣv api // 111
 iti dṛṣṭvādhunā mātā bodhicaryāvratam caran /
 kleśān māragaṇāñ jītvā sambodhiṃ prāptum utsahe // 112
 tato 'haṃ sarvalokeṣu saddharmaṃ samprakāśayan /
 jagad dharmamayaṃ kṛtvā nirvṛtiṃ gantum utsahe // 113
 iti mātra viśīda tvam mama saddharmacāriṇaḥ /
 viyogaduḥkhaśaṅkāpi bhāvanīyā kadāpi mā // 114
 yac ca me bījasambhūto gopāyā garbhamaṇḍale /
 bodhisattvo mahāsattvaḥ saṃsthito hi pravṛddhimān // 115
 yadāyaṃ dārako jātas tadā [126b] tasyātmajasya me /
 mukhasaṃdarśanam kartum prāgamiṣyāmy ahaṃ dhruvam // 116
 atrāhaṃ sarvadāśritya vinīya dharmasādhane /
 bodhimārge pratiṣṭhāpya cārayeyaṃ jagaddhite // 117
 iti satyaṃ mayā proktaṃ śrutvā mātāḥ prabodhitā /
 mā viśīda prasīdātra mama saddharmasādhane // 118
 tat snuṣāpannasattveyaṃ yaśodarā sadādarāt /
 abhirakṣyābhisampālyā mātā tvayātmajā yathā // 119
 etāś ca pramadāḥ kāntāḥ sarvā api priyā mama /
 tvayābhirakṣya sampālyā yāvan nāham ihāgataḥ // 120
 dhruvam ahaṃ ihāgatya sarvā imāḥ prabodhayan /
 bodhimārge samāyujya cārayeyaṃ sadā śubhe // 121
 iti mātāḥ samādiśya bodhayitvā prayatnataḥ /
 samāśvāsyābhirakṣantī sampālayitum arhati // 122
 tvam api sugatān smṛtvā tāvat tiṣṭha samāhitā /
 yāvan nāham ihāyātaḥ saddharmaṃ samprakāśitum // 123
 nūnam sambodhisamprāptaḥ prathamam iha prāgataḥ /
 saddharmāmṛtavarṣeṇa tarpayīṣyāmi vo dhruvam // 124
 iti satyaṃ pariñāya yāvan nātrāham āgataḥ /
 tāvann etā vadhū rakṣya saṃtiṣṭhasva viśīda mā // 125
 iti putroditaṃ śrutvā gautamī sā prabodhitā /
 snehaduḥkhāgnisaṃtaptā tasthau niḥśvāsataṭparā // 126

tad dṛṣṭvā tāḥ striyaḥ sarvāḥ sahasā samupāgataḥ /
 mātaraṃ tāṃ samālokyā parivṛtyopatasthire // 127
 tā dṛṣṭvā samupāsīnā gautamī sāsṛulocanā /
 sarvāḥ sambodhanīkartuṃ samālokyāivam ādiśat // 128
 ayaṃ bhartā mahāsattvo bodhim icchañ jagaddhite /
 sarvān asmān parityajya pravrajituṃ samicchati // 129
 tad yūyaṃ sakalāḥ kāntā dhairyam ālambya tiṣṭhata /
 ayaṃ bodhiṃ samāsādyā yāvan nātra samāgataḥ // 130
 iti taduktam ākarṇya sarvās tāḥ pramadā api /
 bhartāraṃ tam upāsrītya praṇatvaivaṃ babhāṣire // 131
 vyaṃ api tathā svāmin sarvā api tvayā saha /
 vrataṃ [127a] caritum icchāmas tad bhavān naḥ prasīdatu // 132
 bhavadājñāṃ śirodhṛtvā samādhāya caremahi /
 tad bhavān naḥ prasannātmā samanvāhartum arhati // 133
 iti taduktam ākarṇya bodhisattvaḥ sa sanmatih /
 sarvās tāḥ pramadā rāmāḥ samālokyāivam ādiśat // 134
 yūyaṃ hi pramadāḥ sarvā bodhicaryātiduṣkarī /
 tat tāvac caritum naivaṃ yuṣmābhiḥ śakyate 'dhunā // 135
 tad ahaṃ bodhim āsādyā yāvan nātra samāgataḥ /
 tāvad yūyaṃ samādhāya carantyas tiṣṭhata vratam // 136
 ahaṃ sambodhim āsādyā prathamam iha prāgataḥ /
 saddharmāmṛtapānena tarpaiṣyāmi vo dhruvam // 137
 iti satyaṃ parijñāya sarvā yūyaṃ samāhitāḥ /
 jinān smṛtvā vrataṃ dhṛtvā dhairyam ālambya tiṣṭhata // 138
 ity evaṃ samupādiśya bodhisattvaḥ sa utthitāḥ /
 gatvā svālayam āsrītya tasthau dhyānasamāhitāḥ // 139
 sarvās tāḥ pramadās cāpi nātvā svasvālayāsrītāḥ /
 bhartāraṃ tam anusmṛtvā tasthur dhyānasamāhitāḥ // 140
 athāsau śayanāsīno bodhisattvaḥ samutthitāḥ /
 pravrajyāsamayaṃ dṛṣṭvā dhyātvaivaṃ samacintayat // 141 ≈ L 198.1; H ii,40.3
 yad anujñān anāsādyā pitū rājño mahīpateḥ /
 niḥkrameyam avijñātas tad ayuktaṃ na śobhate // 142 ≈ L 198.1-3; H ii,40.3-5
 tat pituḥ darśanaṃ kṛtvā prāptānujño vinodayan /
 niḥkrameyaṃ prasannātmā tathā saṃśobhate mama // 143
 iti niścintya śuddhātmā bodhisattvaḥ sa utthitāḥ /

gatvā pitur narendrasya prāsādaṃ samupācarat // 144	≈ L 198.3-4; H ii,40.5-6
tatrāṭṭatala āśrītya bodhisattvaḥ sa ṛddhimān /	
samādhinihitātmā sa saṃsthiṭaḥ saṃprabhāsayan // 145	≈ L 198.4-5; H ii,40.7-8
tadābhā prasṛtā tatra prāsāde nṛpamandire /	
avabhāsyā tamo hatvā dinam ivābhyarocayat // 146	
tadābhām prasṛtām dṛṣṭvā śuddhodanaḥ prabodhiṭaḥ /	
kiṃ tāvad vartate prātaḥ sūryo 'pi ca samudgataḥ // 147	≈ L 198.5-7; H ii,40.8-9
iti vadan samutthāya saṃnirīkṣya [127b] samantataḥ /	
kāñcukīyaṃ samāmantrya papracchaivaṃ pravismītaḥ // 148	
kiṃ tāvad vartate prātaḥ sūryo 'pi codito 'dhunā /	
yad iyaṃ prasṛtābhātra prakāśayati mandiram // 149	≈ L 198.7-8; H ii,40.9-10
iti pṛṣṭanarendrena kāñcukīyaḥ samutthiṭaḥ /	
samālokya puro gatvā nṛpater evam abravīt // 150	≈ L 198.8-9; H ii,40.10-11
tāvad deva tamī rātrir niśītho 'pi na vartate /	
kathaṃ prātar bhavet tāvat kutaḥ samudito raviḥ // 151	
ravāv abhyudite chāyāḥ pravarteyur mahītale /	
uśaś cet pakṣiṇaḥ sarve ruyuḥ śvāno 'pi cotthiṭaḥ // 152	≈ L 198.10-13; H ii,40(vs.)1
iyaṃ tv ābhā manoramyā prāhlādanī sukhākārā /	
sūryābhā hi tapet kāyaṃ gharmaṃ cāpi pracārayet // 153	≈ L 198.14-15; H ii,40(vs.)2ab
nūnam atra mahābhijño bodhisattvaḥ samāgataḥ /	
tasyeyaṃ suprabhā kāntiḥ prasāriteha mandire // 154	≈ L 198.17; H ii,40(vs.)2d
iti tatkaṭhiṭaṃ śrutvā śuddhodanaḥ pitā nṛpaḥ /	
sa samutthāya niryātaḥ sarvatra samalokayat // 155	≈ L 198.18; H ii,40(vs.)3a
tadābhām prasṛtām dṛṣṭvā sa rājā vismayānvitaḥ /	
kasyeyaṃ suprabhāyātā dhyātveti ca vyalokayat // 156	
tatra paśyan sa sarvatra bodhisattvaṃ tam ātmajam /	
prāsādatalam āśrītya dhyātvā sthītam apaśyata // 157	≈ L 198.19; H ii,40(vs.)3b
taṃ dṛṣṭvā sa pitā rājā sahasā samupācarat /	
janakaṃ taṃ samāyātaṃ dṛṣṭvātmajaḥ sa utthiṭaḥ // 158	
tatra sa janako rājā tam ātmajaṃ prabhāsavaram /	
samīkṣya samupāsrītya śuddhāsane samāśrayat // 159	
tataḥ so 'pi mahāsattvo bodhisattvo 'vabhāsayan /	
janakaṃ taṃ samālokya praṇatvā samupāśrayat // 160	
tatra śrīmān mahāsattvo bodhisattvaḥ kṛtāñjaliḥ /	
janakaṃ taṃ samālokya *saṃprārthayat prasannadhīḥ // 161	≈ L 199.3; H ii,42(vs.)4a

yad ahaṃ tāta saddharmaṃ saṃcaritum samutsahe / tadanujñāṃ pradattvā me dharmasrīkīrtim āpnuhi // 162	≈ L 199.5-6; H ii,42(vs.)4cd
ity ātmājasamākhyātaṃ śrutvā sa janako nṛpaḥ / galadaśrumukhaḥ paśyaṃs taṃ putram evam ādiśat // 163	≈ L 199.7; H ii,42(vs.)5a
hā putra katham asmāms tvam tyaktvā [128a] vrajitum icchasi / kiṃ te duḥkhaṃ bhayaṃ vāsti nivārayāṇi tad vada // 164	≈ L 199.8; H ii,42(vs.)4b
yadi rājye samicchā te sarvaṃ dāsyāmi te dhruvam / adyābhiṣiñcyā rājye tvam sthāpayāni prajāhite // 165	≈ L 199.9-10; H ii,42(vs.)4cd
ahaṃ vṛddho vrataṃ kartum gamiṣyāmi vanāśrame / tat tvam rājyāśrame sthitvā prajāhitavrataṃ cara // 166	
yady evam āvayoḥ syād dhi dharmasrīmaṅgalaṃ sadā / iti me vacanaṃ śrutvā tāvat kaulavrataṃ cara // 167	
tvam api hi bhaver vṛddhas tadā gaccha yadīcchasi / ātmājo 'pi na te tāvad rājyaṃ tyaktvā kathaṃ vrajeḥ // 168	
yadātmājo 'bhijātas te nītidharmaṃ vinīya tam / abhiṣiñcyā nṛpaṃ kṛtvā tadā bauddhavrataṃ cara // 169	
iti pitroditaṃ śrutvā bodhisattvaḥ sa sanmatih / janakaṃ taṃ mahīpālaṃ sampaśyann evam abravīt // 170	≈ L 199.11; H ii,42(vs.)6a
śṛṇu tāta mahīpāla yadarthe gantum utsahe / tad ahaṃ te pravakṣyāmi mā viśīda prasīda me // 171	
bhave 'tra tāta duḥkhāni vividhāni bhayāni hi / tāni nirīkṣya me cittaṃ sambodhivratam icchati // 172	
ādau bhave mahadduḥkhaṃ mātur garbhe praveśite / sadāmedhyābhilīptāṅgas tiṣṭhed dhi nārake yathā // 173	
janmakāle tathā mātur garbhān malābhimiśritaḥ / cirād duḥkhair viniḥkramya niṣīded abhimohitaḥ // 174	
tato bālye vimūḍhātmā paśuvad avikalpikaḥ / kṣuttṛṣṇāgnyabhitaptāṅgas tiṣṭhed rodanatatarāḥ // 175	
kaumārye 'pi mahāduḥkhaṃ krīḍārāgābhikheditam / agamyē 'pi rasāraktasaṃkliṣṭakalahākulam // 176	
yauvane 'pi mahāduḥkhaṃ kāmakleśāgnidāhitam / arjanāyāsasaṃkliṣṭamānasam anavasthitam // 177	
saṃpattīśrīkṣaṇaṃ cāpi ghanopamam aniṣṭhitam / suhṛdo 'pi kṣaṇād duṣṭā bhaveyur apakāriṇaḥ // 178	
vārddhake 'pi jarākṛāntaśarīre jīrṇitendriye /	

bhogye 'pi viratotsāhaṃ kiṃ punar dharmasādhanam // 179
 rogās ca vividhāḥ santi balavīryaviḡhātinaḥ /
 dharmasrīsāadhanotsāhanihantāro [128b] mahārayaḥ // 180
 mṛtyuś cāpi jagaddhantā pracaṇḍo nirghṛṇāsayaḥ /
 aviśvāsyō hy anirvāryaḥ sarvakāryāntakṛd balī // 181
 etair duḡkhair bhayaīḥ sarve saṃsāre vikalīkṛtāḥ /
 kāmbhogyātisaṃraktāḥ pracaranti yathāsukham // 182
 tatas te vikalātmānaḥ kleśamadābhīmānitāḥ /
 ghore 'pi pātake raktāḥ pracaranti pramoditāḥ // 183
 tatas te 'timahāduṣṭā durbhagāḥ duḡkha*bhoginaḥ /
 asahyavedanākrāntā mṛtā yānti yamālayam // 184
 tān āyātān samālokya samavartī sa dharmarāt /
 teṣāṃ samīkṣya karmāṇi prerayet phalabhuktaye // 185
 pāpino narake nītvā kṣipeyuḥ kiṃkarā drutam /
 dharmiṇas te samālokya prerayeyuḥ surālaye // 186
 tatra sukṛtinaḥ sarvadvivasampatsukhānvitāḥ /
 madābhīmānino raktāḥ pracareyur yathāsukham // 187
 tataḥ saṃkliṣṭacittās te pramattāḥ paribhāṣiṇaḥ /
 daivānuyogataś cyutvā pateyur narakeṣv api // 188
 tatra te pāpinaḥ sarve sarveṣu narakeṣv api /
 svakarmaphalabhuñjānā bhrameyur duḡkhabhoginaḥ // 189
 tatas te tīvraduḡkhārtāḥ paścāttāpāhatāśayāḥ /
 hā duḡkham iti proktvaiva tiṣṭheyuḥ parikheditāḥ // 190
 yadi te sugatān smṛtvā nameyuḥ śaraṇāśayāḥ /
 tadā tān sugatā dṛṣṭvā saṃprasārya śubhāṃ prabhāṃ // 191
 nirmāya saugatīṃ mūrtiṃ preṣayeyus tadantike /
 tān dṛṣṭvā saugatīṃ mūrtiṃ sarve te tatprabhānvitāḥ // 192
 saukhyavismayasampannās tān samīkṣya pramoditāḥ /
 purataḥ samupāsṛtya vandeyur abhinanditāḥ // 193
 tadā te vimalātmānaḥ parisuddhendriyāśrayāḥ /
 samudgamyā tato yāyuḥ sukhāvatyāṃ jinālaye // 194
 evaṃ sarvatra lokānāṃ buddhā eva hitaṃkarāḥ /
 tad eṣāṃ śaraṇaṃ gatvā pracarantu sadā vratam // 195
 ye buddhaśaraṇaṃ kṛtvā saṃcarante sadā vratam /
 durgatiṃ te na gacchanti saṃprayānti jinālayam // 196

iti vijñāya tātāhaṃ saṃbu[129a]ddhaśaraṇāśritaḥ /
 bodhicaryāvratam dhṛtvā sambodhiṃ prāptum utsahe // 197
 bhūyo 'py etāni saṃsāre duḥkhāni vividhāny api /
 bhayāny api nirīkṣyāhaṃ pravrajitum samutsahe // 198
 iti satyaṃ parijñāya saddharmam yadi vāñchasi /
 tadanujñāṃ pradattvā me saṃcarasva sadā śubhe // 199
 iti putroditam śrutvā śuddhodano nṛpaḥ pitā /
 snehaduḥkhāgnitaptātmā tasthau kṣaṇam vimohitaḥ // 200
 cirāc caitanyam āsādyā nṛpatiḥ so 'bhibodhitaḥ /
 bhūyas tam ātmajaṃ paśyann āhaivaṃ galitāśrudṛk // 201
 kasya nāsti bhava duḥkhaṃ bhayaṃ ca tribhaveṣv api /
 bhāviḥbhāvā bhavanty eva sarveṣāṃ api sarvataḥ // 202
 ko nātra jarasāghrāto rogeṇa mṛtyunāpi hi /
 kṣaṇasampadvipattiś ca sarve 'py ete svadaivataḥ // 203
 ity atra yauvanam yāvat tāvad rājyavratam cara /
 yadā vṛddho vratam bauddham dhṛtvā cara samāhitaḥ // 204
 iti pitroditam śrutvā bodhisattvo mahāmatiḥ /
 janakam taṃ samālokya punar evam abhāṣata // 205
 vṛddho hi durbalo jīrṇo bhogye 'pi viratotsavaḥ /
 katham bodhiṃ samāsādyā bodhicaryāvratam caret // 206
 rogo 'pi hi vipattiś ca mṛtyur bhava svadaivataḥ /
 iti matvātra rājye 'haṃ ramitum naivam utsahe // 207
 dharma eva jagatrātā sarvatrāpi sadānugaḥ /
 tat saddharmam samālabdhum pravrajitum samutsahe // 208
 yadi te 'sti mayi snehas tadanujñāṃ pradehi me /
 etaddharmānubhāvais tvam api saddharmam āpnuyāḥ // 209
 trijagaddhitakārye me mā vighnam kartum arhati /
 dattvānujñāṃ prasannātmā saṃcārayasva māṃ śubhe // 210
 iti putrasamākhyātam niśamya sa pitā nṛpaḥ /
 galadaśruvilipṭāsyāś cirād evam upādiśat // 211
 hā putra kiṃ vadeyātra yat tvam saddharmalālasaḥ /
 tathā siddhyatu te sarvam abhiprāyaṃ yathā dhruvam // 212
 iti pitṛasamādiṣṭam bodhisattvaḥ sa ātmajaḥ /
 [129b] pituḥ pādāmbuje natvā svālayam samupāśrayat // 213
 tatra śayyāsanāsīno dhyātvā sarvāñ jinān smaran /

≈ L 200.10-11; H ii,44(vs.)10cd

nirvāṇasamayam paśyaṃs tasthau saṃbodhimānasaḥ // 214
 pitā śuddhodanaś cāpi rudan gatvā nijālaye /
 ātmajo 'yam vrajen nūnam iti dhyātvā nyaṣīdata // 215
 iti me pūrvasaṃkalpam atra mayā tathocyate /
 tvam api ca mahāsattva śrūtvedam anumodatu // 216
 śrūtvedam ye 'numodanti niryāṇaprārthanābhidham /
 subhāṣitam prasannās te bhavyeṣu sugatātmajāḥ // 217
 iti śāstrā samādiṣṭam śrūtvāśoko mahīpatiḥ {or: ānando mahāmatiḥ} /
 tathety abhyanumoditvā sasabhyaḥ prābhyanandata // 218

// iti niryāṇānujñāsaṃprārthanāparivarto nāmonaviṣṭatitamo 'dhyāyaḥ //

Apparatus criticus of the chapter 19

- 1a °āśoko mahīpālaḥ] A(ante corr.) B: °ānando mahāsattvaḥ A(post corr. marg.).
 1b punar upāśrito mudā] A(post corr. marg.) B: om. A(ante corr.).
 3c a[śok]am] A(ante corr.): a(!)nandaṃ A(post corr.): ānaṃdaṃ B.
 4 note] The verses 4, 5, 6 and 7 are written in the margin of A (propria manu!)
 11a 'mātyāḥ] corr.: 'mātyā A B.
 12c kapāṭa*yantrāni] ex con: kapāṭayatrāni A B.
 12 note] After the verse 12, by the hand of a person other than the original scribe of A, the following verse is added in margin of A: ekaikaṃ ca kapāṭam yat pañcapuruṣatair janaiḥ / udghāṭayanty apaghāṭayanti tacchabdārdhahoyane //. B has the same verse in body text.
 19b janāḥ] A(post corr.): janān A(ante corr.) B.
 19c mahotsāhaṃ] sic A B. Read *mahotsāhe?
 21a samupāmantrya] A(post corr. marg.) B: samupāntrya A(ante corr.).
 26a bhoḥ] corr.: bho AB.
 27b viraktikaḥ] A(post corr.): viraktakaḥ A(ante corr.) B.
 33c kāścin] A: kāścin na B.
 35a ḍhakkāṃ] A(post corr. marg.): kāṃ A(ante corr.): ḍakkāṃ B.
 39c samīkṣyaiv*āṅganāḥ] ex con: samīkṣyaiva ganāḥ A: samīkṣyaiva gaṇāḥ B.
 39d lajjābhinamatā°] A(post corr. marg.) B: lajjābhinatā° A(ante corr.).
 41cd uddīptakāmāś ca saṃ°] A(post corr. marg.) B: uddīptakāmāḥ saṃ° A(ante corr.).
 43a tataḥ] corr.: tatas A B.
 43b bodhisattvo] corr.: bodhisatvā A B.

- 45c iīmābhiḥ] sic A B.
- 49b bhartur dharmā°] A(post corr. marg.): bhartṛdharmā° A(ante corr.) B.
- 49d samupāśrayat A(post corr. marg.) B: sapāśrayat A(ante corr.).
- 52a °paśyantyor] sic A B.
- 53b °*nurāgitau] ex con: °nurāgite A B.
- 53d pramodantau] corr.: pramodantya A B.
- 54b °darśanayūthi°] A(post corr. marg.) B: °darśayūthi° A(ante corr.).
- 57d hy evam] corr.: hyaivam A.: tyaivam B.
- 62a bhoḥ] corr.: bho A B.
- 68d saṃpaśyanty evam] corr.: saṃpaśyantyaivam AB
- 75b °siddhaḥ sa susiddha°] A(post corr. marg.) B: °siddhaḥ susiddha° A(ante corr.).
- 80b yatayo 'pi ca] A(post corr. marg.): yatayāḥ A(ante corr.): yatayāpi ca B.
- 81c 'pi] B: piḥ A.
- 83d *viṣaṇṇitāśayā] ex con: viṣaṇḍitāśayā A: viṣaṇḍitāśayāḥ B.
- 90d niḥśvasanty evam] corr.: niḥśvasantyaivam A: niśvamantyaivam B.
- 94d yāvat sutam na pasyase] A(post corr. marg.): yāvac chrutaḥ na pasyase A(ante corr.): yāvac chruta vapasyase B.
- 95c avāśyam] A: avasyam B.
- 105b ta] corr.: te AB.
- 106d samācareḥ] A(post corr.): samācaret A(ante corr.): samācarat B.
- 107c dharmamayam] A(post corr. marg.) B: dharma A(ante corr.).
- 110c praśaknūyām] A (m.c.): praśaknuyām B.
- 111b sarvān asmān grased] A(post corr. marg.) A: sarvān a[.]grased A(ante corr.).
- 115d saṃsthito hi pravṛddhimān] A: saṃsthitābhiprevṛddhimān B.
- 124c °varṣeṇa] B: °vaṣeṇa A.
- 143a darśanam] A(post corr.): saṃdarśanam (ante corr.) B.
- 144d °ācarat] corr.: ācaran A B.
- 151c tāvat] corr.: tāvan A B.
- 158c tam samāyātam] A(post corr. marg.) B: tam āyātam A(ante corr.).
- 161d *saṃprārthyaivam] ex con: saṃprārthaivam A : saṃprārthevam B.
- 179b °śarīre] A(post corr. int. lin.) B: °śalīre A(ante corr.).
- 184b duḥkha*bhoginaḥ] ex con (cf. 189c): duḥkhabhāginaḥ A B.
- 192a saugatim] A: saurgatim B.
- 198a etāni saṃsāre A(post corr. marg.): etā saṃsāre A(ante corr.) B.
- 200b pitā] corr.: pitāḥ A B.

210c dattvānujñāṃ] D: dattvānujñā A B.

216 note] In A, letters of me pūrvasaṃkalpam seem to be newly overwritten letters by the hand of a person other than the original scribe of A (= Jayamuni).

218b °āśoko] A(post corr. marg.): °ānando A(ante corr.) B D || mahīpatiḥ] A(post corr.): mahāmatiḥ A(ante corr.) B D.

Colophon: iti niryā°] A(ante corr.): iti śrīlālitavistare niryā°A(post corr. marg.) B D.

4.2 TJAM 第19章の和訳 (全訳)

『出離することの許可を請う』という第19章

大地の守護者アショーカ (aśoko mahīpālah) {or: 大士アーナンダ (ānando mahāsattvaḥ)} は歎然として再び近づいて、合掌してかの出家修行者を拝すると、次のように語りました。— [1]

かの尊師、大通慧者である菩薩はどのようにして都城から出離されたのか、それをどうかお教えくださり、我らすべてによく理解させて下さい。 [2]

このように彼が乞うのを聞いて、かの阿羅漢・大慧者は、かのアショーカ {or: アーナンダ} とすべての聴衆を見つめて、次の様に教示しました。— [3]

その場にルンビニー園の精霊 (デーヴァター) が虚空におり、かの大地の王シュッドーダナに話しかけて、語りました。 [4]

「王様はどうかお知らせください。あなたの息子である菩薩は三界において欲望をもたず、悟りを得るためにきつと出家されるでしょう。」 [5]

このように精霊が語ったのを聞いて、シュッドーダナ王は精霊を見つめ、お辞儀し、ただちに立ち上がって、歩いてゆきました。 [6]

彼は顔を流れる涙で汚し、不安に心乱れ、落ち込んだ心で、宮殿の屋上にいて、周囲を眺めながらずっと過ごしました。 [7]

其処でシュッドーダナ王は大臣たちや友人たちの皆を見つめながら呼びかけて、その前で次のように命じました。 [8]

「あなたたちはあの息子が都城から出離することがないように、あなたたちの全員をもって、あらゆる点で努めなさい。」 [9]

この王の命令を聞いて、かの大臣たちや家来たちは「かしこまりました」と答え、皆がその場から急いで歩み行きました。 [10]

その地でかの大臣たちや家臣たちは速やかに王城の外側の周囲に壕を掘らせ、水を満たさせました。 [11]

そして牆壁や城壁を周囲に建立させました。戸・門扉・門をひどく堅固にさせました。[12]

また都城のあらゆる門には、鎧をつけ帯刀した兵士たちと軍の指揮官たちを配置させました。[13]

すべての十字路には兵士たちと將軍たちを置き、また乗物（馬など）を持つ軍の隊列を至る所に配置しました。[14]

このように道やあらゆる家の中庭にも車道や店の並ぶ地区にも、至る所に〔兵を〕配置して、次の様に命じました。[15]

「副王である大士が出家せんと願っている。それ故、ここで王家の系譜が途切れてしまうかもしれない。[16]

そこであなたたちはこうして夜の見張りを維持し、全員が集中して、夜も昼もよく眺めて、駐在しなさい。[17]

またあらゆる楽器を夜も昼も演奏し、至る所で途切れることがないように、大きな歓楽を活発にしなさい。」[18]

このようにあらゆる場所には彼の守護をする人々がおり、大歓楽を演奏しつつ、喜悅して過ごしました。[19]

このように〔王に〕命じられた後、かの大士や家来たちすべてはその通りに其処から去り、かの〔王子〕を守護するため、後宮の中にもやって来ました。[20]

其処で彼らは後宮の係官たちに呼びかけ、見つめながら、王からの命令をその通りに教えました。[21]

「かの王子は輪廻的生存を望まず、王位にいる人生期を捨てて、森のアーシュラマ（隠棲地）を欲しています。[22]

そこで、あの大士が森のアーシュラマに行くことがないように、あなたたちは彼の〔森に〕去りたいという意欲を阻止していただきたい。」[23]

このように大臣などの人々が命じたのを聞いて、後宮の係官たちは皆「わかりました」と答え、急いで後宮の中に去りました。[24]

彼らは其処（後宮）に戻ると、かのラティ（女神の名）に似たすべての美しい、技芸という徳性の器である女たちに呼びかけて、次の様に話しました。[25]

「おおあなたたち、あらゆる〔領域の〕学をよく知る、美しい女たちは皆これを聞いて、王の命令をその通りに実行して下さい。[26]

あの王子・菩薩は欲望を疎ましく思い、王位にいる人生期を捨てて、出家することを望んでいます。[27]

そこであなた方は、彼の心が五感官の享楽（五欲楽）を楽しむよう、性愛の大きな歓びにおいて十分に欲望を起こさせなさい。[28]

王位にいる人生期を捨てて森のアーシュラマに彼が行ってしまわないよう、努力して支配して、王座にしっかり立たせなさい。」[29]

このように彼らが教示したのを聞いて、かれら若い女たちは、「かしこまりました」と返事をし、飲んで承諾しました。[30]

その後、シュリー（或る女神の名）に等しい姿かたち、またラティの姿に等しい身体をもつ彼女たちは歌や舞を演じることによって、大きな歓楽を活発化させました。[31]

或る女たちは欣然とムラジャ（太鼓の一種）の楽器を演奏して楽しみ、或る女たちはその時歌を歌いながら喜悅し、楽しみました。[32]

或る女たちはその時飲んでトゥーリヤ（打楽器の一種）の音色を鳴らしながら楽しみ、或る女たちは嬉しげに踊りの艶やかな美を演じながら楽しみました。[33]

或る女たちは笛の美しい音色を伴って歌唱を演じました。或る女たちは欣然とヴィーナー（琵琶）を歌を伴って演奏しながら楽しみました。[34]

或る女たちは飲んで歌を伴ってダッカー（大きな太鼓）を打ち鳴らして楽しみました。或る女たちは嬉しげにペーリー（半月型の太鼓）を叩きながら喜びし、楽しみました。[35]

或る女たちは欣然とダマルやマンドウ、ディンディマやジャルジャラ、マルダラやプラヴァ（いずれも太鼓の一種）を演奏して戯れました。[36]

手拍子に従って踊る女たちは、舞踏で興奮せしめる甘い声で歌を歌いながら、装飾品（装身具）の光輝の照耀をともない、踊り戯れました。[37]

彼ら若い女たちは皆美しく、華麗な服と装身具で装飾され、五種の勝れた塗香を体につけて、よい香りの花々で身を飾っていました。[38]

かの副王（菩薩）を見て笑いながら近づいた或る女たちは、見られると、羞恥によって顔をうつむけました。[39]

或る女たちは流し目で見つめながら立ち、或る女たちは顔をうつむけ、また或る女たちは恋情を起こさせる艶めかしい嬌態を示しながら立っていました。[40]

或る女たちは羞恥心を捨てて「わごと」心を乱した女のように振舞いました。或る女たちは欲情を燃え立たせ、愛戯しようと身を寄せてきました。[41]

このように様々な方法、愛の遊戯の提示、微笑・踊り・嬌態をもって、彼女たちはかの若者を楽しませました。[42]

するとかの副王、感官を制御した者である菩薩は、性愛に愛著している彼女たちを見て、次のように考えました。[43]

「これらの美しい女たちは心が欲望・煩惱に掴まれているのだ。苦勞してでも、なんとか私の心を支配し、迷わせようとしている。[44]

その場合、私の悟りの達成のための障害にきつとなることだろう。だから私は今、これらの者たちと一緒に欲望する者として、楽しむべきではない。」[45]

このように思案し、決意して、善慧者たるかの菩薩はそこから自ら立ち上がって、自分の住まいに歩いて行きました。[46]

其処でベッドの上に乗って、老人や病人や死者たちを思い出しながら、輪廻をやめた者（解脱者）を意欲して、悟りへと心を定めました。[47]

あらゆる有情に益をもたらすという、悟りの誓戒への意欲をもち、あらゆる仏たちを憶念しながら、瞑想に集中して住しました。[48]

其処で夫の法に敬い従う、かの妃ゴーパーは、夫がベッドに坐っているのを見て、近づいてきました。[49]

世俗の法を欲している彼女が傍に坐ったのを見て、菩薩は愛欲の心をもち、笑い、見つめました。[50]

かの妃も性愛の法を欲し、表情を明るくして、性愛の欲情に染まった夫に笑いかけ、見つめました。[51]

このように互いに見つめ合ったその夫婦の間に大きな愛欲の火が燃え上がり、心の堅持を焼き滅ぼしました。[52]

そしてその夫婦は抱き合い、大きな欲愛に染まり、笑いながら見つめ合い、歓喜しながら楽しみました。[53]

その時、栄光あるチャーリトラ・チャラナ・スダルシャナ・ユーティカという名のシャクラ（インドラ神）が天界から死没して、人間界にやって来ました。[54]⁽¹⁸⁾

悟りに発願した心をもつ彼は、其処で〔それを〕見ると、ゴーパーの清らかな子宮の水に入り込みました。[55]

その時女神シュリーに等しいかの妃ヤショーダラー（＝ゴーパー）は歓喜し、正法の達成を強く意欲する、無垢の心をもつ女になりました。[56]

その後、煩悩が無い清浄な心をもつ女、ヤショーダラーは、夫であるかの大士を見つめながら、このように言いました。[57]

「わが君、私は今、心が煩悩を離れ、法を欲しています。それ故、私は布薩（ポーシャダ）という誓戒を行じたいと希望します。[58]

わが夫よ、もしあなたに法を願求する私に対して憐れみがありましたら、どうかあなたは仁慈のお心で、そのことの御許可を私に下さい。」[59]

このように妻が語るのを聞いて、智者たちの最高者であるその夫は深思し、瞬時に思考をまとめて、彼女の相好をよく観察しました。[60]

彼女の相を完全に認識すると、かの善慧者たる菩薩は、その愛しい妻であるゴーパーを見つめて、次のように教示しました。[61]

18. 釈尊の息子ラーフラとして生まれることになるこの神については既に第16章第116偈でも言及された。

「ああ、愛しい妻よ、あなたは幸せな女です。なぜならあなたの子宮に今日、一人の菩薩が天界から死没して、入ったからです。そのことを喜びなさい。[62]

そのために、愛しい妻よ、あなたの心は誓戒を行いたいと欲するのです。それ故、幸に恵まれた人よ、心を定めて、最高の誓戒を行いなさい。[63]

更にまた、ここで私の言葉をお聞きなさい。[私の] 所願を語りますので、そのことに随喜をなして、誓願に集中して過ごしなさい。[64]

愛しい妻よ、私はガヤーの菩提道場に行き、菩提樹のもとに坐して、悟りを得たいと願っています。[65]

あらゆる悪しき外道師たちに勝利するため、仏のアーシュラマに住し、正法を教示して、生類の幸福を作りたいのです。[66]

その理由から、愛しい妻よ、私は出家することを願っています。私が此処に戻ってくるまでの間、あなたは心集中して過ごして下さい。」[67]

このように夫が語ったのを聞いて、貞節な妻であるヤショーダラーは、夫であるその大士を見つめながら、こう答えました。[68]

「私もあなたと一緒に出家したいのです。わが夫よ、あなた無しで、どうして此処でこの様に私は居られるでしょう。」[69]

このように妻が言ったのを聞いて、大慧者たる菩薩は、そのよき妻・有徳の女を見つめて、再び次の様に教示しました。[70]

「愛しい妻よ、私たち二人の益のためにも、私が語ることを聞きなさい。あなたの子宮に浄行の目的を有する大士が入ったのです。[71]

この勝れた人があなたのお腹にいる間、あなたは護るべきであり、大きな敬意をもって養うべきです。[72]

輝かしい徳性の依処であるこの人が、十分に体が育って誕生した時、彼と会うために私はきっと戻ってきます。[73]

あなたは私が語ったことを真実であると考え、堅固に心集中し、一切の仏たちを憶念しながら、飲んで過ごしなさい。」[74]

かのサルヴァールタシッダ — 善き成就を [一切に] 有する者たる彼は、このように教示して、プラティサラー（随求菩薩）の偉大な明呪を、誦しながらゴーパーに与えました。[75]

そしてその最愛の妻を菩薩は見つめ、その明呪（随求陀羅尼）の効能を教えて、次の様に言いました。[76]

「愛しい妻よ、この偉大な明呪はあらゆる災禍を防ぐものです。めでたい輝きがある善き徳性を保つものであり、あらゆる危難を消滅させるものです。[77]

それ故、どんな危難の時においてもこれを常に堅持し、思い出して、女神プラティサラーを瞑想しつつ誦して、行をなしなさい。[78]

この明呪の威神力により、すべての世界の守護神たちも、眷属を伴うマートリカー（母神）たちも、星々を伴う遊星たちも、[79] また仙人たち、超自然力ある真言者たち、ヨーギン、出家者たちも、また菩薩・大士たちも、また僧団を伴った仏たちも、[80] 浄心をもつ彼らはどんな時でも常に憐れみの眼であなたを見守りながら、あらゆる悪しき危難から護ってくれるでしょう。[81]

このように考えて、この偉大な明呪を常に敬意をもって保持し、自分自身と子供とを護りながら行じなさい。」[82]

このように夫が語ったのを聞いて、かのヤショーダラーは愛の苦しみの焔に焼かれ、悲悩した心で過ごしました。[83]

その後、かのサルヴァールタシッダは母であるかのプラジャーパティー・ガウタミーのもとに行くと、お辞儀し合掌して、次のように言いました。[84]

「母よ、私はガヤーシールシャ（象頭山）で最高の誓行を行ってから、菩提道場に赴き、悟りを得たいと願っています。[85]

その後、カーシーの都に行つて、ムリガダーヴァ（鹿の苑）における仏のアーシュラムで正法を説いて、生類を幸せにしたいのです。[86]

その後この地にも戻つて来て、あなたにも会い、正法を説いて、常に幸せにしたいのです。[87]

その後、あらゆる場所で人々に正法を教示しながら、生類を法から成るもの変えて後、寂滅の至福に入ることを望んでいます。[88]

母よ、以上の理由により、私は出家することを願っております。その許可を私にお与えになり、法の輝かしい名声を得てください。」[89]

このように息子が語ったのを聞くと、かのガウタミーは混迷した意識の状態に陥りましたが、久しい後に意識を取り戻すと、溜息をつきながら次の様に言いました。[90]

「ああ運命よ、私がどんな悪いことをしたというのでしょうか。私の唯一の息子であるその彼が私を捨てようと欲するとは、考えられないことです。[91]

それについて、ここで私に何が出来るでしょう。私の理性は引き裂かれています。この悲しみの火に焼かれている私をここで、誰が清らかにしてくれるでしょう。[92]

ああ、わが命よ、息子が行ってしまう前に、消え去ってしまいなさい。肉体が悲しみの火に焼かれている時に、[この体に] 留まっても、お前にいかなる良いことが得られるだろう。[93]

お前（この命）は疑いなく、私のこの感官を伴う肉体を捨て去って、立ち去ってゆく。それゆえ、お前が息子を守れなくなる前に、すぐさま出て行くがよい。[94]

もし去らないのなら、その間お前はきっと苦しみを得るだろう。必ず去らねばならない。仏たちを憶念しながら去りなさい。」[95]

そう、母たるかのガウタミーは顔を涙で濡らし、嘆くと、その息子・大士を見つめて次の様に言いました。[96]

「王子よ、あなたは私にとって唯一無二の息子ではありませんか。どうして私と王国を構成する人々とを棄て、そして何処に行こうと望むのですか。[97]

一体あなたには苦悩が、また何かの恐怖が生じないのですか。言いなさい。父や親族たち、私や親縁の者たちを、あなたは棄てようと欲するのですから。[98]

また妻たち、愛しい美しい女たち、シュリーの如き容姿の者たち、ラティそっくりの者たち、これらすべての女も棄てて、どうして幸せを得ようと欲するのですか。[99]

もしこれらの女たちがあなたに棄てられたなら、あなたとの別離の悲しみの火に焼かれて、ヤマの住まい（死の国）に至ることでしょう。[100]

その時、あなたがもつ幸せ、福德、すばらしい光輝ある名声と善き徳性とは一体何ですか。もし悟りにも達し、生類に益をなしたとしても。[101]

このように考えて、偉大な智者よ、今は王位にいる人生期に留まり、乞う者たちに好きなだけ布施をして、誓戒を堅持しつつ、楽しく暮らしなさい。[102]

あなたに息子が生まれたなら、法のもとで彼を育て、王位にいる人生期の中に安立させ、国王にして、それから去り行きなさい。[103]

体が老いに襲われ、感官が打ち負かされ、老衰した時、仏教の誓戒を堅持して、生類を益する行をなしなさい。[104]

もしあなたに森での仙人の行と誓戒への希望があるなら、その時に感官の対象の快樂を捨てて、森のアーシュラマに行きなさい。[105]

もしこのようにすれば、あなたには常に災のない幸せがあるでしょう。悟りにも達して、菩提行を行いなさい。[106]

正法を教示して、あらゆる場所で幸せな状態を作り、生類を法から成るものに変えて、善き寂滅の至福を得なさい。」[107]

このように母が諭したのをかの菩薩は聞いて、その母を見つめ、再び次の様に語りました。[108]

「母上、あなたが語られたことはもっともです。しかし私の言葉を聞いて下さい。なぜなら諸仏の行を行いたいと今、私は望んでいるのです。[109]

年老いて、体が老いに襲われ、病に感官が害されたなら、その時どうやって諸仏の誓行を行うことが出来るのでしょうか。[110]

不意に死が突然、キス（鼻で嗅ぐようにするキス）をし、われわれすべてを呑み込むでしょう。輪廻的生存においては、三界 [すべて] においても、誰もが死の支配下にあります。[111]

母上、このように見て、私は今、菩提行の誓戒を行いつつ煩惱・魔の諸群を克服し、悟りを得たいと望んでいるのです。[112]

その後私はあらゆる人々に正法を説き明かしながら、生類を法から成るものに変えた後、寂滅の至福に至りたいのです。[113]

ですからあなたは此処でどうか悲嘆をなされしないで下さい。正法を行ずる私との別離の苦しみと危惧も、決してお考えになつてはなりません。[114]

なぜなら、私の種として、ゴーパーの子宮の中に一人の菩薩・大士がおり、成長しつつあります。[115]

この者が男の子として生まれた時、私のその息子の顔を見て会うために、きっと私は戻ってきます。[116]

此処に私は常に住して、[彼を] 訓育し、正法の成就がある菩提道に安立せしめ、生類の益のために行為せしめます。[117]

以上、私が語ったことは本当であり、母上よ、聞いて理解をなされ、悲嘆されないで下さい。此処で私の正法の成就をお喜びになってください。[118]

母上、妊娠した息子の嫁、ヤショードラーを、あなたは常に篤い配慮をもって守護されて、自分の娘の如くお守りになって下さい。[119]

また私の愛しいこれらの美しい女たちすべてをも、私が此処に戻ってくるまで、あなたは守護し、お守りになって下さい。[120]

きっと私は此処に戻って来て、これらのすべての女たちによく理解を得させ、菩提道へと繋ぎ入れて、常に浄行を行わせましょう。[121]

母上、このように御教示になり、努力して理解を得させ、励ましながら、守護し、お守りになって下さい。[122]

私が正法を説き明かすために此処に戻ってくるまでは、あなたも善逝たちを憶念しながら、心集中してお過ごし下さい。[123]

悟りを得た私は、きっと最初にここに戻って来ます。正法という不死の甘露の雨をもってあなたたちを必ず飲ばせます。[124]

以上のことを正しく認識されて、私が此処に戻ってくるまでは、これらの女たちをお守りながら、お過ごしください。悲嘆されてはいけません。」[125]

このように息子が語ったのを聞き、かのガウタミーはよく理解を得たものの、愛情の苦しみの火に焼かれながら、溜息ばかりつきながら過ごしていました。[126]

それを見て、かの女たちすべてがただちに集まって来ました。その母を見つめながら取り巻いて、かしずきました。[127]

かしづくそれらの女たちを見て、眼に涙を浮かべたガウタミーは、すべての女たちに理解を得させるために、見つめながら次の様に語りました。[128]

「[皆さんの] かの夫たる大士は生類の益のため悟りを欲し、私たちすべてを棄てて、出家しようと願っています。[129]

それ故、あの人が悟りに達してから此処に戻ってくるまでの間、美しいあなた方は皆、心をしっかり保って過ごして下さい。」[130]

このように彼女が語ったのを聞いて、すべてのその美しい女たちはかの夫のもとに赴き、深く頭を下げて、次のように語りました。[131]

「わが君、私たち全員もあなたと同様に一緒に誓戒を行うことを欲します。それ故、あなたは私たちに〔そのご許可の〕恩情をおかけ下さいますように。[132]

あなたのご命令を頭に戴いて、心を定めて、私たちは行動いたします。それ故、あなたは優しい心で私たちをお導き下さい。」[133]

このように彼女らが語ったのを聞いて、かの善慧者たる菩薩は、かれら美しい女たちすべてをみつめながら、次の様に教示しました。[134]

「あなたたちは皆若い女であり、菩提行をなすのは甚だ困難です。それ故、さしあたって今は、あなたたちはそのように行動することは出来ません。[135]

そこで、私が悟りに達して此処に戻ってくるまでの間、あなたたちは心を定めて、誓戒を行じながら過ごして下さい。[136]

私は悟りに達してから最初に此処に戻って来ます。正法という不死の甘露の飲物によって私は必ずあなた方を満足させます。[137]

以上のことを正しく認識して、あなたたちは皆、心集中して、仏たちを憶念しながら誓戒を堅持し、心をしっかり保って過ごして下さい。」[138]

このように教示すると、かの菩薩は立ち上がり、去って自分の住まいに戻り、瞑想に集中して過ごしました。[139]

それらの若い女たちも皆、お辞儀して自分の住まいに戻り、夫たるかの人を憶念しながら、瞑想に集中して過ごしました。[140]

さてある時、寝台に横たわっていたかの菩薩は起き上がり、出家の時〔の到来〕を見て、静思して、次の様に考えました。[141]

「父である王・大地の守護者の許可を得ないで、私が気づかれずに〔ここを〕出離することは適切でなく、最もよいことではない。[142]

それ故、父と会って、慰めながら許可を得、明るく澄んだ気持ちで出離しよう。そうするのが私にとって最もよい。」[143]

そのように決意して、清浄な心をもつ菩薩は立ち上がり、父たる王の宮殿に進み、近づきました。[144]

威神力をもつかの菩薩はその宮殿の屋上にいて、三昧に心を集中し、光明を発しながら留まっていました。[145]

その光明はその宮殿の王の住まいに拡がり、輝かせながら黒闇を打ち破り、昼間のように明るくしました。[146]

シュッドーダナ王はその拵がった光明を見て、気づいて、「一体、今や早朝になって、太陽が昇ったのだろうか」と、[147] そう呟きながら、起き上がり、周囲を見渡しながらか驚嘆し、侍従を呼んで、次の様に尋ねました。[148]

「一体、今やもう早朝になって、今太陽も昇ったのだろうか。なぜなら、此処でこの拵がった光明が宮殿を輝かせている。」[149]

このように尋ねられた侍従は、立ち上がり、よく観察してから、王の前に行き、次の様に言いました。[150]

「閣下、今は夜であり、真夜中を過ぎておりません。どうして今、夜明けとなるのでしょうか。どうして太陽が昇るのでしょうか。[151]

太陽が昇ったなら、地面に影が生じるはずですよ。もし暁なら、あらゆる鳥たちが啼き、犬たちも起きて吠えるはずですよ。[152]

この光明は心に快く、清涼であり、安楽を生じさせるものですが、太陽光は体を熱して、暑い熱を拵げるはずですよ。[153]

きっと此処に大通力をもつ菩薩が来られたのです。彼がもつ美しい輝きがこの住まいに放たれたのです。」[154]

このように彼が語ったのを聞いて、〔菩薩の〕父たるかのシュッドーダナ王は立ち上がって、外に出て、あらゆる所を観察しました。[155]

その時、発せられている光明を見て、かの王は驚愕を得て、これは何者の光明が来たのだろうかと思慮しながら、観察しました。[156]

其処でかれはあらゆる所を観察すると、かの息子である菩薩が宮殿の屋上に居て、瞑想しながら留まっているのを見つけました。[157]

彼を見ると、かの父王はすぐ近づきました。やって来たかの父を見て、息子である彼は立ち上がりました。[158]

其処で、父たるかの王はその光り輝いている息子を見つめながら近づくと、清浄な座に坐りました。[159]

すると光り輝きながら、かの菩薩・大士もその父親を見つめて、深くお辞儀をされると、近づいて坐りました。[160]

其処で、光輝ある菩薩・大士は合掌しながら、明るく澄んだ思いで、かの父に請い願いました。[161]

「父上、私は正法を行じたいと願っております。どうかそのことの許可をお与えください。私に法の輝きと名誉を得させて下さい。」[162]

このように息子が語ったのを聞いて、父であるかの王は滴る涙で顔を濡らし、その息子を見つめながら、次の様に教示しました。[163]

「ああ、息子よ、どうしてお前は私たちを棄てて、出家したいと願うのか。一体、どんな苦しみや怖れがお前にあるのか。私はそれを取り除こう。言いなさい。[164]

もしお前が王権を欲するなら、お前に必ず一切を譲ろう。今日、灌頂を行い、人民の益のために私はお前を王位に立たせよう。[165]

年老いた私は誓戒を行うため、森のアーシュラマに行くことにしよう。それ故、お前は王位にいる人生期を過ぎて、人民の益になる誓行を行いなさい。[166]

もしわれわれ二人がこのようであるならば、法の輝きのめでたい幸が常にあるであろう。この私の言葉を聞いて、今は家の〔存続のための〕誓行を行いなさい。[167]

お前も年を取った時に、望むなら〔森に〕去りなさい。今お前に息子がいないのに、どうして王権を棄てて出離しようとするのか。[168]

もしお前に息子が生まれれば、彼に統治の法を教育してやり、灌頂して国王にしてから、その時に諸仏の誓戒をお前は行いなさい。」[169]

このように父が語ったのを聞いて、善慧者たるかの菩薩は、その父である王を見つめながら次の様に言いました。[170]

「わが父、王よ。何のために私が出家せんと望むのか、どうかお聞き下さい。それを私はあなたにお話しします。決して悲嘆せず、〔御許可の〕恩情を私におかけ下さい。[171]

父よ、この輪廻的生存においては、様々な苦しみと怖れがあります。それらを観察して、私の心は悟りのための誓行を願うのです。[172]

輪廻的生存においては、最初に、母の胎に入った時に大きな苦があります。まるで地獄のように〔胎児の〕体はずっと不浄の中に浸されたままでいます。[173]

そのように不浄と混じり合っていた〔胎児〕は、誕生の時にようやく母の胎から苦しみを伴って外に出て、ひどく惑乱した意識の状態で横たわります。[174]

その後幼年期に、愚かな心をもつ者として、動物のように分別なく、全身が飢えや渇きの火に焼かれ、ひたすら泣くばかりで過ごします。[175]

少年期には、遊びたいという欲望に悩まされ、入手できないのに美味に愛著して苦悩し、鬭諍に絶えず悩んで、大きな苦があります。[176]

青年期には、愛欲・煩惱の火に焼かれて大きな苦があり、儲けることの苦勞に悩む心はいつも落ちつきません。[177]

成功や栄光の瞬間も、雲のように無常です。親しい友達もたちまち悪人になって、害を与えるでしょう。[178]

年を取ったなら、老いに体は襲われ、感官は老衰し、享樂においても意欲が失せます。まして法を成就することがありえるでしょうか。[179]

様々な病気は体力と勇健さを害して、法の光輝を達成する意欲を破壊してしまう大きな敵です。[180]

また死は生類の殺戮者であり、暴悪で、冷酷な心を持ち、安心できず、防御不可能で、あらゆる任務に終わりをもたらず、力ある者です。[181]

輪廻においてこれらの苦しみと怖れによって悩まされたあらゆる者は、欲望の享受の対象に甚だ愛著し、好きなように行為します。[182]

そして彼らは欠損した心を持ち、煩惱と慢心・驕慢を有し、恐ろしい犯罪にすら愛著し、楽しんで行為します。[183]

そして彼らは極悪人として悪しき運命を持ち、苦を味わい、堪えられない苦受に襲われて死んで、ヤマ（死王）の住まいに赴きます。[184]

やって来た彼らを見て、公平に裁くかの法王（ヤマ）は、彼らの業を調べて、業果を味わうように行き先を命じるでしょう。[185]

[法王の] 部下たちはただちに悪人たちを導いて、地獄に投げ入れます。彼らは遵法者たちをよく見て、神々の住まいに行かせます。[186]

其処（天界）で善行者たちはあらゆる天の至福・快樂をそなえ、慢心・驕慢を持ち、愛樂して、好きなように行為します。[187]

その後、心が煩惱に汚され、放逸となって悪罵をなす彼ら（神々）は、運命に従って死没して、地獄にすら墮ちるでしょう。[188]

其処（地獄）で彼らすべての悪人たちは自分の業を享受しながら、苦を味わい、あらゆる〔種類の〕地獄を彷徨うでしょう。[189]

その後、彼らは激しい苦痛に苦しめられ、心は後悔に打たれて、「ああ苦しい」と言いながら悲悩して過ごすでしょう。[190]

しかしもし彼らが善逝（仏）を思い出して、帰依の心で礼拝するなら、その時善逝たちは彼らを見て、白淨の光明を届かせ、[191] 仏の示現の姿を化作して、彼らのもとに送ります。それらの仏の姿を見て、彼らすべてはその光明に包まれます。[192]

安樂であることの驚きに満たされて、それらを見て歡喜し、その前に近づき、歡んで礼拝するでしょう。[193]

その時、淨らかな心で、清淨な感官・身体をもった彼らはその後、上に昇って、仏の住まいであるスカヴァティー（極樂）に至るでしょう。[194]

このように諸仏こそは、あらゆる所で生類に利益を施す者です。それ故、彼らに帰依をなして、常に誓戒を行うべきなのです。[195]

仏たちに帰依し、常に誓戒を行う者たちは、悪い世界（惡趣）には行きません。仏の住まいに赴きます。[196]

父上よ、このように私は認識して、仏たちに帰依し、菩提行の誓戒を堅持しつつ、悟りを得たいと願っています。[197]

更にまた、輪廻におけるこれらの様々な苦しみをも怖れをも觀察して、私は出家したいと願うのです。[198]

以上のことを正確に認識され、もしあなたが正法を希求するのでしたら、その〔出家行〕への許可を私にお与えになって、絶えず淨行をなさってください。」[199]

このように息子が語ったのを聞いて、父である王は愛情の苦しみの火に心が焼かれ、しばし混迷した意識の状態に陥っていました。[200]

久しい後にかの王は意識を取り戻し、目覚めると、眼から涙を流し、再びかの息子を見つめて、次の様に語りました。[201]

「三界において、一体誰の輪廻的生存において、苦しみと怖れが存在しないだろうか。どんな者にも至る所で、不可避なる諸状況があるのだ。[202]

この世界で誰が老い・病・死によって接吻をされないだろうか。これらの者たちは皆、自分の運命に従って刹那の成功と不運の時をもっている。[203]

だから若い間は、ここで王たることの誓行を実行しなさい。年を取ったら仏教の誓戒を堅持し、専念して行じなさい。」[204]

このように父が語ったのを聞いて、大慧者たる菩薩は、その父を見つめて、再び次の様に言いました。[205]

「老い、非力となり、老衰して、享樂においても歓喜心が失せた者が、どうして悟りに達して、菩提行の誓戒を行じることができるでしょうか。[206]

輪廻的生存においては自分の運命により病も災難も死もあると、そう思いながら、私はここでそのように王位を楽しむことはできません。[207]

法こそが生類の救護者であり、どんなところでも常に付き添って [守って] くれる者です。それ故、正法を得るために、私は出家したいのです。[208]

もしあなたに私への愛情があるのでしたら、このことの御許可を私に下さい。この法の力によって、あなたも正法を得ることでしょう。[209]

私の三界の生類を益する仕事に対して、妨げをなされてはいけません。仁慈のお心で許可をお与え下さり、私に浄行を行わせて下さい。」[210]

このように息子が語ったのを聞いて、かの父である王は、こぼす涙に顔を濡らし、長く経ってから、次のように言葉を与えました。[211]

「ああ、息子よ、ここで私は何を言えるだろうか、お前は正法を熱望しているのだから。お前のすべての目標がその通りにきつと成就されるように祈る。」[212]

このように父が教示されたのを [聞いて]、息子であるかの菩薩は父の蓮華の両足を拝むと、自分の住まいに赴きました。[213]

其処でベッドに坐って瞑想し、あらゆる仏たちを憶念しながら、涅槃のための時を見ながら、悟りに心を向けて、過ぎました。[214]

一方、父たるシュッドーダナ王は泣きながら自分の住まいに行き、「きつとあの子は出離するだろう」と思い耽りながら坐っていました。[215]

— 以上、私の昔の決意を、ここで私はその通りに語りました。大士よ、あなたもこれを聞いて、随喜されますように。[216]⁽¹⁹⁾

『出離 [の許可] を請う』という名のこの善説を聞いて随喜する者であれば、その悦ぶ者たちは、仏の子となることでしょう。— [217]

以上のように師が教示されたのを聞いて、大地の王アショーカ (āsoko mahīpatih) {or: 大慧者アーナンダ (ānando mahāmatih)} は「わかりました」と随喜して、集会の出席者たちと共に喜んで信受しました。[218]

『出離することの許可を請う』という品、第19章 [おわる]。

※本研究は JSPS 科研費 (21H00470) の助成を受けたものである。

<キーワード> ネパール仏教、仏教説話文学、仏伝、Tathāgatajanmāvadānamālā, Mahāvastu, Lalitavistara, Buddhacarita, Karuṇāpuṇḍarīkasūtra

(九州大学大学院教授, Ph.D.)

19. この 216 偈で「以上、私の昔の決意を」(iti me pūrvasaṃkalpam) という表現があり、この表現に従えば、この説法はウパグプタではなく「私」すなわち釈尊によってなされたことになる。ただしこの me pūrvasaṃkalpam の箇所は、字が筆写人 X (= Jayamuni) の通常の筆跡と違って、この箇所だけ後から字が上書きされて修正された可能性がある。

南アジア古典学 第17号

2022年7月30日発行

編集委員会：岡野潔，片岡啓

発行者：九州大学文学部インド哲学史研究室

〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744

イーストゾーン 九州大学文学部

TEL & FAX 092-802-5087

<https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~indology/>

印刷所：福岡市博多区博多駅前1丁目23番28号

(株) ヨシミ工産

TEL 092-481-9559

www.e-yoshimi.jp/company.html

South Asian Classical Studies 17

July 30, 2022

Edited and published by

Department of Indology

Kyushu University

Motooka Nishi-ku Fukuoka-city

Fukuoka 819-0395 JAPAN

Editorial Board: OKANO Kiyoshi, KATAOKA Kei

Printed by Yoshimi

南アジア古典学

2022

第17号

目次

Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (11) —TJAM 第16章～第19章—	岡野 潔	1
梵文『法華経』における動詞 <i>ās</i> の活用について	笠松 直	125
ジュニャーナシュリーミトラ著『ヨーガ行者の確定』和訳研究(中)	護山 真也	137
ガワインタシ著『縁起大論』研究:「業の解説」訳註	矢ノ下 智也	161
ネパールの演劇写本 ジャガトプラカーシャ・マッラ王のネワール語歌集(5) ルクミニー誘拐	北田 信	179
『バーヴァナーの分析』における <i>sāmānādhikarāṇya</i> 議論: クマーリラからマンダナへのバーヴァナー理論の進展について	斉藤 茜	189
Śāntarakṣita's Answer to Kumāriḷa's Critique of the Buddha's Speakerhood	Kei KATAOKA	241

九州大学大学院人文科学府・文学部

インド哲学史研究室

SOUTH ASIAN CLASSICAL STUDIES

No. 17

2022

CONTENTS

A Study of the <i>Avadānakalpalatā</i> and the <i>Avadānamālās</i> (11) — TJAM Chapters 16–19 —	OKANO Kiyoshi	1
The Present Forms of <i>ās</i> in the <i>Saddharmapuṇḍarīka-sūtra</i>	KASAMATSU Sunao	125
An Annotated Japanese Translation of Jñānaśrīmitra's <i>Yoginirṇaya</i> (II)	MORIYAMA Shinya	137
A Study of <i>rTen 'brel chen mo</i> by Ngag dbang bkra shis: An Annotated Translation of the Section Entitled "Explanation of Karma"	YANOSHITA Tomoya	161
Dramatic Manuscripts from Nepal: Jagatprakāśa Malla's Newari songs (5) Rukmiṇīharaṇa	KITADA Makoto	179
Discussion on <i>Sāmānādhikaraṇya</i> in Maṇḍana Miśra's <i>Bhāvanāviveka</i>	SAITO Akane	189
Śāntarakṣita's Answer to Kumārila's Critique of the Buddha's Speakerhood	KATAOKA Kei	241